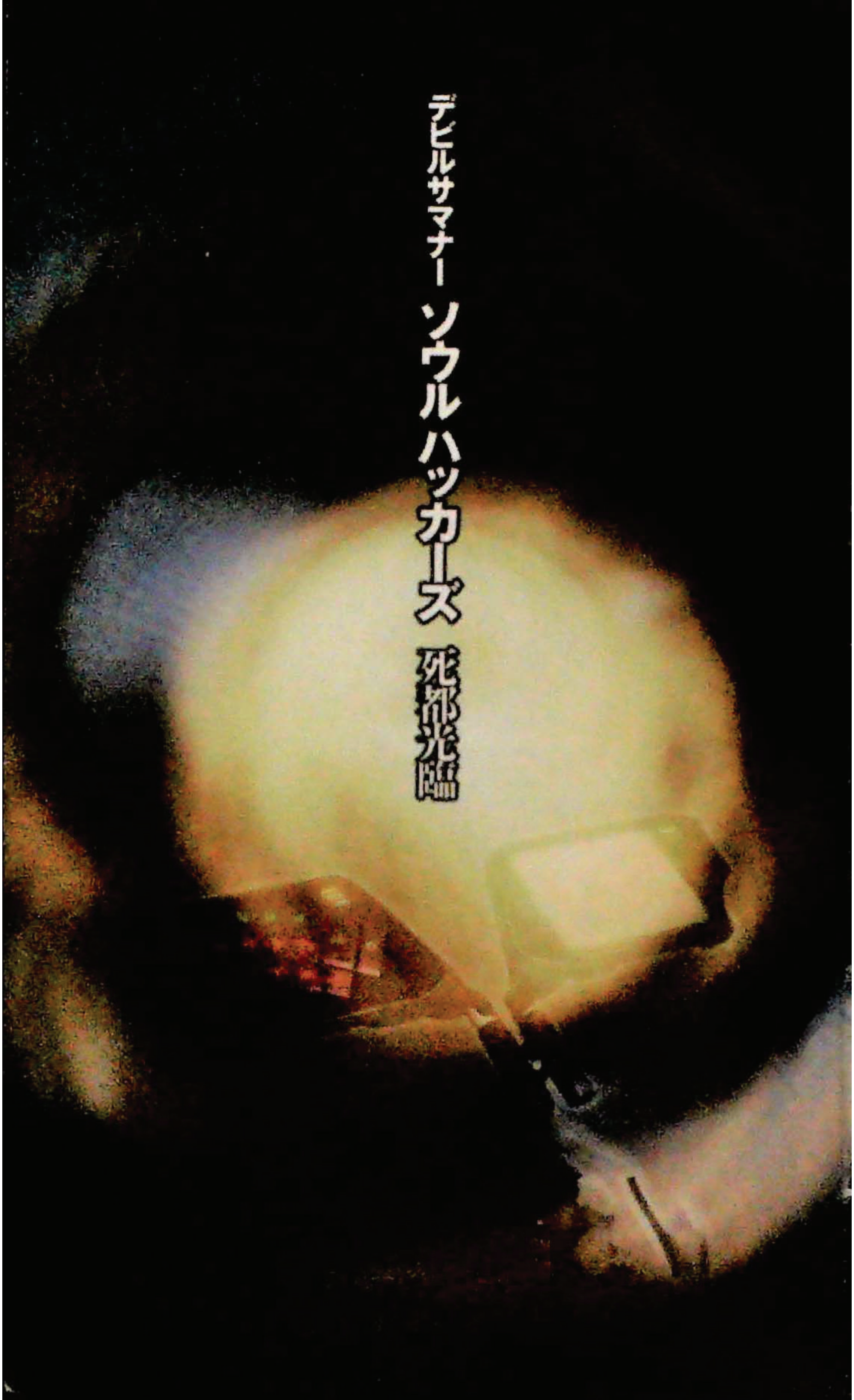
デビルサマナー ソウルハッカーズ

死都光臨



デビルサマナー ソウルハッカーズ
死都光臨

ASPECT NOVELS

CONTENTS

サナギ 死に至る病……5

スプーキーズ 死と接吻……115

マニトゥ 死を想え……183

エピローグ……287

サナギ ―死に至る病―

1

――急がねばならない。すべての魂を奴が飲み干す前に。私の名はレッドマン。急がねばならない。

いつもの声がした。男の、初老の男の囁くような声だ。繰り返し、繰り返し、声は囁き続ける。

そして〈彼〉は知るのだ。

これが夢であることを。いつも見る、あの夢であることを。

気がつけば、〈彼〉は映画館の中にいる。

声はいつの間にか消え、微かに音楽が聞こえる。小さな小さな、ノイズまじりの小さな声で唄うアベ・マリア。静まり返った薄暗い館内は、ひどく寒い。いつからここにいるのか、床を

這(は)う冷気に〈彼〉の足先はじんじんと痛んでいた。
ギアがフィルムを送り出す音。歯車から歯車へと――。
カタカタカタカタカタカタ。
映画が始まった。
光の粒子がスクリーンにモノクロームの陰影を映し出す。
荒れた画像だ。フィルムに雨が降っている。古びた映像に収まっているのは、しかし超近代的な建物だ。アルゴンソフト・ネットサービス・ビル、〈彼〉のよく知っているビルだ。
男はその扉の前に立っていた。
モノクロだった画像が、いつの間にか色彩を得ている。
それと同時に〈彼〉は、フィルムの中の男の視線で風景を見ていることに気がつく。
〈彼〉は男であり、男は〈彼〉だ。
それに違和感を感じないのは、夢の中特有のロジックに支配されているからか。
男はビルの中に入っていく。
男の名はウラベ。職業はデビルサマナー。
聞いたこともない職種だが、夢の中ではそれが何を意味しているのかを〈彼〉は知っている。
悪魔を召喚し、それを自らの手足のように使う、それが悪魔召喚師(デビルサマナー)。
悪魔？
〈彼〉の頭の中に疑問が浮かび、すぐに消える。夢の中では〈彼〉はウラベという男なのだ。

〈彼〉は頭の隅に追いやられ、ただその画像を眺めているだけ。
ウラベは玄関の読み取り機にカードを差し込んだ。真っ白のカードだ。
扉が開き、ウラベはそのビルの警備の甘さに苦笑する。
玄関ホールにあるステンレスの柱に己れの姿が映った。
中折れ帽に中途半端な長髪（しかもいささか脂っぽい）。草臥(くたび)れた背広とシャツ。少なくとも身なりに気を使うタイプの人間ではなさそうだ。だが誰も男の服装になど興味を持たないだろう。いや、持ったとしてもじろじろと男の服装を見ることは躊躇(ちゅうちょ)するだろう。鏡に映る己れを（つまりは夢見る〈彼〉を）射抜くように見つめるウラベの目は、猛禽(もうきん)類のように鋭い。必要であるのなら表情を変えずに人殺しができる人間の目だ。
――悔いはないか。
ウラベの頭の中に問い掛ける声が聞こえる。それは夢の始まりに聞こえる声と同じものだ。
今さら。
ウラベは呟(つぶや)く。
ファントムソサエティは俺の敵でもある。利害が一致したからあんたの頼みを聞いた。
――命を捨てることになるかもしれんが。
たかだかこのビルの端末からデータを盗み取るだけだ。もっと危険な仕事を今まで何度もこなしてきた。
――これはおまえの思っている以上に危険な仕事だ。

そうだとしても俺には関係ない。
——死を恐れぬのか。
死ぬことを恐れはしない。今までそうやってきたし、これからもそうだ。
——再び問うが、本当に悔いはないのか。
答えることなく、ウラベはエレベーターに向かった。エレベーターの前に死体が横たわっていた。何かを摑みとるように曲げた指。くの字にぎゅっと縮めた身体。誰が見てもそれが死体であることを見間違うことはないだろう。それは人の形をした炭だ。真っ黒に焦げたそれからは、まだぶすぶすと煙があがっている。
異臭が鼻をついた。
悪魔を放ったのか。
ウラベは陰気に呟いた。
俺の侵入に気づいたからか。それならば無茶なことをする。
やめたはずの煙草が無性に吸いたくなった。ポケットを探る。隅の方に引っかかるようにして残っていた百円ライターが出てくる。煙草は当然ない。やめたのは一年前。妻と子供がファントムソサエティによって殺された日からだ。それは〈彼〉らの報復。そしてウラベが再び〈彼〉らに報復を企てる。憎悪は憎悪を生む。そして生み出された憎悪が、再び憎悪を生む。無限に増殖し続ける憎悪、暴力、そして死。
黒焦げの死体をまたいでエレベーターに乗る。行き先は決まっている。電算機室。そこの端

末にウラベの必要とするものがある。
ウラベはホルスターから銃を取り出した。いや、銃ではない。ハンドガンタイプのコンピュータだ。ウラベがトリガーを引く。すると太い銃身が左右に蝶の羽のように開いた。モニターとキーボードが現れる。その小さなキーを、無骨な指先で器用に操作する。
六芒星形がモニターに浮かび、造魔召喚の赤い文字が点滅する。
「お呼びでございますか、御主人様」
背後から声がした。低い女の声だ。ウラベは振り返らず、〈彼〉にはその姿が見えなかった。見えなかったが知っていた。青銅の皮膚を持つ等身大の人形。その喉には太い鎖がまかれている。造魔、つまり人工的に造られた悪魔だ。ウラベがその手で造り出した悪魔が背後に立っている。その名は夜。渾沌の娘。その兄は幽冥、源初の暗黒。
〈彼〉の知らぬ知識が次々と頭の中に浮かぶ。
「力を借りたい」
ウラベが言うと、扉が開いた。ニュクスを従え、廊下に出る。
口寂しさに、未練たらしくライターを咥えた。
「ほら、早速の仕事だ」
ゆらり、と眼の前に男が現れた。裸身とも古臭い背広を身に着けているとも見える。その輪郭が曖昧だ。朝の陽射しにたつ陽炎のように。二人目の男が、そして三人、四人、合計五人の男たちが現れた。廊下の奥でウラベを待ち構えている。

「いかがいたしましょう」
ニュクスがあくまで控え目にそう言った。
「いつもと同じさ」
言うと同時にウラベは駆け出した。
その手にいつの間にか大振りのナイフが握られている。
それはあまりにも手早く、熟練した職人の手つきだった。
二人の男がきれいに喉を一文字に裂かれた。残りの三人にニュクスの拳が飛ぶ。ただの突きではない。その拳は腹を突き破り頭蓋を叩き割った。
なす術もなく五体の悪魔たちの姿が消え去る。ウラベは脚を止めず、そのまま走る。影のようにニュクスが従う。
電算機室を眼の前に、一人の女が立っていた。蒼ざめた顔を身にまとったショールで覆っている。よく見れば腰から下が逆についていた。
その細い手がウラベたちに伸ばされたかと思うと、掌から火球が弾け飛んだ。エレベーター前の男を焼き殺したのはこの女だろう。
だがウラベもニュクスも、駆ける速度に変わりはない。
ニュクスが複雑な印を結んだ。
火球は走るウラベの眼前で弾け、花火のように火の粉を散らして砕けた。
その時には女の前に一歩踏み出したウラベがその首を掻き切っていた。

顔を隠していたショールが裂け、その顔が一瞬見えた。女には口がなかった。鼻の下から顎までつるりとした皮膚が覆っている。そのない口で絶叫をあげ、女の姿は消えた。
電算機室の扉の横のスリットに、白紙のカードを入れる。扉はあっさりと開いた。
さして広い部屋ではない。目的の端末はすぐに見つかった。電源を入れると唸るような音とともにモニターが生き返った。ガンタイプのコンピュータからジャックを引き出す。その先を端末につないだ。キーボードを操作する。
動き始めた画面がすぐに止まった。
モニターには「パスワード?」の文字が点滅している。
「なるほど。ここだけは多少警備に気を使っているらしいな」
薄笑いを浮かべながら、ウラベはさらにキーボードを操作した。さしたる苦労もなくウラベはパスワードを入力し終え、さらに何重かのトラップをくぐり抜け、本命のデータにつきあたった。
「ネミッサ・プログラム」
それがそのデータの名前だった。
ずいぶんと重いデータだな。
舌打ちし、ウラベはしばらく考え込んだ。
ガンタイプコンピュータの空き容量を遥かに越えている。
「ニュクス、しばらくお別れだ」

言いながらウラベはキーを打った。
ニュクスの身体が砂塵のように分解され、消え去った。さらにウラベは悪魔を召喚するためのプログラムをすべて消去した。これで悪魔は召喚できなくなる。ここまでで出会った悪魔なら一人ででも対処できると考えての苦渋の策だった。
消去し終わるとネミッサ・プログラムをコピーし始める。多少の時間はかかったが、それでもすべてのデータを写し取るのに成功した。
ふふっ……。
どこからか笑い声が聞こえた。若い女の笑い声だ。ウラベは周囲を見回した。誰もいない。幻聴、と思うにはあまりにもリアルな笑い声だった。不思議ではあったが、ここでその原因を追及している暇はない。ウラベは端末から離れて後ろを振り返った。
眼の前に男が立っていた。
魔法のようだった。
さっき振り向いた時、そこには誰もいなかったのだ。ウラベを幻惑するような、こんな真似ができる人物はただ一人。
「フィネガン……」
きれいに撫でつけられたオールバック。幾何学的とも言えるほど整った顎鬚。黒いサングラスに眼は隠されている。その眼を見たものは誰もいない。眼を見たものは死ぬからだ、というのが組織の間で囁かれていた伝説だ。

黒い革手袋に葉巻を挟んでいる。その香りがようやくウラベの鼻先に漂ってきた。
古いギャング映画の主人公のようにポーズをとった男は、嘲笑を浮かべて言った。
「堕ちたもんだな、ウラベ。泥棒のまねごとか」
「まねごとじゃない。俺は泥棒だ」
フィネガンは鼻先で笑った。
「裏切者は性根まで腐っているとみえる」
「ビルの中に悪魔を放つような奴にそんなことを言われたくないな」
「あれはわたしが放ったのではない。あれが出たから、わたしたちはここに集まってきたんだ。事態を収拾するためにな」
「組織の要請か」
「組織の手を逃れた男に答える必要はないな。まったく見下げ果てた男だ。組織の中にはまだおまえの名を聞いただけで震えあがるものがいるというのに。その名を汚すつもりか」
「組織にいた時ほど汚れてはいないさ」
腕を一振りすると、ウラベの右手にナイフが現れた。
「まさかわたしと戦うつもりじゃないだろうな」
からかうようにフィネガンは言った。
ウラベは召喚プログラムをすべて消去していた。もう悪魔は召喚できない。そしてフィネガンが、悪魔を召喚することなく戦える相手でないことを、ウラベは知っていた。

だが……。
「そのつもりだと言ったらどうする」
「それほどの馬鹿だとは思わなかった」
「人を見る目がないんだな」
ウラベは突然走り出した。出口に向けて。
いかなることがあっても、敵に背を向ける人間ではなかった。だからこそ、さすがのフィネガンも虚を突かれた。いや、呆れていたのかもしれない。フィネガンはただじっと走り去るウラベを見送った。
だがウラベは、フィネガンに何と思われているか悩む余裕はなかった。ここで死ぬわけにはいかなかった。何としても手に入れたデータをレッドマンに届けなければならないのだ。
エレベーターは閉じ込められる可能性が高い。ウラベは非常階段へ走った。スチールの重い扉を開けると、階下から複数の足音が聞こえた。間違いなくフィネガンの配下の者たちだ。人間相手であれば何人であろうと突破する自信があった。しかし彼らはデビルサマナー、悪魔を使役(しえき)する者たちだ。召喚された悪魔によっては苦戦するだろう。そして疲弊(ひへい)したウラベの前にフィネガンが現れるに違いない。
迷いは一瞬だった。
ウラベは階段を上へと駆け昇る。足音を忍ばせる余裕はない。背後から、奴だ！　と叫ぶ声がする。そして迫る足音。

走り、走り続け、昇りきり、扉を開く。
突風が汗ばむウラベの身体をなぶった。
屋上だ。
ウラベは扉を閉め、下の隙間にナイフを楔(くさび)のように打ち込んだ。
「あっけない幕切れだな」
振り返るまでもなかった。
「なあ、ウラベ。ここで何をしようとしていた。電算機室で何を細工した」
「俺が答えると思っているのか、フィネガン」
「命と引き換えなら、人は何だってする」
「じゃあ、俺は人ではないようだな」
ウラベはガンタイプのコンピュータを取り出した。
「わたしを撃つつもりか」
言いながら、フィネガンは平然とウラベを見つめていた。
「いや」
引き金を引くと銃身が左右に開いた。ウラベは素早くキーボードを操作すると、いきなりそれを投げた。放物線を描いて、それはフェンスを越え、下に落ちていった。
「あれの取り扱い説明書を読まなかったのか。ビルの屋上から捨てないでくださいと書いてあったはずだ」

「相変わらず、貴様の冗談は笑えない」
「データを盗み出したわけだ」
ウラベを無視してフィネガンは話し始めた。
「それをあのコンピュータにコピーした。そして最後は幸運に期待した。だがな、ウラベ。おまえに運など残されてはいない。賭けてもいい。投げ捨てたあれは下で微塵に砕けている。もしデータが無事に残っていたとしても、我々が回収する。おまえは箱の隅に残っていた希望を投げ捨ててしまったわけさ」
屋上に出る扉を、ようやく追いついたフィネガンの部下たちががんがんと叩いている。
「使えない部下を持ったおまえにも、あまり運が残っていないようだな」
「だからわたしは運に頼らない。おまえが昔そうだったようにな」
フィネガンは背広の袖をたくし上げた。リストバンドタイプのコンピュータが現れた。キーボードを押すと、フィネガンの姿を光が包んだ。白光は一瞬ウラベの視界を遮り、それが消えた時、フィネガンの前には鎧を身にまとった精悍な巨人が立っていた。
「犬死にだよ、ウラベ」
独り言のようにフィネガンが言った。
巨人が吠えた。
凄まじい衝撃がウラベを襲った。
皮膚が裂け、筋肉が引き千切れ、骨が微塵に砕けた。

死が、漆黒の唇を開いた。呑まれる寸前、ウラベは祈りにも似た切実さで思った。
死にたくない。まだ俺は死にたくない。シニタクナイ、シニタクナイ、シニタクナイ、シニタクナイ、シニタクナイ、シニタクナイ——フェード・アウト——。
目覚めればとたんに大音量で懐かしのテクノハウスが耳に入ってきた。汗が全身を包んでいた。刷毛で脂を塗られたような気分だ。額からこめかみに一筋汗が流れた。蛇に舌で舐められたような気分だった。
死の体験は夢の中とは思えぬほどリアルだった。最近では毎日のように夢の中で死ぬ。繰り返し繰り返し、夜毎理不尽な死を迎えているのだ。
だが昼間にしたって、と彼は考える。オレは死んだような毎日を送っているんだ。生きてる実感なんてないし、きっと今死んでたって気づかない。退屈で退屈で退屈で退屈で死にそうなほど退屈な毎日。気がつけばオレは退屈していたし、今も退屈している。当然未来だって。みんなそうだ。フロアで踊ってるあいつらだって、ソファでだべってる頭悪そうなあいつらだって。
彼は蝉野賢一。十八歳。他の同年代の少年たちと同様、『少年に無限の未来が待っている』などという話を信じてはいない。彼らの行く末にあるのは二つか三つの選択肢。しかもそのどれを選んだところで大差ない。ひどく出来の悪いアドベンチャーゲームのような人生。彼も彼の未来がどのようなものか簡単に想像がつく。そこから大きく逸脱することはないだろうし、

無理に逸脱させるだけの勇気もない。だからいつまでも今ある退屈な日常が続いていく。それを知っているから、彼はいつも何だか苛々している。仲間たちといるわずかな時間をのぞいて。
　誰かが肩を摑んでいる。長く細い指ががっしりと肩を摑み、彼を揺すっている。
「サナギくん、そろそろ行きましょうよ」
　蝉野は通称サナギ。つまりはセミノサナギというごろ合わせだ。小学生の時に付けられた渾名をそのまま使っているのは、彼がそれを気に入っているからだ。いずれ何かが起こりそうな名前だから。
　その名付け親である少女が隣にいる。さっきからサナギを揺すっている少女がそうだ。
遠野瞳、通称ヒトミ。サナギとは幼稚園からの付き合いだ。
「どうせ眠ってるんなら、先にやっちゃいましょう」
「あのなあ、ヒトミちゃん。おまえ、オレのお目付け役じゃなかったの？　お袋に頼まれて」
「そうよ。頼まれなくたってお目付け役よ。君は馬鹿じゃないけど、時々馬鹿げたことに情熱を傾けるから」
　サナギは甘ったるいソフトドリンクを一口飲んで、テーブルに頬杖を突く。そしてじっとヒトミを見た。
　真っ黒なセミロングの髪は天使の輪がしっかりのっかっている。顔は、顔だけはちょっと危なっかしいぐらいにキレイだ。いや、キレイになる予感を感じさせる。今時十八の少女がノーメークで街に出たりはしない。ヒトミはその稀有な存在だ。

視線を下に移す。おとなしいセーターに適度な長さのキュロットにタイツにソックスにがっしりしたハーフブーツ。色はどれもこれも地味目のブラウン系で統一。
　これで偏差値最高、性格良好なのだから、遺伝子レベルで優等生になることを定められたような少女だ。だからこそサナギの母親は、賢二をよろしくお願いしますよ、と何度も（彼から見ると）恥ずかしいぐらい頭を下げる。そんな時ヒトミは半分以上マクドナルドに脚を突っ込んだような対保護者好感度増強スマイルを浮かべて、言うのだ。
　——心配しないでください、おばさま。
　サナギはヒトミに気づかれぬよう、小さく溜め息をつく。
「じゃあ聞くけど、非合法な手段でネットに入るパスワードを手に入れようとすることってのは馬鹿馬鹿しい行為じゃないわけ」
「だってパラダイムXに入りたいんだもん」
　パラダイムX。それが今から二人でコンピュータネットワークに入り込み、不正にIDを入手しようとしている仮想空間上の街の名だ。
「入りたいんだもんって……。それって回答になってないような気が」
「しないわよ。立派な大義名分だわ」
　パラダイムXのIDを手に入れるのに、サナギはあまり乗り気ではなかった。何か悪い予感がしたからだ。しかし、悪い予感ぐらいではヒトミを説得できなかった。ヒトミはこのクラブ「EL・115」のプロデューサーの許可を得て、端末を借りる手はずを整えてしまった。そ

のプロデューサーの名はレティキュリアン。この世界にありがちな「伝説の」ハッカー集団だ。集団とは言うものの実質は二人。双子の兄弟だ。いつそんな妖しげな人物とヒトミが知り合ったのか、サナギは知らない。夜更かしを諫め、ドラッグどころか喫煙もさせず、路上にゴミひとつ捨てても鉄拳の制裁をくわえるヒトミは、時折驚くほど大胆な行動をとるのだ。

いつもお目付け役と称するヒトミに引っ張られ、サナギはどんどんやばい方向へと進んでいるような気がする。

「さあ、行きましょうよ」

ヒトミはサナギの腕を掴んで立ち上がらせた。

「でもなあ、言っとくけど今からしようとしてることは犯罪行為なんだぞ」

「何言ってるの。いったんやると決めたらやりましょう。善悪はそれから判断すればいいのよ」

女にとっての正義ってのはいったい何なんだろう、などと考えながらサナギはDJのいる二階へと向かった。

人混みをかき分け、カウンターの向こうで嬉しそうに銀の円盤をいじくっている二人の前に来た。

百八十センチを越える長身の二人は、揃って踵が二十センチ近くあるハイヒールサンダルを履いている。見上げればスキンヘッドの卵のようなつるりとした頭。顔には頭の重さが倍になるほどそこら中にピアスがつけてある。しかもおそらく付け髭だろう。サルバドール・ダリのような髭が歪んだ時計の針のようにピンと天井を向いている。

「こんばんは」

サナギの両親に挨拶する時と同じ快活さで、ヒトミは二人に挨拶をした。

「あら、この子がサナギ？」

まったく同じ顔と恰好をした二人の、右側が言った。

「結構なものじゃない。趣味いいわね、ヒトミちゃん」と左側。

「あっ、彼氏じゃないんですよ。幼馴染みなんです」

「わかってるわよ。清潔なお付き合い。清い仲間たち。ちょっと憧れるわね」と右。

「憧れるだけね。すぐにどろどろのぐちゃぐちゃになっちゃうから」と左。

「それで、約束の件なんですけど」

「わかってるわよ。こっちにいらっしゃい」

左に誘われ、サナギとヒトミはカウンターをくぐってDJブースに入った。その奥に扉がある。関係者以外立入禁止の札が貼ってあった。

「こん中よ」

位置を動いたので右か左かわからなくなったレティキュリアンの片一方がそう言い、扉を開いた。中は公衆電話ボックスほどの広さしかない。

ヒトミが、そしてサナギが中に入った。

そこには端末があるだけ。本当にそれだけの部屋だった。

「その端末はどこにも登録されていないから、多少はネットポリスにも引っかかりにくいはず

よ。基本的な仕様は、街中に配布されてる端末と同じ。それじゃあ、頑張ってね」

右、あるいは左はそう言って扉を閉めた。

「それじゃあ、始めましょうか」

「頼むよ」

ヒトミとサナギ。二人ともこの街のハッカーグループ「スプーキーズ」のメンバーだ。が、サナギはハッキングの経験がまだ浅い。ヒトミの方がずっと慣れている。従ってこのような場ではヒトミが主導権を握ることになる。

椅子に深く腰掛け、背筋を伸ばし、ヒトミはキーボードを操作し始めた。サナギは後ろからモニターを覗き込み、時折いらぬアドバイスをしてはうるさがられていた。

「はい、終わり」

モニターにはIDとパスワードが映し出されていた。

「簡単なもんだな」

「簡単なんじゃなくて、わたしが優秀なんです」

「あれ……」

モニターに新たな文字が映し出されてきた。

——死を想え。我が名はレッドマン。死を想え、蝉野。急がねばならない。すべての魂を奴が飲み干す前に。

「……回線が切られた。ネットポリスのはずはないんだけど」

ヒトミが体をねじって後ろのサナギを見上げた。

「オレの名前を知ってた。それに……」

急がねばならない。すべての魂を奴が飲み干す前に。これは夢の中で何度も聞いた科白だった。

「それに、何」

夢の中で聞いた科白だということが恥ずかしかった。何か、怖い夢を見たと母親に告げる幼い子供のような気がして。

「何でもない。さあ、これを見せびらかしに行こう」

IDとパスワードをメモした、ドイツのボンデージマガジンの端っこを千切ってサナギは言った。

2

天海市。

主要都市から主要都市へと向かう車中からしか見られることのない街。どこにでもある何一つ特徴のない地方都市。相互に交換しても、住んでいる者さえ気づかないのではないかと思われる都市のレプリカのひとつ。それが五年前までの天海市だった。

五年前、天海市は政府が提唱した「次期情報都市政策」によって、情報環境モデル都市に指

定された。湾岸は埋め立てられ、古い街並みはすべて買収され、移転し、新たに移り住んできたどの家庭にも端末が設置された。それは天海市独自の高速回線によるネットワークによって結ばれ、この湾岸の一地方都市は最新の電脳都市へと生まれ変わったのだ。

　この街に住む人間の八割が五年前にこの街に引っ越してきた人間だった。情報都市の実験材料として使われることを納得して越してきた者がほとんどだ。残りは実験する側の人間。そして新しい電脳都市を遊園地と錯覚して集まってきた連中。大小様々なハッカー集団がこの街に集まってきている。サナギが入っている『スプーキーズ』もそのひとつだった。

「クラブEL・115、か。エテキューリだったっけ」

　甘すぎる甘酢をかけた肉団子を箸の先でつつきながらユーイチは言った。すかさずテーブルの下で脚を蹴られる。その勢いで皿から押し出された肉団子が、茶色い軌跡を残して転がった。

「何すんだよ、シックス」

　シックスと呼ばれた少年は、心底馬鹿にした顔でユーイチを見降ろした。

「レティキュリアンだよ、馬鹿。知ったかぶりすんじゃないよ」

　馬鹿って言うやつが馬鹿だもん。

　小さく呟き、ユーイチは再び肉団子をつついた。

　中学生とよく間違われるがサナギと同い年だ。唇をとがらしたその顔から、幼さが育ちの良さによるものだということが分かる。おそらく今まで人の悪意というものに一度として出会ったことのない人間の顔。

　彼の隣で香水のようににおいのきついキンモクセイの酒を飲んでいるのがシックス。ユーイチよりもひとつ年下だ。

　人目を引く美しい顔の持ち主だ。そのためよく「モデル？」と聞かれる。そう聞かれると反射的に拳を固める。相手が男で、自分より弱そうと判断した場合は、次の瞬間に殴りかかっている。己れの容姿が彼のコンプレックスだった。美少年＝軟派＝頭は空っぽ、の図式が頭の中にあった。シックスの理想はクールで知的でハードボイルドな男だ。誰もそうだとは認めてくれないが。

「便所みたいなにおいがする」

　わざわざシックスのコップに鼻先を近づけてユーイチは言った。すかさずシックスがユーイチの膝のあたりを長い脚で蹴る。

「いて！」

　恨みがましい顔でユーイチはシックスを見た。

「レティキュリアンとヒトミちゃんが知り合いだとは知らなかったな」

　箸でピータンをつまみながらランチが呟いた。ドレッドヘアに黄色いゴーグル。ブルーグレーのロングコート。肌は浅黒く色の悪い唇は分厚い。その唇と鼻孔と耳朶に銀のピアスが金属の腫瘍のように貼りついている。国籍不明年齢不詳の彼は、生っ粋の日本人、十九歳だ。メンバーの中では最も硬派で、最も古風だ。

　ランチ、シックス、ユーイチ。そして後から参加してきたサナギとヒトミ。中華風ファミリ

ーレストランの丸テーブルに陣取り、ジャンクなチャイニーズフードを頬張っている彼らが、スプーキーズのメンバーだった。
　ランチがふと顔を上げて言う。
「で、ネットポリスに勘づかれてないだろうな」
　ネットポリスはネット内での犯罪を専門に捜査する警官のことだ。この天海市で実験的に作られた。やがては全国に広がっていくだろう。
「大丈夫です。どのトラップにも引っかかっていないし、中に入った形跡も残していません」
　心外そうにそう言うとヒトミは、ちゃんと両手を添えて持った湯飲みでジャスミンティーをすすった。
「ババアみたい」
　ユーイチが悪意のない笑いを浮かべた。
　ヒトミは「睨む」と「見つめる」の中間ぐらいの視線でユーイチを見た。それに再び笑みで応えるユーイチに、彼女は溜め息をついて眼を逸らす。そして不意に思い出したようにつけ加えた。
「でも……その後でヘンなメッセージが流れたの」
「ヘンなメッセージ？」
　黒い舌のようにピータンを咥えたまま、ランチは顔をしかめた。
「死を想えとか、なんとか」

　ヒトミの言葉をサナギが引き継いだ。
「我が名はレッドマン。急がねばならない。すべての魂を奴が飲み干す前に」
「そうそう、そのとおり。よく覚えてるわね、サナギくん」
「ここがいいからな」
　サナギは人差し指をこめかみに押しあてた。夢で何度も聞いたからとは言わない。
「ネットポリスにしてはおかしなメッセージだな」
「だからネットポリスには気づかれてないってば。そうじゃなくて……ねえ、レッドマンっていう名前のハッカーとかハッカーのグループを知ってる？」
　そこにいた三人がそれぞれに首を横に振った。
「そいつはオレの名前を知っていた」
　口の中いっぱいにラーメンを詰め込んでサナギが言った。「そいつは」が「ほいふは」に聞こえる。
「ちょっと気味悪いな」
　シックスが楽しそうに言った。
　ミートボールをいじるのにも飽きたのか、箸を咥えて天井を見ていたユーイチが、メモを手にした。
「このＩＤで本当にパラダイムＸに入れるのかな」
「疑ってるの」

ヒトミの抗議に、悪びれもせずユーイチは頷いた。
「早速やってみましょうよ。そうすればわかるわ」
ヒトミが立ち上がった。
誰に見せるともなく「仕方ないなあ」という顔を作ってシックスが、その腕を掴んでユーイチが立ち上がる。おっしゃあ、とヘンな掛け声をあげてランチも席を立った。汁で麺を流し込み、慌ててサナギが後を追う。
天海市の中で端末が置かれていない店はない。ここにも、レジカウンターの前に二台の端末が設置されてあった。家族連れがその二台を占領していた。実際に使っているのは父親で、モバイルを接続して作成した書類をメールでどこかに送っている。ポロシャツにセーター、スラックス。まるで休日のサラリーマンに変装しているような類型的なスタイルだ。おそらく実際はサナギたちの兄と言ってもいい年齢だろうが、それよりも遥かに老けて見える。その隣の端末を触っているのは幼い子供で、奇声を上げながらキーボードを叩いていたずらをしている。母親は後ろからただぼんやりとそれを見ていた。
「こら、おもちゃじゃないんだぞ」
ランチが少年の肩に手を掛けた。
と、母親が後ろからぐいと少年を引き寄せ、金切り声をあげた。
「何するの！」
それからランチの観葉植物のような顔と、ピアスの見本帳のような顔を見た。殺人鬼を見る

眼だった。しゃがみこみ、少年の身体を砲弾から守るように抱き締める。ランチの後ろにシックスが、ユーイチが、サナギとヒトミが立っている。母親はその顔を順に見回した。
「何にもしてねえだろ」
シックスが一歩前に出た。
母親は答えず、子供をしっかり抱き締めたまま後退りした。父親の陰に隠れ、その肩を叩きながら悲壮な顔で、あなた、あなた、と囁く。
「はいはい、もうすぐ終わるから。先に席に戻っててくれ」
父親はモニターから眼を離さずに言った。
「来なさい！」
子供の腕を掴み、引きずるように母親はテーブルに戻っていった。
「何だ、ありゃあ」
呆れた顔でランチは言った。
「さあ、始めようぜ」
シックスがヒトミの背中を押して端末の前に行かせた。
「はい、これ」
ランチが奇妙な機械を取り出した。金属とプラスチックでできた位牌（いはい）に見えないこともない。
細長い箱の一面から、垂直にプラスチックのカードが突き出ている。そのカードの先端は基盤が剥き出しになっていた。それをクレジットカードを挿入するスリットに差し込む。箱にはい

くつかのキーが並んでいる。それをランチは太い指で軽快に触れていく。赤いランプが点灯した。
「おっしゃ」
ランチが言うと、モニターに明かりが点(とも)った。
クレジットの読み取りコードを解析して料金を支払ったことにしてしまう、ランチお手製の秘密兵器だ。
それは犯罪ではないか、とランチに問う者がいたら、日本の通信環境の劣悪さと、詐欺(さぎ)とも言える料金体系のあり方に対する抗議を二時間かけて聞かされることになるだろう。しかもそれは不正行為に対する言い訳ではない。ランチは本気で義憤(ぎふん)からこの装置を作ったのだ。
ヒトミがキーボードのマウントポジションに指を乗せた時だった。隣の男が「大人をなめんじゃないぞ、クソガキども」と唄うように呟き、端末を離れた。
シックスが舌打ちし、殺すか、と物騒(ぶっそう)なことを言った。
「あんな馬鹿に育てられる子供がかわいそうだよな」
ランチが本心からそう言う。
「あんなリーマンなんかどうでもいいよ。ヒトミちゃん、早く早く」
これもまた本心からユーイチが言った。
気を取り直してヒトミはキーボードを操作し始めた。
残りの四人が頭をくっつけるようにしてモニターを覗き込む。

アルゴン・オペレーションシステムのロゴが現れた。ネットのシステムもパラダイムXも、すべてアルゴンソフト社が国から依頼されて製作したものだ。
続いてパラダイムXの「懐かしい未来(レトロ・フューチャー)」風のロゴが派手に登場した。それが白光とともに消えるとIDとパスワードの入力画面が現れた。ヒトミがそれらを入力する。画面が四散して消えると、CGを背景に制服を着た女性が立っていた。
——ようこそ、パラダイムXに。
その女性がそう言うと、サナギたちが歓声をあげた。少しだけ、ほんの少しだけヒトミは得意そうな顔をした。
——こちらはアクセスの窓口となりますユーザーズカウンターです。それでは初めてアクセスされたセ・ミ・ノ・ケ・ン・ジ様にパラダイムXの概要を説明いたしましょう。
サナギの名前の部分だけが合成音で発音された。
天海市のネットワークすべてを総括するアルゴンソフト社のサーバー。パラダイムXはその中に作られた仮想の街だ。開設されたのはつい最近。まだ実験段階で、すべてが完成しているわけではない。このプレ・オープンの段階でアクセス希望者を募(つの)った。希望者の中から抽選で選ばれると、アクセス権を得ることができる。前評判は上々で、アルゴンソフト社も驚くほどの希望者が集まった。すでに当選者の第一次発表が始まっている。今から応募しても、アクセス権を獲得することは不可能だろう。だからこそサナギたちは多少のリスクを犯してもハッキングしてそれを手に入れたのだ。

今モニターの中には、奇妙に懐かしさを感じさせる古い街並みが映っている。マウスを操作し、ヒトミはその街の中を進んで行った。子供たちが歓声をあげながら横を駆け抜けていく。いつか見たような下町の風景。そんな経験をしたことのないサナギも、ほっと気が抜けるような街並みだった。

ただいま。

何となくそういう言葉が言いたくなる。そして街が、おかえりと応えてくれそうな気がする。

「どこに行く?」

ヒトミが尋ねた。

「武器屋はないの」

武器マニアのシックスが言う。

「RPGファンタジーやってんじゃないんだから」

またよけいなことを言ったユーイチがシックスに尻を蹴られた。膨れっ面をするが、いやなら言わなければいい、と彼以外の全員が思っている。

「あっちに何かあるわよ」

大通りを歩いていくと、大きな広場があった。広場というより、空き地と言うべきか。

「何だかノビタがいそうだよな」

ランチが呟いた。

中空に飛行船が飛んでいる。不幸な炎上で最期を迎えた飛行船の何倍も大きく、そして派手

だ。原色の電飾で飾りたてたその飛行船の横腹には、巨大なスクリーンがあった。

そこに映し出されているのは、パラダイムX完成パーティーのフィルムのようだった。笑顔の西次官が嬉しそうにインタヴューに答えていた。天海モデル都市計画の最高責任者だ。企業の誘致や地方自治体への根回しに辣腕を揮った切れ者らしい。市内でも評判は良かった。だが、サナギは何故かこの男が嫌いだった。しっかりした仕立ての英国製スーツを着た上品な紳士。そういったイメージを演出しているのだろうが、その鋭い眼がすべてを裏切っているように思えた。サナギはその眼に、とてつもない嫌悪感を覚える。排水溝に手を突っ込んだら、何かぬるりとしたものが動くのに触れたような、生理的な嫌悪感だった。

西はインタヴューに応じて滔々と話を続けていた。

――市民の皆さんへのパーソナルコンピュータの無料配布はすべて終了しました。ネット整備もほぼ完成しています。計画開始より五年。長く、そして短い月日でした。今や天海市は世界に誇る情報モデル都市へと成長を果たしたのです。こうしてパラダイムXの完成を皆さんとともに祝えるのは、わたしにとって至高の歓びです。

さて、それでは今回の都市計画に全面的に協力してくださったアルゴンソフト社の社長、門倉国義氏に登場していただきましょう。

西は拍手をしながらマイクから遠ざかった。入れ替わりにイタリア製のラフなスーツをわざと着くずし、手入れの行き届いた長髪にサングラスの男が現れた。いかにもベンチャービジネスでのし上がってきた青年実業家といった雰囲気だ。一代で築いたアルゴンソフト社を、今回

の都市計画のような巨大なプロジェクトに参入させたぐらいなのだから、彼も優秀なビジネスマンなのだ。
正式には公開前なので詳しくはお話しできないが……申し分ない出来です。
そう言うと門倉は自信満々の笑みを浮かべた。
運気が上昇しつつある人間だけが持つオーラのようなものを、門倉は発散させていた。それは半ば物理的な力さえサナギに感じさせた。言葉つきは丁寧だが、サナギはそこから傲慢さを感じた。他人のことなど虫けら以下と思っているに違いない。サナギはそう確信した。
唐突に声が聞こえた。
――死を想え。
サナギはモニターから顔を上げ、周囲を見回した。それらしい人物はいない。声は耳もとで呟くように聞こえた。他のみんながモニターに集中しているところを見ると、どうやら声が聞こえたのはサナギ一人のようだった。
やだなあ、幻聴かよ。
口の中で呟くサナギの耳に、今度ははっきりと声がした。
――死を想え。
太陽と砂ぼこりのにおいがした。そして滲み出るように何かがモニターに浮かび上がってきた。
犬？ いや、その精悍な顔立ちは野性のものだ。狼、あるいはコヨーテ。

そう、いつか見たテレビのドキュメントで出てきたコヨーテだ。北部から中部アメリカに住む。確かテレビではそう言っていた。
コヨーテだコヨーテ。
そう言おうとして、喋ることができないのに気づいた。喋ることができないだけではない。身体も動かない。金縛りと同じだった。
まさか、眠ってもいないのに金縛り？
コヨーテが口を開いた。
――せみの、せみのけんじ。
オレの名だ。この声には聞き覚えがある。どこかで聞いた声だ。どこかで……。
――気がついたか。おまえと会うのは初めてではない。わたしの名はレッドマン。魂と語り、魂を導くもの。
……夢だ。あの毎晩のように見る夢の中で聞いた声だ。それがどうしてパラダイムXに。
――魂は狂える馬を操る御者。純粋な意識の波動。そしてここは空の中の空。覚え、伝わる魂の行き交う路。伝わりゆく意識の座。わたしにとっては馴染みの場所だ。
よく……わからない。
――いいか、よく聞け。私はこの街に迫る災いを知らせるべくおまえに語りかけた。
災い？
――今おまえはわたしによって守られている。しかし、わたしが少しでも手綱を緩めると、

……、聞こえるか。哀れなあの声が。
欲しい。
地の底で呻くような声だった。早すぎた埋葬を土中で訴える老人のような、あるいは満たされぬ飢えに長い年月苛まれてきた獣のような。
欲しい。魂が欲しい。おまえの魂を……我にささげよ。
一瞬夕焼けのように赤い光が眼の前に広がり、消えた。サナギはその光の中にすっと落ちていくような感覚を味わった。ほんのわずかな間だったが、それは決して不快な感覚ではなかった。長い不眠の末、ようやく眠りに就く時のような心地好さをサナギは感じた。
――この世界、この時代の人間に今の光から逃れる術はない。魂はその力を失い、ねじくれた欲望がさらに魂の形を歪める。わたしが再び場を封じなければ、おまえの魂もまたあの光に奪われていただろう。
いったい、あれは何なんだ。
――果てしなく魂を喰らい続ける力。このままでは遠からぬ未来、街に生きるすべての魂が奴に呑み込まれてしまうだろう。急がねばならぬ。
それがどう大変なのかわからないけど、オレとどう関係あるわけ。
――わたしにはいずれ来るその日が見える。だが、見えるだけだ。わたしにはそれを止めるだけの力がもうない。おまえの助けが必要なのだ。
オレが？

驚き、不審に思い、そして些かの歓びも感じていた。
何かが起こるかもしれない。
その予感だけでサナギは嬉しくなっていた。
――おまえは良き魂を持つ者。
良き魂をねえ。
――ただし、この街の中では、だ。
なるほどね。
――しかしおまえが良き魂を持っていることに間違いはない。だからこそわたしの声を聞くこともできる。が、だからといっておまえがすぐにわたしや、魂を奪う者のことを信じることもできぬだろう。わたしは待つ。おまえが目覚める日を。その時を迎えるために、わたしはおまえをビジョンクエストに誘う。
ビジョンクエストって何だ。
――おまえはそれをすでに見ている。ウラベと名乗っていた男の物語を。その哀れな末路を。ビジョンクエストは魂の旅路。おまえが知るべき事実は、その中で語られていくことだろう。さあ、おまえを次なるビジョンクエストに導く時まで、さらばだ。
コヨーテの姿が無数に分解され、砂塵となって消えた。
気がつけば正面にヒトミの心配そうな顔があった。
あれ……。

サナギが呟くと、ヒトミは破顔した。
「起きた！」
三つの顔が視界に現れ、サナギを見降ろした。ランチ、シックス、ユーイチの顔だ。
「大丈夫か」
そう言ったのはランチだった。
サナギはようやく自分がファミリーレストランのソファに寝かされていることに気がついた。
「ああ、何でもない」
言いながら起き上がった。
「どうしたんだ」
問い掛けるランチに、何を言うべきかしばらく考えた後、サナギはこう言った。
「寝不足なんだ、最近」
コヨーテと喋っていたとは言いづらかった。
「どうなったんだ、オレ」
「知らないの？」
ユーイチが不思議そうな顔で聞いた。
「ああ、モニターをじっと見ていたつもりだった」
「倒れたのよ。あの端末の前で棒みたいに後ろに。……本当に大丈夫？」
母親のような態度でヒトミはサナギを見た。それは少々疎ましく、少々嬉しく、そして気恥

ずかしい。
ああ、とわざとぶっきらぼうに答えた。それから空になったどんぶりを眺め、これから彼らにどのように説明しようかと考えていた。
急かすような呼び出し音が鳴った。
「誰のケータイ？」
ユーイチはそれぞれの胸のあたりに頭を近づけて言った。呼び出し音は鳴り続いている。
「俺だよ」
ランチがコートの内ポケットから携帯電話を取り出した。
「もしもし……、ああ、リーダー。…………あっ、そう。よし、わかった。今から行く」
ランチは携帯電話を切り、全員を見渡しながら言った。
「リーダーからだ。アジトを芝浜区の南駐車場に移動したらしい。そこにすぐ来いって」
サナギから興味を失ったシックスとユーイチが立ち上がった。ランチがレシートを握ってレジへ。そして最後に、ヒトミに腕を支えられてサナギが立ち上がった。

3

アルミでできた鯨だ。
それを見るたびに、いつもサナギはそう思う。

芝浜の南駐車場に停車しているのは、巨大な銀のトレーラーだ。ガラスはすべてスモークで、中が見えないようになっている。側面には大きくスプーキーズのロゴが書かれてあった。

これが彼らの動くアジトだ。

大気は湿り気を帯びてひんやりと冷たい。広い駐車場の中、車は魚河岸の魚のように行儀よく隙間なく並べられている。芝浜は天海市の中心、繁華街だ。休日の今日、これらの車はそこに遊びに来た者たちのものだろう。その中でずば抜けて大きなトレーラーは、確かに鯨のように見える。

ドアが開いて、痩せた背広姿の男が降りてきた。会社帰りに酔いつぶれ、ベンチで寝て、今起きたところ。誰もがそう思う、この眠そうな眼をした男がスプーキー。スプーキーズのリーダーだ。信頼できる兄貴、といったものからは程遠い。どちらかといえば冴えないオヤジ、と言った方がいい。が、オヤジ、と言ってしまってはあまりにも彼が可哀想だ。老けてはいるが、彼はまだ二十五歳なのだ。

よう、とリーダーはみんなを見回して手を挙げた。唇の端に紙巻き煙草が張り付いてる。火の点いていないそれが上下にゆらゆらと揺れた。

「何で引っ越しなんか。確か前の駐車場、年間で契約してたんじゃなかったのか」

ランチが前に出た。

うん、と何故か照れくさそうに頷くと、リーダーは「まあ、入れよ。中で説明するから」とトレーラーの中に消えた。メンバーがそれに続いてぞろぞろと入っていく。中はまるで宇宙船

のコックピットのようだった。巨大なトレーラーの中の空間を占めているのは、大半が電子機器だった。リーダーはいくつかあるモニターのひとつの前に立っていた。その周りに置かれたパイプ椅子に、それぞれが腰を降ろしていく。

「何から話したらいいかなあ」

言いながらリーダーは煙草のフィルターを何度も噛んだ。

「三日前、芝浜のジャンク屋であるものを手に入れた」

「Bポイント？　あそこはいろいろ揃ってるよね。それとも電脳屋？　品揃えがマニアックだからね」

ジャンク屋の名前を羅列し始めたユーイチが脚を蹴られた。もちろんシックスにだ。

「秘密の花園だよ、ユーイチ」

リーダーは幼い子供にでも言うように優しくそう言った。

「でだ、その夜だ。コンビニで食料仕入れてトレーラーに戻ってくる時だ」

リーダーは一日の大半をこのトレーラーで過ごしている。何カ月も寝泊まりすることもある。にもかかわらずこのトレーラーの中に生活感がないのは、リーダーの性格だ。彼は食べたり寝たりすることに何の興味も関心も持っていない。もともと生活者としての意識が薄いのだ。

リーダーは話を続けた。

「その時ぼくは、後をつけられていることに気がついた」

何か質問しかけたユーイチの脚をシックスが蹴った。

「ぼくはまこうとした。そいつをまくことには成功した……はずだ。ところが今度は違う奴がつけてきた。複数の人間で尾行する。尾行の基本だが、つまり相手はプロで、しかも複数いるということだ。それでも、どうにか尾行からは逃れた」
「誰なんだ。誰がそんなことを」
シックスの質問に、リーダーは肩をすくめてみせた。似合わなかった。
「誰かはわからないが、その目的は見当つく。ジャンク屋であるものを手に入れてからだ。当然相手はそれを狙っているんだろう。用心に越したことはない。慎重すぎるかとも思ったが、ぼくは翌日手続きを済ませ、ここに越してきたというわけだ。みんなに無断で引っ越したのは悪かった。だが連絡する暇がなくてな」
「焦らすなよ、リーダー」
ランチが言った。
「その『奴らの目的』ってのを早く見せてくれよ」
リーダーはニヤリと笑った。
手を後ろに回し、ベルトに挟んであったそれを取り出す。
「これだよ」
鈍く銀に輝くそれは、太い銃身を持った銃のように見えた。
「そんなもの買ってきたんですか」
ヒトミが抗議するように言った。おかげでサナギの漏らした驚きの声は誰にも聞こえなかった。彼はそれが銃でないことを知っていた。夢の中で見たことがあるからだ。いや、レッドマンによればビジョンクエストの中で、と言うべきか。

それはウラベという男の持っていたガンタイプのコンピュータだった。
「見たことのない銃だ」
シックスが立ち上がってそれに手を伸ばした。慌ててユーイチが立ち上がる。
「オレに見せて」
奪い合う二人を見ながらランチが言った。
「銃じゃないな」
「さすがだな、わかるか」
リーダーは心から感心した様子でそう言った。
「ああ、ぼくも欲しかったからな。そいつは十年ほど前にマイナーな会社から発売された限定版のガンタイプPCだ。徹底的に改造されているから、原型はほとんどとどめていないがな」
「スゲエ！　これがコンピュータ」
最終的にそれを手にしたシックスが叫んだ。
「どうやって使うんだ、ランチ」
「引き金を引くんだ」
「こうか」
シックスが引き金を引いた。しかし何も起こらない。嘘つき、という眼でシックスはランチ

を睨んだ。
「ロックされているんだ。グリップで掌紋を確認する。本人じゃないと使用できないさ」
ちぇっと舌打ちし、シックスはそれでも銃を離そうとはしなかった。
「オレにも貸してよ」
ユーイチが唇を尖らせる。
後ろから手を伸ばしてそれを奪ったのはサナギだった。シックスが抗議の声をあげる前に、サナギは引き金を引いた。
小さな作動音とともに、銃身が左右に開いた。
みんなが驚きの声をあげた。それを無視し、見慣れぬ記号の並んだキーボードをサナギは操作する。
液晶のモニターに明かりが点った。起動したのだ。
「これは……君のか」
言ったのはリーダーだった。
「違う、違うけど……」
それから起こったことに気がついたのは二人、サナギとヒトミだけだった。
起動したモニターにエラーの表示が出た。その文字は赤く点滅していた。
と、何かがモニターから飛び出した。光り輝く球状のものだ。
柔らかな光だった。柔らかで、優しかった。それはまっすぐヒトミの顔面に向かった。

危ない！
サナギはそう言って駆け寄ったつもりだった。が、実際は声も出ず身体も動かなかった。
またレッドマンが接触してきたか。
一瞬そう思った。
が、次の瞬間、光は爆発するように膨張し始めた。ヒトミの頭を中心に、その光がすべてを包み込んだ。真っ白の闇だった。サナギは天国を思い浮かべた。優しい光に包み込まれた世界を。
笑い声が聞こえた。はしゃぐ少女のいささかヒステリックにも思える笑い声。
ヒトミの顔が光の中に浮かび上がった。困惑した顔だった。それがふと惚けたようにぽかりと口を開いた。その顔に、じわじわと滲み出るように浮かび上がってくる表情は恍惚。何かがもたらす快楽をヒトミは甘受しているのだ。
唇の端から銀の雫が糸を引いて垂れるのを見た。
その眼が大きく見開かれている。真っ黒な瞳の中央で、瞳孔が大きく開いている。その瞳が煙るように輪郭を曖昧にした。闇の黒の瞳に、濃淡が生じる。ゆらり、と瞳の中でモノクロームの影が揺れる。そして水に落とした墨汁を逆回転で見ているように、瞳は色を失っていった。
やがて眼の色は青灰色に変わっていく。その色も極端に薄い。まるで瞳が失せてしまったようだ。中央に針で突いたような瞳孔が見える。
恍惚の顔が溶けていく。その下から、春先の雪から土が見えるように、喜びの表情が現れて

きた。純粋な喜び。それまであった、一種性的な快楽の表情とは対極にあるような輝かしい笑みが弾ける。

——ついに出た。外の世界に、憧れの世界に。

そう言ったのはヒトミだった。

眼と同様色を失い、灰色に近い青い唇が、声にあわせて動いているから確かだ。しかしその声は声帯を通って出てきたものではない。その声はサナギの頭の中に直接響いていた。

——出してくれたのはあんた？　誰なの？

——サナギだ。

——ふーん。変わった名前ね。

——おまえは、ヒトミちゃんじゃないのか。

——ヒトミ？　誰、それ。まあいいじゃない、そんなこと。それより、ありがとう、あなたには感謝してるわ。

蒼ざめた唇の端がにゅっと持ち上がる。まるで誰かの指で悪戯されたように。

——もう狭いところ嫌よ。ここも狭いけどさ。でもまだましよ。

——おまえは……誰だ。

——あれ、自己紹介はまだだった？　あたしはネミッサ。よろしくね。

——ヒトミは、ヒトミちゃんをどこへやった。

——だからそれは誰？　ああ、そうか。この身体の持ち主のこと？　それならわかる。ヒトミちゃんはあたしの下。こうやって押さえてないと動き出すから。ネミッサは身体がないと自由に動けないの。いいところにとり憑く身体があって良かったわ。助かった。それにしてもネミッサをあんなところに閉じ込めるなんていい度胸してるわね。早速探しにいかなくちゃ。絶対見つけ出してぼこぼこにしてやるの。じゃあね、バイバイ。

「待て！　ヒトミちゃんを返すんだ！」

リーダーがびっくりした顔でサナギを見ている。シックスもユーイチもきょとんとした顔で見ていた。

白い光は消えている。

サナギは起動したガンタイプPCを手にして立っていた。

後ろを振り向いた。

パイプ椅子にヒトミは腰掛けたままだった。その瞳は薄く色を失い、唇は蒼ざめていた。

「ネミッサ」

サナギが言うと、ネミッサは甲高い声で哄笑した。

顎を上げ、白い喉を見せて笑い続けるネミッサに、今度は全員の視線が集中した。

「返せって言われても困るんだけど。せっかく外に出られたんだし、誰にでも入れるってものでもなさそうだし。ヒトミちゃんがあたしと一緒にここにいるのは間違いないんだから、それでいいじゃない、ねっ」

「……わかった。おまえは悪魔だ。そしてオレが召喚した。そうだな」

「おしい、残念」
楽しくてたまらないような顔でネミッサは言った。
「近いけどハズレ。あたしは悪魔だけど、あんたに召喚されたんじゃないもん。あんたはあたしの脱出の手助けをしてくれただけ。だからあたしはあんたの言うことを聞く必要はないの」
「元に戻す手段があるはずだ」
「元に戻すって何よ。……もしかしてまたあたしをあんなところに閉じ込める気？　冗談！」
会話から取り残されたリーダーをはじめ他の三人は、卓球の試合でも見ているように二人を交互に眺めていた。
サナギはみんなの困惑をよそに、ガンタイプPCのキーボードに指を走らせた。操作方法がすっかり理解できているわけではない。夢の中で知った知識を総動員してネミッサを再びPCの中に戻そうとしているのだ。
「あっ、あっ、あっ、何してるのよ。鬼、悪魔」
ネミッサは椅子を倒して立ち上がった。
サナギの腕に掴みかかる。
「わっ、やめろ」
PCが弾き飛ばされ、宙に飛んだ。
眼の前に飛んできたそれを、シックスが受け取る。とたんにキリキリとPCが音をたて始めた。

「うわ！」
びくりと身体を震わせ、シックスはPCを落とした。それを今度はユーイチがキャッチした。
「モデムだ。モデムが動いたんだ。どこかにアクセスしてる」
ユーイチはPCの小さなモニターを見ながら言った。
記号が上から下へと目まぐるしく流れていく。それがぴたりと止まって、一連の文章が現れた。
「メールを読み出してる」
ユーイチは呟いた。
サナギはその画面を後ろから覗き込んだ。
――偉大なるファントムソサエティのもとに集う栄光あるサマナー諸君へ。
文章はそう始まっていた。
――偉大なるファントムソサエティのもとに集う栄光あるサマナー諸君へ。我らがプロジェクトもついに始動することとなった。来たるべき契約の時に向けソウル回収を急がねばならない。集積されるソウルによって、今後天海市はこれまでになく悪魔の発生しやすい地域となるだろう。諸君の一層の活躍を期待する。
さて、任務実行時における一般人の対応についてだが、我々の行動は全て秘密裏に進めなければならない。これは同時に機密保持の優先を意味する。万が一、一般人との接触があった場

令は、速やかに処理せよ。プロジェクトの実行に関し、機密保持と作戦成功が最優先となる。

文章はそこで止まった。

カーソルがゆっくりと点滅している。

「なんだこりゃ」

シックスが大声を上げた。

「なあ、サナギ。いったい君は何を知ってるんだ」

リーダーが迷子に名前を尋ねるような口調で聞いた。

これ以上黙っている理由はなかった。サナギは知っている限りのことをみんなに説明した。毎晩のように見た夢の話（レッドマンと出会ってからは一度も見ていない）。デビルサマナーという存在。レッドマンの警告。そしてヒトミがネミッサに憑依されたこと。

「信じられないだろうけどな」

長い話を終えてサナギは言った。

「信じられない」

そう言ったのはユーイチだ。

「じゃあ、信じさせてやろうか」

それまでみんなと一緒になってサナギの話を興味深げに聞いていたネミッサが、ユーイチを睨んだ。

「どうやって」

怖じけることなくユーイチは尋ねる。

「おまえを地獄に送り込んでやるよ」

ネミッサが人差し指をまっすぐユーイチに伸ばした。不可視の力が、その指先に集まっていくのを、そこにいる誰もが感じた。白い部分がなくなるぎりぎりまで切ったヒトミの爪が、ユーイチにはまるで錐か何かのように見えた。

「嘘だろ」

そう言いながらも、一歩二歩と後退る。救いを求めシックスを見ると、眼を逸らされた。

「やめろよ」

言ってネミッサの腕を掴んだのはサナギだった。

「だってこのチビ、信じないなんて言うから……」

「悪魔だの魂を吸いとるだのというような話を聞いて、すぐに信じられる奴なんかいないさ」

「ここに悪魔がいるのに？」

信じられない、という顔でネミッサはサナギを見た。

「外見だけじゃ、悪魔だなんてわからないだろ」

「だからその力を見せてやろうと思っただけじゃない」

「まったく信じてないわけじゃあない」

二人に割って入ったのはリーダーだ。

「今、ヒトミちゃんの、いや、ネミッサの指に何か力が集まるのをぼくは感じた」
リーダーはみんなの顔を順に見た。皆一様に頷いていた。
「みんなも同じものを感じたようだ。悪魔かどうかは別にしても、あんたがただの人間でないことはわかる。もちろんヒトミでないことは確かだ。それからサナギは、初めて見たはずのPCを操っている。言っちゃあ悪いが、サナギはそれほどメカには詳しくない。なのに、だ。ランチの言ったように、そのPCには掌紋を照合するロックがかかっていた。ところがサナギがそれを手にすると起動した。そのPCが彼のものでない限り、そんなことは有り得ない。それからこのPCを狙っている誰かがいる。ぼくを尾行した誰かだ。サナギの夢を信じるのなら、ウラベの捨てたPCを狙っているのはファントムソサエティ。サナギを信じるに足る証拠はいろいろある。それに何より」リーダーはサナギの肩をぽんと叩いた。「ぼくはサナギを信用している。君は下らない嘘をつく男じゃない。そうだろ」
「あたりまえだろ」
怒ったようにそう言ったが、サナギはリーダーに信用されていると言われて嬉しかった。
「でもなあ……」
ユーイチが不服そうな顔をした。
「サナギの言うことは本当よ」
ネミッサは言った。いや、それはネミッサではなかった。
「ヒトミちゃん……」

「そうよ、サナギくん」
ヒトミはいつもの優等生の顔でそう言った。
「元に戻ったんだな」
サナギは喜色を顕(あらわ)にした。
「違うわ。ネミッサが……その、席を譲ってくれたのよ。わたしから説明するようにって」
「じゃあ、奴はまだそこにいるのか」
「ええ、わたしの中にいる。彼女は何も知らないわ。彼女が知っているのはデビルサマナーの存在と悪魔のことだけ。ファントムソサエティのことは知らないし、この街で行われている陰謀のことも知らない。第一彼女は何故今まで閉じ込められていたのか、とか、誰に閉じ込められていたのか、ということまで知らないの。いえ、知らないなんてもんじゃあないわ。ネミッサ自身に関する記憶がほとんど何もないのよ。どこかに閉じ込められていたという以外はね」
「何でそんなことがわかるんだ」
「今までわたしはわたしの心の底に沈んでいた。いきなり入ってきたネミッサに弾き飛ばされたの。そこにいると彼女の心も見える、感じ取れる。……だからわかるの」
「ほんっとに、さっきまでいたのがネミッサという悪魔で、今はヒトミちゃんなの？」
ユーイチはヒトミの顔を覗き込むようにして言った。
「本当よ。嘘はつかない」
「そうだよね。ヒトミちゃんが嘘をつくわけないものね」

「おい、ユーイチ。オレだと信用できなくて、ヒトミちゃんなら信じられるのかよ」
「うん」
いつものようにユーイチは平然と答えた。
「まあ、仕方ないんじゃないか。ヒトミちゃんが嘘をつくわけないのは本当なんだから」
ランチは慰めたつもりだった。
「何だかなあ、オレも頷けるところが情けねえなあ……。そんなことより、ヒトミちゃん。まだネミッサはおまえの中にいるんだな」
ヒトミは頷いた。
「そのままにしとくってのは駄目なんだな」
「いまわたしがここで説明しているのは、彼女の、ネミッサの好意のおかげよ。彼女がその気になればわたしを心の底に封じ込めておくこともできるんだから」
「それじゃあ、早く奴を追い出さなくちゃ」
「駄目よ」
「えっ」
「それを言いに来たの。ネミッサをもといた場所に封じ込める方法はわからない。彼女自身も知らない。でも彼女は何か目的を持ってここに来たらしいの」
「何かって?」
「それもわからない。でもね、それを探って彼女の失われた記憶を取り戻さない限り、彼女は

ここを、わたしの身体を離れないと思う。それにわたしもそれに協力したいの」
「協力?　何を考えてるんだ」
まったく女は何を言い出すのか見当もつかない。サナギは心からそう思った。
「彼女は偶然わたしの中に飛び込んできた迷子のようなものなのよ。手を貸してあげて当然じゃないかしら」
サナギは中学生の時、年寄りの手を引いて横断歩道を渡るヒトミを見たことがある。何だかバナナの皮で転ぶ人を見たような気がした。そんな人間が現実にいるとは思ってもみなかったのだ。
「わかった。どうせヒトミちゃんのことだ。一回決めたことをオレの意見ごときで覆したりしないだろうからな」
「サンキュ、サナギ」
サナギはヒトミの顔を見た。それはすでにヒトミのものではなかった。
「ネミッサ……」
サナギは露骨にがっかりした表情を見せた。
「残念ね、愛する人はもういないよ」
「何が愛する人だ」
「心配することはないわ。ちょくちょく会わせてあげるから」
「ヒトミちゃんはとにかく無事なんだな」

「ええ、もちろん」
「それじゃあ、それは解決だ」
リーダーがこともなげに言った。
反論しようとしたサナギを掌で制して、リーダーはさらに話を続けた。
「ヒトミちゃんと、それからそのネミッサの話を信じよう。二人の話に矛盾はなさそうだし、論旨にもおかしなところはない。今のところ彼女たちの意思決定に準ずるしか仕方ない」
サナギは反論しようと思ったが、言葉が浮かばなかった。
「さあて、考えることは他にもまだまだいっぱいある。まずはファントムソサエティ。これは遥か太古から存在する組織だと言っていたな」
リーダーはサナギを見た。
「ああ、オレは、ウラベだったオレはかつてはその組織に所属していた。その権力は絶大なもので、この日本だけでなく、世界を操るだけの力を持っている、らしい」
「悪の秘密組織だ！」
笑いながらユーイチは言った。
「悪、と簡単に言いきるのも難しそうだな。奴らの目的は霊的なエネルギーである魂を集めること。そのエネルギーは〈大いなる存在〉に捧げられる。〈大いなる存在〉とは、我々が言う神に近いものだ。奴らは〈大いなる存在〉に絶対的に帰依している。〈大いなる存在〉への奉仕のためには手段を選ばない」

リーダーがその先を続けた。
「で、その手段を選ばない絶大な権力を持った組織が、この天海市で何かをしようとしているわけだ。それが何かと言えば『来たるべき契約の時に向けソウル回収を』すること。そのためにソウルは集積されている、と」
「ソウルって韓国のこと？」
ユーイチを睨みつけておいてから、シックスは外国人に日本語を教える時のようにゆっくり、一音ずつ発音した。
「た・ま・し・い」
「たましい……ああ、魂か」
「際限なく魂を吸い寄せる力ってなんだ。それに魂をとられた人間はどうなるんだ」
今まで黙っていたランチが尋ねた。
「さあな」
言ってリーダーはサナギを見た。サナギは首を横に振る。
「だが、とにかく奴らが本気であることは間違いない。機密保持のために、接触した一般人は処理されると書いてある。その「処理」とやらが物騒な意味で使われていることは、前後の文脈からも明らかだ。多分ぼくも危ないところで処理されるところだったのだろう」
「ねえ、ねえ。メールの続き読んでみようよ。リーダーのこととか、このPCのことが書いてあるかもしれないよ」

ユーイチがそう言ったのは、何よりも好奇心からだった。

サナギがキーを操作し、次のメールを表示させる。

――経過報告。我らのプロジェクトの方は順調に進んでいる。とはいえ油断せぬよう。最近、特異な症状をきたす住民が確認されたとの情報もある。我らの任務との関係は現在調査中。次。

――通達。我らを裏切り、闘争を続けていたウラベを、アルゴンNSビル最上階にて処理。ただしその行動目的については、不明な点が多く、現在、その背後関係も含め追調査を行っている。

「やはりあの夢は本当だったんだ」

己れに言い訳するようにサナギは呟いた。

「実は昨日、そのPCを手に入れたジャンク屋に話を聞きに行った」

リーダーはフィルターを噛み潰した煙草を捨て、新しい煙草を咥えた。やはり火を点ける気はない。禁煙してから二年経つ。

「素早いな」

小声で言ったのはランチだ。

「教えてもらうには苦労した。おかげで売れそうにないジャンク製品を山ほど買わされた。ところが結局ジャンク屋のオヤジは何も知らなかった。知っていたのはそれを持ち込んだ男の住所と名前だけ。ぼくはその脚でその男を捜しに行った。昨日一日で引っ越しの合間にここまで

やったんだ。少しは誉めてくれよ」

シックスがパチパチと拍手をした。

「だから連絡する暇がなかったんだが。で、すぐに男の居場所は見つかった。留守だったのでしばらく近くの喫茶店で時間を潰した。茜モールの茜屋だよ」

最後の部分を、リーダーはユーイチの顔を見て言った。

「次に行った時には男に会えた。奴の言うのには、このPCは拾ってきて、若干の修理を加えたものだそうだ。で、どこに落ちていたかというと――」

「アルゴンNSビル」

得意そうにユーイチは言った。

「そのとおり、よくできました」

リーダーはユーイチの頭を撫でた。

「とにかく、これでサナギの夢とこのPC、そしてファントムソサエティの関係は補強された。で、どうするか、だが」

「一番新しいメールがこれだね」

ユーイチがリーダーの話を遮った。

――天体博物館で例のイベントを開催する。ファントムソサエティの各メンバーは集合すること。

その後に日時が記されてあった。

「行ってみるか」
モニターを覗き込んだリーダーは、ぼそりと呟いた。
「えっ、行くの」
シックスの科白に、すかさずユーイチが言った。
「怖いの、シックス」
「馬鹿、怖いわけないじゃないか」
シックスは慌てて応える。どうやら図星だったようだ。
「怖きゃないけど、わざわざそんなところに行かなくても……。やっぱり、悪魔とか何だかややこしいのがいるんだろう?」
「もうぼくたちは巻き込まれているんだ、シックス」
諭すようにリーダーは言った。
「ぼくたちはファントムソサエティと接触した一般人さ。このままなら」
「処理される」
いかにも楽しそうだ。
「何が楽しいんだよ」
シックスはユーイチのこめかみを人差し指でつついた。
「オレは行くよ」

サナギが言った。
「ネミッサと関わりがありそうだからな」
「あたしも行く。面白そうじゃん」
ネミッサはひたすらはしゃいでいた。
「何だかうさん臭いなあ、このメールは」
ランチは言った。それなら残るか、とリーダーが尋ねると、いや、とランチは答えた。
「ファントムソサエティがどんなものかはわからないが、どう考えても人道的なことをやっているとは思えない。不正のにおいがぷんぷんするんだ。どんな計画を実行しようとしているのか、知るだけでも価値がある」
ランチはハッキングして入手した情報で、企業の不正を暴くのが趣味だ。趣味と言って悪ければ、使命と心得ているようだった。それはランチにとって、生理的な不快感に近いものだった。
「みんな、ちょっと軽率じゃないか」
真面目な顔でシックスがそう言うと、全員が不審そうな視線を向けた。すぐにシックスは眼を逸らせた。それから大きく溜め息ひとつもらして、言った。
「行きますよ。そんなもの平気だよ。行けばいいんでしょ。あっ、そうだ。俺みんなに武器、貸し出しましょう。景気よく」
「ありがとう」

リーダーはシックスに小さく頭を下げた。
「それじゃあ、集合時間の五分前に天体博物館前に集合」
リーダーはそう言うと、遊び続ける子供に帰宅時間が近づいてきたことを告げるように、手を叩いた。
メンバーたちがばらばらとトレーラーから出ていった。

4

閉館時間まで間があるのにもかかわらず、天体博物館は閉まっていた。従業員出入り口から彼らは侵入した。カードキーすべてを無意味にしてしまうランチの秘密兵器が役に立った。
やめようか、と嬉しそうに言ったシックスの意見は却下され、従業員出入り口から彼らは侵入した。
事務所を横に、狭い廊下を抜けるとロビーに出た。できてまだ間がない。二階まで吹き抜けになったロビーは広く真新しかった。大理石の床はぴかぴかに輝いていた。
「またかかったか」
後ろから声を掛けられ、全員が振り向いた。
背広からネクタイ、サングラス、靴まで、全て黒ずくめの男が立っていた。男はニヤニヤと笑っていた。
「かすみ網並みに阿呆な小鳥どもが引っかかるな」

男が手にしているのは一見携帯電話のように見えた。だがそれにしてはキーの数が多すぎる。おそらく携帯のコンピュータだろう。
サナギは一歩前に出た。無言でガンタイプのコンピュータを男に向ける。
「……それは……。おまえもサマナーか。すまん。通信をハックして来た馬鹿な子供だと思ったんだ。ここには組織のサマナーしかいないはずだったからな。その恰好を見ると雇われたサマナーか」
勝手にいろいろと喋ると、男は慌てて付け足した。
「いや、悪かった。いま来たところなら、Jのところに顔を出しておいたほうがいいぞ。あいつはそういうことにうるさいからな」
「Jはどこにいる」
リーダーが平然とした顔で尋ねた。
「上のプラネタリュウムにいる。気をつけろよ。ここには悪魔を野放しにしてるからな。まあ、あの手の悪魔にやられるようなサマナーなら雇う必要もないが」
最後の方は小声で言いながら男は去っていった。
「どうやらただの罠だったようだな。オレたちのようにサマナー・ネットをハックしている人間を引っかけるための」
男を見送ってからサナギは言った。
「ああ、しかも俺たち以外にすでに何人か来たみたいだな。きっとそいつらは……処理されて

る」
ランチが怒りを顕に言った。
「そのJというのに会いに行くか」
リーダーが二階の回廊に続く階段を昇り始めた。
泣き声が聞こえた。子供のヒステリックな泣き声だ。
サナギは上を見上げた。
泣いているのではなく、鳴いていた。
それは鳥だった。
回廊の太い手摺にそれは掴まっていた。
真っ黒の巨大な鳥だ。
それはサナギたちを見ると、長い首をゆっくりともたげた。頭蓋骨のような丸い頭に、燐火のように眼だけが輝いている。裂け目のような嘴が開き、大きく息を吸った。
胸が風船のように膨らみ、漆黒の羽根が立った。
「なんだよ、ありゃあ」
シックスが泣きそうな声をあげた。
「悪魔だろうな、きっと」
ユーイチが他人事のように言った。
サナギは引き金を引いた。銃身が開きパネルが現れる。

一声大きく叫び、鳥はスローモーションのようにそっと翼を開いた。その姿が数倍に膨れ上がった。夜がゆるりと姿を見せたようだ。広いロビー全体が薄暗くなる。
そして、飛んだ。
シックスが小さな悲鳴をあげた。
墨を散らしたように羽根が舞う。
先頭に立って階段を昇っていたリーダーが伏せた。その頭上をこれまた黒い鱗のはえた脚がかすめる。鋭い爪の先がリーダーの髪を二筋引っかけた。
サナギは記憶をたどって、召喚プログラムを起動させようとキーボードの上に指を這わせる。
鳥はまっすぐネミッサを目指していた。
ネミッサはどうしても思い出せないポップスの題名のことを考えているように首をひねりながら、その掌を迫る鳥に向けた。
小さな爆発音がするのと、牙を剥き出しにした鳥の嘴が彼女の手を咥えようとするのは同時だった。
炎が鳥の嘴から溢れた。
しまった。
サナギは鳥が炎を吐いたのだと思った。夢の中で見た女の悪魔のように。
だが——。
鳥は黒煙を嘴から飛行機雲のように伸ばしながら、後ろに吹き飛ばされた。

階段に背中から叩きつけられる。
子供の泣き声をあげながら、翼をむやみにはばたかせた。その口腔からぶすぶすと異臭放つ煙が立ち昇る。
炎はネミッサが発したものだったのだ。
その時造魔召喚の文字がモニターに浮かんでいるのに、サナギは気づいていなかった。
リーダーが電気シェーバーのようなものを手にしていた。そのスイッチを押す。
圧搾空気の音をたて、それの先端から針が飛んだ。
細いワイヤーを引きながら、鳥の脇腹に針が刺さる。
リーダーが別のスイッチを押した。
鳥がびくりと痙攣を起こした。長い首を狂ったように振り回し、そしてがくりと頭を落とした。丸い頭が階段にあたって大きな音をたてた。
八万ボルトの電流が鳥の身体に流れたのだ。
リーダーの持っているのはスタンガン。高電圧を、飛ばした針の先に流す護身用の武器だ。
シックスが配った武器のひとつがこれだった。
「死んだの？」
ユーイチがそろそろと近づこうとした。
「まだだね」
言いながらずかずかと前に出てきたのはネミッサだった。鳥の真横にくると、あっさりとその頭を踏みつけた。アルミ缶を踏み潰すような何げない動作だった。嫌らしい音をたてて頭蓋が砕け、膿汁のようなものがどろりと流れ出した。
シックスは蒼ざめた顔で口を押さえた。
「すげえ……」
ランチが思わず呟いた。
やはり彼女はヒトミではなくネミッサだ。サナギは心の底からその事実を確信した。
最初に我に返ったのがリーダーだった。
「……さて、行くか」
言いながら階上へと脚を進める。
「おもしろーい！」
はしゃぐネミッサがその後ろからついていった。大理石の床に汚らしい足跡が一歩おきに残されていく。
何かまたよけいなことでも言ったのか、後頭部を平手うちされたユーイチが、それでも笑いながら階上へと上がっていく。青い顔をしたシックスがその後を追った。
大きく溜め息をついてから、サナギも階段を昇ろうとした。その時だった。背後から声を掛けられた。低い女の声だ。
「お呼びでございますか、御主人様」
どこかで聞いたような声であり、科白だった。

サナギは振り返った。

人形が立っていた。青銅色の肌を持つ少女の人形だ。首に太い鎖をまいていた。鎖は人形の足元まで伸びていた。

彼女はビクターの犬のように首を傾げ、じっと『御主人様』の命令を待っていた。

これはウラベの操っていた造魔。確か名前は……。

「ニュクス」

「はい、御主人様」

「ついてこい」

「仰せのままに」

サナギは階段を昇っていった。後ろからついてくる造魔を何度も振り向きながら。

5

調子に乗っていたのだ。

何しろあのシックスさえ最後には楽しんでいたのだから。

ネミッサは次々と思い出していった。己れの悪魔としての能力を。それはこの天体博物館に放たれた悪魔の力を遥かに凌駕していた。そしてニュクスもまたウラベの造り上げた最高傑作なのだろう。多才な魔法と怪力で、向かうところ敵はなかった。あの黒ずくめの男が言っていたように、ここにいる悪魔たちは、サマナーネットをハックして、恐る恐るやってきた馬鹿な人間を『処理』するためにだけ放たれているのだ。デビルサマナーでもなければ、悪魔と対等に勝負できる人間などいない。低級の悪魔でも充分罠としての役割を果たすのだろう。ここはそのために作られた罠だ。デビルサマナーが強力な悪魔と造魔を連れてやって来るとは考えていなかったのだ。だから――。

サナギたちの行っていることは、どう見ても虐殺だった。相手が人間でないことが彼らの神経を麻痺させたのだろう。いつも冷静なはずのリーダーさえ、遊園地に来たかのように悪魔たちと戦うことを楽しんでいた。

プラネタリュウムの置かれてある部屋には、あっさりとたどり着いた。

扉を開けた時、中にいたのは黒い革のつなぎを着た男だった。ツノのように突き出したリーゼントに黒いレーバンのサングラス。ロックンロール少年がそのまま大人になってしまったような男だった。

新しいアトラクションを試みる気分で、彼らは中に入っていった。

「今は忙しい。後にしてくれ」

男はサナギたちの方を見ようともせずに、ギターのチューニングをしていた。いや、よく見ればそれがただのギターでないことがわかる。それには弦がなく、代わりに小さなボタンがいくつも並んでいた。

男はふと作業の手を止め、サナギたちを見た。

「行けと言っているだろう」
「あんたがファントムソサエティのJか」
言ったのはランチだった。
男は眉をしかめた。改めてサナギたちの顔を見回す。
「貴様ら、どうやってここに来た」
「歩いて」
ユーイチがニコニコしながら言った。
「馬鹿か。しかしただの馬鹿ではここまで来られないな。ああ、そうか」
Jはニュクスを見た。
「造魔か。それもかなり手を入れてあるな。サマナーはどいつだ。それともおまえら全員がサマナーか」
サナギが一歩前に出た。
「オレだよ、サマナーは」
Jは鼻を鳴らした。
「餓鬼(がき)じゃねえか」
「ただの餓鬼じゃないんだよ」
言い出したのはシックスだ。
「ファントムソサエティってのはいったい何なんだ。おまえたちこの街で何を企んでいる」

「おまえにひとつ質問だ。どんな死に方が好みか。以下の三つから答えろ。1、焼死。2、凍死。3、圧死」
「俺たちの実力を知らないからそんなことを言ってられるんだよ。なあ、サナギ」
シックスはサナギの肩をぽんと叩いた。
「若いってのはいいねえ。怖い物知らずで。だがな、年上にそんな態度をとってたら、いつか痛い目にあう。その前に俺様が礼儀を教えておいてやる。ちょうどいい。いま新しく上位悪魔の召喚プログラムを入力し終えたところだ。貴様らで試してやる」
Jはギター型コンピュータのリターンキーを押した。ぎゃーんとひずんだギターの音がした。Jの姿が霞んで見えた。アンテナのやられたTVのように、それが二重にも三重にも重なって見える。
Jは顔をしかめた。
慌ててキーを押し始める。ジミー・ヘンドリックスのように暴力的に凄まじい早さで指がキーの上を走る。それにあわせてサンプリングしたギターの音が、半ばノイズとなって大音量で響き出した。
砂塵が舞い上がった。その一粒一粒が淡く輝いている。輝く砂はJの周りで渦巻いた。
「違う！」
Jが叫んだ。
「おまえなんか呼んでいない！」

絶叫は最後には悲鳴に代わった。

舞う砂塵がJを中心に集まってくる。それはひとつの姿をとり始めた。

Jの半身をそれは取り囲んでいた。琥珀色の結晶体だった。幾何学的な立方体で構成されたそれは、Jの頭から肩、腰から腿のあたりまでを包み込んでいた。

「グルウウウウ！」

Jは吠えた。歓喜に満ちた咆哮だった。

「ううあああるうう、とうとう我はああああ、よおおおおみがえりしいいい。我が名はああああムウウウウファアアアアス！」

「出たな、化け物！」

ふざけた口調でユーイチが叫んだ。その手に握られているのは特殊警棒だ。もちろんこれもシックスのコレクションの一部だった。

「我はあああマアアアニ……マニトゥの呪縛から解き放たれたあああああ……自由だ。自由だ。自由だあああ！」

サナギたちは興奮していた。

殺戮と破壊をゲームのように楽しんでいた。だからこそ、これほどまでに好戦的だったのだろう。

普段なら考えられないことだが、最初に手を出したのはリーダーだった。

スタンガンの針が飛んだ。

だがそれはJの結晶状の身体に弾かれ床に落ちた。

「こいつは今までの悪魔と違う」

ネミッサが呟いた。その声が聞こえなかったのか、ユーイチが飛び出した。

黒い特殊警棒を叩きつけようと右腕を振り上げた。

結晶体の一部がぐい、と盛り上がった。

その先は錐のように鋭い。

それがまっすぐユーイチの腕目がけて伸びた。

「危ない！」

シックスがユーイチの衿を掴んで引っ張った。

まさしく間一髪だった。

ユーイチの腕を貫こうとした結晶体は、特殊警棒を弾き飛ばした。

警棒はまっぷたつに折れて後ろに飛んだ。

「あっ、ありがとう」

まだユーイチの衿を掴んだままのシックスに、彼は礼を言った。

「あたしこいつを知ってる」

ネミッサが言った。

「何だって」

サナギはネミッサを見た。

「こいつは強いよ。でも、今なら何とかなるかも。まだこいつは」
言いながら右腕を伸ばした。掌が赤く輝く。
「未完成だ！」
炎の球が掌から飛び出した。
それはJの胸にあたって放射状に火花を飛ばした。Jの、結晶体に覆われていない方の顔が苦痛に歪んだ。
「グロオオオオ！　おまえは……ネミッサ」
ネミッサの動きが止まった。
結晶体の一部が飛び出してきた。
まるで琥珀の槍だ。
「ニュクス！」
サナギが叫んだ。
ニュクスは滑るようにネミッサの前に出た。
鋭く尖った先端がニュクスの額に届く寸前、彼女はそれを掴んだ。
そしていとも簡単にへし折る。
蛙の舌のように、それは素早く縮んでもとの結晶体に戻った。
それを追うように、サナギは間合いを縮めた。
手に持った大振りのナイフは米軍のバヨネット、つまりは銃剣だ。銃剣とは言っても、銃に取りつけるため鍔につけたマズル・リング以外は、まったく普通の片刃のナイフだ。それをまっすぐJの喉へと突き出した。
生身の喉を狙った。
刃先が皮膚をぷつりと切り裂くのを感じた。それからぎりぎりと刃が肉を裂き、開く。かつっ、と骨にあたり、刃先が横にずれた。そのままの勢いでサナギは腕を伸ばす。腱や血管が千切れる感触が手に伝わる。そして、粘るような肉の感触が、不意に途切れた。
ナイフはJの首を三分の一ほど切り裂いていた。
驚くほど大量の血液がJの喉から吹き出した。
サナギはJから離れた。
人を殺したのだ。今オレは人を殺したのだ。
ゆっくりと頭の中にその意味が伝わっていく。
Jは疑問を感じた幼児のように首を傾けていた。心臓の収縮に併せて、噴水のように強弱をつけながら血が吹き出している。
何が疑問なんだろう。
サナギは場違いにもそんなことを考えていた。その合間にも鼓動のように頭の中で文章が明滅している。
オレハ　ヒトヲコロシタノダ。
きっと、まさかあれほどの血が自分の中に入っていると思わなかったんだ。

ヒトヲコロシタノダ。
それであいつは、どうしてあんなに血が流れるのか。
ヒトヲコロシタノダ。
不思議で仕方ないんだ。それで。
ヒトヲコロシタノダ。
あんなに考えているんだ。そうだ、そうだ。きっと。
ヒトヲコロシタノダ。
「やったー!」
突然シックスの叫び声が聞こえて、サナギは我に返った。
Jは床に倒れていた。大量の血液が、サナギたちの足元まで流れてきていた。
「これでボスキャラ倒したね」
大喜びするユーイチを睨みつけ、サナギは言った。
「やめろ」
「何を?」
「はしゃぐのをやめろ!」
怒鳴っていた。
「何を怒ってるの」
「人が……死んだんだぞ」

沈黙が訪れた。
メンバーたちは初めて見るように、Jの死体を眺めていた。
だがネミッサだけは、油断なく身構えたままJを見ていた。
こんなに簡単に奴が倒されるわけがない。
奴というのが何者かもわからぬまま、ネミッサは警戒を解こうとはしなかった。
「……こんな身体では……」
声がした。と同時にJの身体がカメラのフラッシュのように激しく輝いた。
一瞬、全員が眼を塞いだ。ネミッサも例外ではなかった。
「より、強い身体が必要だ!」
Jの、あるいはJにとり憑いた何かの声が聞こえた。
そしてネミッサの絶叫。
「やめて! ここにはあたしが――」
光は途絶えた。
眼が眩み、しばらくは何も見えなかった。やがて徐々に眼が慣れてくる。
サナギが初めて見たのはJの死体だった。それはもう半身を結晶体に覆われてはいなかった。
どこかに逃れたのかと、サナギは周囲を見回した。そして知った。
「ネミッサ……」
ネミッサの姿がなかった。

「ネミッサはどこに行った」
サナギは隣にいたシックスに尋ねた。シックスは首を横に振った。
「ネミッサは」
サナギは順にメンバーを見ていった。ユーイチを、ランチを、リーダーを。
誰もが黙って首を横に振った。
「ニュクス、おまえは知らないのか」
「申し訳ございません、御主人様。光に眼を奪われている間の出来事でしたので」
青銅色の少女人形は深々と頭を下げた。
「もしかしたら……」
リーダーが口を開いた。
「知っているのか！」
サナギはリーダーに詰め寄った。勢いに押され、リーダーは二、三歩後退りながら、言った。
「光が消える瞬間、それが一カ所に集中したように見えた。そんな気がしただけなんだが。何しろあの光が突然に――」
「どこだ！」
リーダーの胸ぐらを掴みかねない勢いでサナギは言った。
リーダーは倒れるJの向こう側を指差した。そこ、プラネタリュウムの機械の横にあるのは、コンピュータの端末だった。おそらくプラネタリュウムをコントロールするために接続されて

いるのだろう。
「あれに……」
サナギは絶句した。
ネミッサは端末の中に消えたのか。
電子音が鳴った。
リーダーがコートの内ポケットから携帯電話を取り出した。
「はい、スプーキー……。ヒトミちゃん！」
「貸せ！」
サナギはリーダーの手から携帯電話をもぎ取った。
「オレだ」
「あっ、サナギくん！」
「ヒトミちゃんか」
「そう、今わたしとんでもないところに………」
「おい、ヒトミちゃん！」
「ったくもう、すぐ勝手に出るんだから」
ネミッサの声だ。
「ネミッサか。何をしてる。今どこにいるんだ」
「驚くわよ」

「もう充分驚いてる。早く言えよ」
「ひ・み・つ。ああ……サナギくん！　聞いてる？」
途中から声がヒトミのものに代わった。
「今わたしたちはパラダイムXの中にいるの」
「どういう意味だ。どこかの端末にいるのか」
「違いますよーだ」
再びネミッサが電話に出る。
「どっちでもいい。早く教えてくれ」
「ヒトミちゃんが言ったとおりよ。パラダイムXの中。あの街にいるんです」
「言っていることがわからない。詳しく説明してくれ」
「ああ、もう……」
遠くで何か言い争う声。
「何をしている」
「ヒトミちゃんがうるさいからいったん戻るわね。アジトで待ってて」
「アジトでって……おい、ネミッサ！　ヒトミちゃん！」
サナギは溜め息ひとつついて携帯電話をリーダーに返した。
「切れた」
「どこにいるんだ」

「パラダイムXだと言っていた。で、アジトで待っててくれと」
「そうか……」
ほんの数秒考え、リーダーは決断した。
「それならアジトに戻っておこう。ここにもう用事はない」
それから、十体あまりの悪魔をあっさりと葬り、四人は無事に建物から出た。

6

帰ってきた、帰ってきた、とはしゃぐネミッサは、モニターの中にいた。その背後に映っているのはパラダイムXの奇妙に懐かしい街並みだ。
「どういうことだよ」
サナギはモニターに向かってそう言った。何か馬鹿馬鹿しいような気がした。
「そっちに戻って説明するね」
スピーカーからネミッサの声がした。
モニターが白く輝いた。その光が、垂れる雫の拡大写真のように画面から盛り上がってくる。
そしてぷつりとモニターから離れると、光の粒子となって散らばった。
わあ、キレイだな。
呑気なことを呟いているのはユーイチだ。

光はすぐに人形（ひとがた）に集束し、輝きを失い、同時に色彩がよみがえり、やがてネミッサの姿へと変わっていった。
「やっほー！　たっだいまあ。アー楽しかった」
満面の笑みで周囲を見回す。
「あれ？　驚いた顔してどうしたの」
「これで驚かない奴はいないよ」
呆れた顔でランチが言った。
「何があったんだ」
サナギが尋ねた。
「それがスッゴイの。ネミッサ、パラダイムXに入れるようになったの」
「それは見たよ。だからどうして——」
「そんなことあたしにもわからないわよ。きっとあのムーウィスって悪魔が持っていた能力なんじゃないかな。それがこの身体にとり憑いてきた時——」
「とり憑いてきたのか」
サナギが尋ねる。
「そうよ。あたしを追い出そうとしたけどできなくて、それで奴はそのままあそこにあった端末に逃げたの。で、きっとその時にあいつの能力がネミッサにも身についたのよ。そう。きっとそうよ。ね、すごいでしょ」

「すごい。確かにすごい。しかし……」
リーダーは腕組みして考え込んだ。
「まあ、理屈でどうこう言えるようなもんじゃあないんだろうな。とにかく事実を事実として受け入れるのが賢明なんじゃないの」
ランチが言った。
「……そうだな」深く考えることはやめよう、とでもいうようにリーダーは頭を振った。「確かに常識的に考えたら、悪魔だのデビルサマナーだのって話も信じられることじゃないしな」
「ヒトミちゃんも無事なんだな」
「もう、サナギったら、すぐヒトミちゃん、ヒトミちゃんなんだから。無事よ。さっき電話で話したでしょ」
「あの、ムーウィスだっけ、あの悪魔は？」
シックスが尋ねた。
「質問攻めだね。奴、パラダイムXについたら消えちゃったよ。……まあ、いろいろ言うよりも見た方が早いから。サナギも一緒に行こう、パラダイムX」
ネミッサはサナギの腕を取った。
「あっ、オレも行く」
ユーイチがネミッサの腕を掴もうとした。
すっとネミッサが身体をかわす。空振りしたユーイチの肩をシックスが掴んだ。

「あのなあ、よけいなことをすんじゃないよ。この二人にはおまえにはわからない大人の事情があるわけよ」
「そんなものないよ」
怒ったようにサナギが言った。
「さあ、こいつらのことはおいといて、行こう、サナギ」
「こいつら」と呼ばれたみんなも、文句を言う間はなかった。
二人の身体が光の砂塵になって分解する。爆発したように広がった光はすぐに帯状になって中空を飛んだ。なぶるようにユーイチの鼻先を抜け、モニターへと向かう。
ミニチュアの雷のように電光がモニター画面に走った。
手を離さないで！
ネミッサの声がサナギに聞こえた。
そう言われても、彼にはどこに自分の腕があるのかわからなくなっていた。それどころではない。どれが自分の身体であるのかさえわからないのだ。
「到着！」
ネミッサの声で我に返った。
見回せばあのパラダイムXの街の中にいた。身体の中でぴりぴりする痛みに似た不快感がしばらく続いていた。
「ねっ、簡単でしょ」

ネミッサは笑った。
「なのにさ、ヒトミちゃんったら、ここに来てずっと泣いてたのよ。怖い怖いって」
ヒトミが……泣いていた。
ぴんと来ない話だった。
幼い頃からヒトミは人前で涙を見せたことがなかった。サナギが見たのもたった一度。彼女が母親を亡くしてひと月あまりたった頃だ。二人は小学校に入学したばかりだった。早朝の公園で二人だけで遊んでいた。他には誰もいなかった。どうして二人がそんな時間に公園で遊んでいたのか、サナギも覚えていない。二人はブランコに乗っていた。サナギは家に帰りたかった。だがヒトミがブランコから離れようとしなかった。何をどうしたのか、ヒトミがブランコから落ちた。サナギは駆け寄った。するとヒトミは涙で眼を滲ませながら、サナギを見た。怒っていた。幼いサナギには恐ろしく感じるほど、ヒトミは怒っていた。そして言った。
——わたしが殺しちゃったの。
未だにそれがどういう意味なのか、サナギにはわからない。
「……聞いてる？」
見るとミネッサが唇を尖らせてサナギを見ていた。
「ね、普通の街と同じでしょって言ってるの」
「ああ、聞いてるさ」
「嘘。まあいいわ。さあ、どこに行きたい、サナギ」

「ちょっと歩いてみよう」
うん、と頷くと、ネミッサはサナギに腕を絡ませてきた。
　確かに普通の街を散策するのとなんら変わりがなかった。路を歩く感じも、壁に触った感触も、どれにも何の違和感も感じない。途中出会う人間も、それが単なるプログラムであるとは思えないほどリアルだった。『リアル』というものは、一般的に言われる『現実』というものとは別物なのだった。
「あっ、映画館」
　ネミッサが指差した。
「映画館か……。行こうか。前にここに来た時は、オレ、どこも見ていないから」
「気絶してたもんね」
　笑いながらネミッサは言った。むっとしてサナギが言う。
「気絶じゃない。レッドマンと会ってたんだ」
「本当かな」
　それが本当であることは、この後すぐにわかることになる。
　二人は映画館に向かった。映画館ではクレジットカードのナンバーを言うだけで中に入れた。
　オペラ座を模した映画館の古びた扉を見た時、サナギは既視感に襲われた。『いつかどこかで見た』この街並みの中でも、特にこの映画館には覚えがあった。
　映画館に入ってサナギは驚いた。

　夢の中で見た映画館とまったく同じだった。
　床に敷かれた絨毯から座席、壁に貼られたポスターまで、何もかもが夢で見た景色だった。これもまた夢の中と同じく、薄暗い館内はひんやりと冷たかった。他には誰もいないようだった。
　適当な席を選んで、二人並んで腰を降ろす。
　垂れ幕の、聞いたこともない化粧品メーカーのロゴを見ながらネミッサは言った。
「映画、初めて見るの」
「だろうな。あんまり悪魔が映画を見ているのに出くわしたことがない」
「何の映画が始まるの」
「確か表の看板には禁猟区って書いてあったけど」
「うう、わくわく」
　そう言いながら、ネミッサは脚をぶらぶらさせた。
　場内の照明がさらに落ちていく。
　やがてすべて闇に包まれると同時に、カタカタと音をたてフィルムが送り込まれていった。光の円錐がスクリーンに走る。
　スクリーンに光が投影された。細かな埃が深海の微生物のようにその中を舞っていた。そして、やはり白黒の画面が現れた。ざらつく古い画像に雨が降っている。
　そして、スクリーンの中に一頭のコヨーテが浮かび上がってきた。

「レッドマン……」
呟いたまま、サナギは椅子から動けなくなっていた。
「久し振りだな、ネミッサ」
レッドマンは濡れた鼻先をネミッサに向けた。
ネミッサを知っているのか。そうサナギが問いかける前にネミッサが言った。
「あたしを……知ってるの？」
どうやら今回はネミッサにもレッドマンが見えているようだ。
「君はやはり現実世界よりこちらの方が居心地が良さそうだ」
「あんた、誰。あたしは、あたしはいったい……」
「どうやらまだ何も思い出せぬようだな。そうであるのならわたしに語るべき言葉はない。それを知るはおまえの責務。いずれ必要になればすべて思い出すだろう。今はわたしの話すべき相手は蝉野、おまえだ」
レッドマンはサナギを見た。
「ここで再びヒジョンクエストを経験してもらおう。おまえの魂はまたひとつ大きな旅をすることになる。すべてはおまえ自身の魂を持って受け止めるしかないのだ。さあ、蝉野よ。心の眼を開くんだ。魂の伝達は同時におまえ自身に対する問い掛けでもある。おまえの全身全霊を持ってその答えを見出すのだ」
レッドマンの姿が薄れていく。

モノクロームの映像がスクリーンに映し出されていた。
海だ。どこまでも続く大海原。波は静かで、白く海を切り裂くように帆船が進んでいく。
波の音だけが聞こえている。
風が吹いてきた。
湿った海の風。潮風。
サナギはそれを肌で感じていた。
穏やかな風に乗って、サナギは船へと近づいていく。
船は航海を続けていた。
サナギはそれを知っている。そう、長い長い航海を。
見知らぬ知識が春先に地表へと這い上がる虫のように頭の中によみがえってくる。
船は航海を続けていた。
彼らを送り出した者たちはそれを追放と呼んだが、彼らはそれを脱出（エクソダス）と呼んだ。
船に乗っている者は皆、国の教会と対立した異教徒たちだった。
航海は意外なほど順調だった。波は船をゆりかごのように揺らし、風は子供の背を押す母親のように優しかった。
国を出て二カ月後、彼らは島を発見した。いや、彼らはそれを島だと思っていたが、それこそがあの新大陸の発見だったのだ。
彼らが〈希望〉と名付けた港に着いた時、船の乗員は半分に減っていた。彼らはこの土地に、

彼らの乗ってきた船の名を取って、〈下降する御使い〉と命名した。

我等は楽園を追われたのではない。楽園を見出したのだ。彼らが後にそう語ったように、この土地は自然の恵みに溢れた楽園だった。

海岸近くに家が建てられ、小さな村ができた。

森は様々な果実を実らせ、人の恐れるような獣はなく、また獣たちも人を恐れることがなかった。

土地は肥え、耕し、種を蒔くと、驚くほどの収穫を得ることができた。

人に害を成すものは、虫いっぴきいなかったが、ただひとつ、畑を荒らし、倉庫から食物を盗んでいく生き物がいた。だが、初めのうち、その正体は誰にも判らなかった。猿に似た何かが、闇にまぎれて逃げていくのを何人かが目撃していたが、それは他の獣と違い人前に姿を現すことがなかった。

最初にそれを捕らえたのは、村一番の猟師だった。彼は畑の近くで一日中見張った。そして夜明け前、畑に入ろうとしたそれを、一発で仕留めた。

駆け寄りそれを見た猟師は蒼ざめた。

人間を撃ってしまった。

猟師はそう思った。

そこに倒れていたものは、何ひとつ身につけていなかった。肌は褐色で体毛は薄く、その胸に穿たれた穴から、大量の血が吹きこぼれていた。黒い瞳は大きく見開かれ、桃色の厚い唇は

苦悶に歪んでいる。

どこからどう見ても、それは人間にしか見えなかった。猟師はそれに近づき、抱き上げた

そして見たのだ。

それの尾を。

尻の割れ目の上、皮膚に浮き出る背骨の延長に、肉色の長い尾があった。

それが最初に捕らわれた〈尾(テールズ)〉だった。

猟師は翌朝逮捕され裁判にかけられた。彼は果たして殺人を犯したのか否か。つまり彼の撃ち殺したものは人なのか獣なのか。それが議論の中心となった。テールズが人なら彼は死刑となるだろう。しかし獣であるなら彼は無罪だ。

村の人々は彼に同情的だった。温厚で気のいいこの猟師は、村の人に慕われていたし、また腕のいい猟師は村の財産でもあったからだ。

判断のつかぬまま一週間が過ぎた。そして新たなテールズが捕まえられた。今度は生け捕りだった。檻に入れられたテールズは、鼠のような声で鳴くだけで、人語を解さなかった。裁判官でもあり、村の司祭でもあった男は、猟師に対し無罪の判決を下した。

その論旨は以下のようなものだった。

これは人の言葉を解する能力を持っていない。人の言葉を理解できないものが信仰を持てるはずがない。もし仮に、これが獣であるのならば問題はない。そして万が一これが人であったとしても、信仰のないもの、つまり神の不在に生きるものであるのならば、それは獣にも劣る

存在である。従ってこれが獣でなかったとしても、人では有り得ないのだ。因(よ)って、被告は無罪である。

　獣、とは言い切っていないが、結果的にそう言ったも同然の判決だった。その日から、畑を荒らす害獣であるテールズは、狩猟の対象となった。

　人が増え、村はどんどんと大きくなって町となった。そうして生活にゆとりができるようになると、人々は楽しみのためにテールズを狩るようになった。

　阿呆のようにただ殺されるのを待っている他の獣と違って、テールズは動きも敏捷(びんしょう)で、激しく抵抗し、中には逆に向かってくるものさえいた。この島で最も大きな獣であるテールズはかっこうの標的となったのだ。

　二十年が過ぎ、三十年が過ぎ、畑は広大になり、人口は更に増し、それに従い幾つもの町が造られ、町は集まって一つの国となっていった。そこにこの国特有の文化や、風習、政治が生まれ、貧富の差は階級を生んだ。

　ジョシュアは貧しい農夫の六男として生まれた。変生の祭りまでまだ四年。前髪を垂らしたままの子供だった。優しい顔立ちのジョシュアは、そのために女の子のように見え、よく仲間たちにからかわれていた。そんなこともあって、ジョシュアは一人で遊ぶことの方が多かった。

ジョシュア?
これが……オレなのか。

オレが、ジョシュア。
そう、オレだ。ジョシュア。これがオレだ。
オレはジョシュア。この国で生まれこの国で育ったジョシュア。
オレは——ジョシュア。

　その日も彼はお気に入りの丘の上にいた。小さなその丘の上には樅(もみ)の林があり、そこにエイモンという老人の住む小屋があった。〈下降する御使い〉の水夫をしていたというこの老人は、ジョシュアに様々な異国の珍しい話を聞かせてくれた。

　ジョシュアはエイモンと並び、柔らかな春の下生えに腰を降ろしていた。エイモンは風のにおいがした。ジョシュアはそのにおいが好きだった。

　エイモン老人はいつものように火の消えた煙草を唇の端に挟み、話を始めた。

「わしがちょうどおまえさんのようなガキだった時分の話さ。わしらはいつもの仲間と一緒に川のそばに隠れ家をこしらえておった。おまえさんもやったことがあるだろ。棒きれだの、石ころだの、布のきれはしだのを使って隠れ家を作ったことが。わしらは一週間かかってそれを作った。いらん家具なんぞを集めてな。少しずつ少しずつ。で、ようやく完成した。自分らでも感心するほどのできだったよ。ところがわしらをいつもいじめていた年上の奴らが、わしらのその特別製の隠れ家を見つけよった。

　奴らはその家を明け渡せと言った。勿論(もちろん)わしらは断った。恐ろしかったがね。何しろ奴らは

皆、わしらより頭ひとつ大きいんだ。だがこの隠れ家は特別だった。みんなで苦労して建てたんだ。わしは奴らに言ってやった。おまえらのような腐れ頭に渡すくらいなら、今すぐ潰したほうがましだとな。当然喧嘩（けんか）になった。何かを解決する時、喧嘩ほどいいものはない。何しろ勝つか負けるかだ。はっきりと結論が出る。ところがその時はそうではなかった。奴らのなかに頭の悪い奴がおったからだ。奴らはみんな頭が悪かったが、そいつはその中でもとびきりの馬鹿だった。おまえらの仲間にもいるかもしれんな。何が良くて何が悪いかがまったく判らない奴が。まだ悪いことを悪いと知ってやる奴はましだ。後で反省したり、居直ったり、悪いことを知る頭があるなら良いことも判る。ところがとびきり馬鹿な奴にはそれが判らない」

「それで」

ジョシュアは話を促した。

「それで、その馬鹿はナイフを取り出した。当時わしらがみんな持っていたやつだ。木を切ったり削ったりするのにな。だが誰もそれを喧嘩に使おうなんて思わなかった。どうなるか判っているからね。ところが奴にはそれが判っていなかった。やつはナイフでわしの腹を刺した」

エイモンは燐寸（マッチ）を擦って、煙草に火を点けた。

深呼吸のようにそれを吸う。

赤く燃えた煙草の先端がぱちぱちと音をたてた。

大きく煙を吐き出すと、エイモンは話を続けた。

「奴はわしの身体から離れたが、ナイフはわしの腹にくっついたままだった。柄が腹から生え

ているみたいにぶらぶら揺れていたさ。不思議と痛みは感じなかった。暖かいものが腹から股に、股から脚に伝わっているのが判った。前を見ると、みんながわしを見とったよ。驚いた顔でな。わしを刺した馬鹿は血の気が失せとったよ。ところが、それが急にしゅうっと景色が狭まって、真っ暗になっちまった。あれ、あれ、と思っていたら、眼の前に大きな蛇がいた。わしの身体の倍ほどもある蛇だ。嘘じゃない。ほんとにわしはそれを見たんだ。その蛇は馬鹿でかい頭を持っていた。そいつはそのでかい頭をもたげてわしに言ったんだ。『今度会おう』ってな」

エイモンは再びゆっくりと煙草を吸い、溜め息のように吐き出した。それから地面を見て、黙っていた。ジョシュアがエイモンを起こそうと思った頃、エイモンは口を開いた。

「さて、薪を拾いにいこうか」

「ねえ、それでどうなったの。爺ちゃんは死んじゃったの」

「今おまえが幽霊と話しているんじゃないのなら、わしは助かったのさ」

老人は愉快そうに笑った。笑うたびに口から煙が吹き出した。

「これだよ」

エイモンはシャツをたくし上げた。右の脇腹にひきつれた傷が残っていた。まるでそれは、火傷（やけど）の痕（あと）のようだった。

「すげえ」

ジョシュアは感嘆の声をあげた。

「さてと」
シャツをズボンに入れ、老人はゆっくりと腰を上げた。上げかけた。そしてその姿勢のまま後ろに倒れると、悲鳴をあげた。
「脚を、脚を」
エイモンが叫んだ。その足元に蛇がいた。扁平な頭を持つ蛇だ。それはジョシュアを見ると、嘲笑うように舌を二、三度出し入れして逃げていった。
この国には蛇はいなかった。危険な動物は何ひとついなかったのだ。蛇は、〈下降する御使い〉に乗って、この大陸にやってきたのだ。彼らとともに。
「腿を縛ってくれ。頼む、ジョシュア。縛るんだ」
ズボンの裾がはちきれそうになっていた。中でエイモンの脚が腫れ上がっているのだ。見えない自転車をこぐように脚をばたばたと動かすエイモンを、ジョシュアはただじっと見ていた。何もできなかった。指一本動かすことができなかった。
恐ろしかったのだ。
老人の顔色が変わった。最初赤らみ、次に蒼白に、そして紫に。全身が腫れ、まるで水死体のようだ。大きく膨れた彼の顔はところどころ皮膚が裂け、血が滲んだ。
もう老人は喋ることができなかった。歪んだ赤い芋虫のような唇から、腐敗したはらわたそのものの舌が突き出ていた。
関節や筋肉は頭以外の何かの命を受け、凄まじい早さで老人の身体を動かしていた。

エイモンは踊っていた。
死の舞踏だ。
膨れ、歪んだ顔は、長い舌をへらへらと動かして、笑っているように見えた。
ジョシュアが覚えているのはそこまでだ。
彼が自分のベッドで目覚めたのは、それから三日後のことだった。
それから眠るたびに、ジョシュアはエイモン老人の夢を見た。夢の中の老人は醜く太った道化で、人とは思えぬ速度で踊っていた。踊りながら老人は腐っていった。腐りながら笑っていた。そして笑いながら彼は言った。
「蛇だ、ジョシュア。縛ってくれ」
夢を見ては目覚め、再び眠りに就いては夢を見た。死病に犯されたようにジョシュアは痩せていった。それでも両親の懸命な看病の力もあってか、夢を見る間隔も少しずつ長くなってゆき、やがて悪い夢は見なくなった。すでに半年近くの時が経っていた。
夢を見なくなることで、ジョシュアの体力はどんどん回復していった。一時は骸骨のようであったジョシュアの身体も、一年と経たぬうちに元に戻った。元に戻ってからも筋肉がつき、身長も伸び、ジョシュアの身体はどんどん逞しくなっていった。
そして変生の祭りがやってきた。
変生の祭りに参加するのは十三歳になった男の子だけだ。彼らはこの日前髪を切り、男になるのだ。

ジョシュアの町では彼を含めて三十六人が参加することになっていた。
広場にしつらえられた会場で長々と町長の挨拶を聞いたジョシュアらは、壇上に上がり、順に前髪を切り落とした。切り落としたといっても、司祭が剃刀でひと房の髪を切り取るだけだ。そして切り取った髪を持って樅の林に行く。これからが変生の祭りの本番だ。そこには五つの穴が開いている。
蛇の穴だ。
そう子供たちは聞かされていた。その中に彼らは今切り取ったひと房の髪を入れなければならない。勿論それは勇気を試すためのたんなる儀式にしか過ぎず、穴は大人たちが掘ったもので蛇などいない。
子供たちは順に穴に髪を入れていった。穴に投げ入れるようなことをすれば、後で臆病者と罵られる。だから彼らはできるだけ穴の奥に腕を挿し入れて髪を置く。
ジョシュアの前にいたのはヒルという少年だった。彼はぐいと穴の中に腕を入れた。
次の瞬間、ヒルは壊れた笛のような声をあげ、腕を穴から出した。手首に蛇が牙を突き立てていた。扁平な頭を持った大きな蛇だった。
大人たちは慌てて駆け寄り、蛇の頭をもぎとると棒で殴った。その間にもヒルの腕は手首から肘、肘から肩へと蒼黒く腫れ上がっていった。皮膚には赤い血管が浮かび、弾けて血を周りに振り撒いた。
「蛇だ、ジョシュア」

ジョシュアは、そう叫ぶエイモン老人の声を聞いた。
慌ただしくヒルの周りを動き回る大人たちが蠅のように見えた。ジョシュアの視界の中ではっきりと人間であるのは死にゆく少年だけだった。身体を歪め、跳び、のけぞり、人間には不可能な舞踏を続ける少年だけが、ジョシュアの視界の中にあった。
ヒルもまた、舌を伸ばし、へらへらと笑っていた。死へと堕ちゆく者の哄笑だ。生きることを嘲笑っているのだ。ジョシュアはそう思いながらヒルを見ていた。見ることが使命であるかのように、じっと見ていた。
エイモン老人の事件を知っているものが、気遣って声を掛けてきた。ジョシュアはそれに笑みで応えた。
ヒルは死んだ。そして変生の祭りは延期になった。一週間後に行われた祭りの続きに、ジョシュアは加わらなかった。事情を知っているものたちは、それを咎めはしなかった。
結局、ジョシュアが祭りを迎えることはなかった。だから彼は大人になれなかった。かといって子供というわけでもなかった。男にもなれなかった。かといって女というわけでもなかった。なにものにもなれないまま、ジョシュアは二十歳になった。
二度の死に穢れ、なにものでもないジョシュアは禁忌となった。生ける禁忌であるジョシュアは何をすることも許されなかった。男手が足りない彼の家族も、彼に何事を強いることもなかった。
家を出たい。彼は生活から排除されていたが、家を出てからどうすればいいのかが判らなかったの

だ。それを思いついたのが二十歳の時だった。

ジョシュアは誰にも告げずに家を出た。家を出て森に入った。狩りをするためだった。食用になるわけでもなく、他に何の利用価値もないテールズは、純粋に狩猟の楽しみのためにだけ狩られた。従ってテールズ狩りは町の上流階級のためにあった。優秀な猟犬と多くの使用人を使って行われる行事、それがテールズ狩りだった。

ジョシュアが狩ったのもテールズだった。だが彼は遊びのためにそれを狩ったのではない。生きるためだった。

彼は生きるためにテールズを狩った。テールズを狩ることで彼は生きることができた。

ジョシュアは狩りに弓を使った。彼の手製の弓だった。

まず彼の狩りは、まだ見ぬテールズの後を追うことから始まる。足跡、糞、小便、食事の跡、それらの痕跡は優秀な猟師にとってテールズの残した手紙のようなものだった。そしてジョシュアは優秀な猟師だった。

テールズが近くにいることを知ると、ジョシュアは慎重に風下の方に回りこむ。テールズは敏感な臭覚を持っているからだ。

風下に回ると、ゆっくりと、ゆっくりと、彼は獲物に近づき、弓を絞る。

ジョシュアの手を離れた矢は真っ直ぐに獲物の脚を射る。ジョシュアはいつもテールズの脚を狙う。そうして、再び逃げるテールズの後を追うのだ。

今度は見逃すことはない。血の跡を追けていけばよいのだ。しかも相手は怪我をしている。

ジョシュアはゆっくりとそれを追う。時には町で手に入れた煙草を吸いながら、ゆっくり、落ち着いて、獲物の後を追う。

やがて力尽き倒れているテールズに追いつくと、ジョシュアは再び弓に矢をつがえる。そして疲れ果て、動くこともかなわぬテールズをしばらく見ている。

テールズは動かぬ脚を懸命に動かし、両手で這って逃げようとする。ジョシュアは矢尻でそれを追う。

怯え、強張った顔を見て、ジョシュアは尋ねる。

「どんな気持ちだ」

テールズは答えない。答えないことを確認して、ジョシュアは矢を放つ。矢は眉間に深く刺さる。そしてジョシュアは再び聞く。

「どんな気持ちだ」

誰もテールズを食べない。いくら獣であると判断が下されていても、それは食用にするには、あまりにも人間そっくりだった。

だが、ジョシュアはテールズを食べた。テールズしか食べなかった。テールズの肉は岩塩をかじりながら、焼いて食べる。時には皮膚の下の脂肪を生のまま焼いた肉に重ねて食べることもある。脂肪はほのかに甘い。

ほとんど身体のどの部分も食べるが、頭だけは食べない。小屋の近くに並べて置いておく。そこには何十もの頭が置かれてある。下に置かれたものはすでに骨になっている。

一番上は、まだ置かれて間がない。上から下に降りるにしたがい、頭は順に腐敗していく。皮膚がとろけ、粘液をたらし、眼球が眼窩から白い繊維を引きずり這い出て、無数の太った蛆が柔らかくなった筋肉の間から米粒のようにぼろぼろと落ちる。
ジョシュアは暇さえあればここに来て、腐りゆく頭を飽きずに眺めた。濃厚な腐臭も気にならないようだった。
その日ジョシュアは、いつもなら来ぬ森の奥にまで入り込んでいた。血の跡は奥へ、奥へと彼を導いていた。
ジョシュアは紙巻き煙草を取り出して火を点けた。
あたりを見回す。
樹々は彼の小屋の近くにあるものの倍ほども太く、昼の陽光は、かぶさるように茂る枝に遮られ、ジョシュアは海深く潜っているような気になった。
煙草の火を指先で揉み消し、再びくわえると、ジョシュアはさらに奥へと脚を向けた。
地面に落ちた血の跡に集中していたジョシュアは、彼が近づくのに気づかなかった。
ふいに肩を摑まれた。
振り返ると、鼠に似た貧相な顔の痩せた男が立っていた。異臭がした。
ジョシュアはその腕を振りほどいた。
「ここから先へは行くな」
「何故だ」

ジョシュアの問いに、男は顎で大木の根元を差した。そこには立て看板が釘で打ちつけてあった。看板にはこう書かれてあった。
「禁猟区」
「しかし、俺は……」
「いくらあんたがヒトテナシであっても、ここから先に行っては駄目だ」
生きた禁忌であるジョシュアは陰でヒトテナシと呼ばれていた。ジョシュアもそのことは知っていたが、面と向かって言われたのは初めてだった。
「それでも俺が行くと言ったら」
ジョシュアは腰のナイフに手をかけた。それと同時に、男は背から銃を取り出した。銃口がジョシュアの腹にあたった。
「ここから先には行けない」
「判った」
ジョシュアはそう言うと、ナイフの柄から手を離した。
その夜は満月だった。暴くように照りつける太陽の光とは違い、月と星の明かりは優しかった。ヒトテナシと呼ばれるジョシュアにとってもその光は慰めだった。
狩りの支度を終えて、ジョシュアは小屋を出た。道は覚えていた。あの禁猟区まで間違いなく行きつけるはずだった。
ジョシュアは炬火を掲げ、夜の森に踏み入った。

炬火の光に闇がにじんだ。一歩踏み出すたびに、闇はするすると逃げた。天に伸びる枝葉に邪魔されながらもたどり着いた月光は、森を仄かに蒼白く輝かせた。病んだ王女、それが夜の森の貌だ。

ジョシュアは歩いた。胸の中に、魔女の家に着く前の兄妹のように怯えた心があることを楽しんでいた。

禁猟区と書かれた板を見つけた。

「待て！」

後ろから声を掛けるものがあった。ジョシュアは振り向き、汗でも拭うような自然な動きでナイフを投げた。相手が誰かも確認しなかった。する気もなかった。その声がジョシュアを止めたから、声のする方に投げた。それだけだった。手を離れたナイフは、声を掛けた男、あの鼠のような小男の胸に吸い込まれていった。

「やはり、おまえか」

「今からでも間に合う。帰れ」

最後の息でそう言うと、男は前のめりに倒れた。胸のナイフはさらに深く男の胸に刺さった。

「俺はヒトデナシ。法の及ばぬいきものだ」

応えることのない男に声を掛け、ジョシュアはその先に続く獣道に脚を踏み入れた。

焔が風にざわめいた。夜露を含んだ下生えが脚にまとわりつく。名も知らぬ獣や虫が、噂話をする老女たちのようにうるさく鳴いていた。

ふいに森が途絶えた。

広く森が切り開かれている。ポロの試合が観客つきでできるほどの広さだった。そのそこかしこに白い塔が建っていた。突然隆起した地盤のような、あるいは巨人の赤児が砂浜で戯れに造ったような、稚拙で荒々しい、源初的な力を持った塔だった。森の樹々にも増して高くそびえるそれらの塔は、その高さを別にすれば白蟻の巣に似ていた。ただ、それには丸い窓が、眠らぬ百の眼球のように穿たれていた。そしてその窓には灯りが点っていた。滴る月光に濡れて白く光る数十の塔は、異国の墓標のようだった。

塔のひとつから人影が現れた。ジョシュアは慌てて樹の陰に隠れた。人影は二つ。

男のようだ。

何も身につけていない。全裸だった。

影はジョシュアの間近まで来ると異国の言葉で会話を始めた。

ジョシュアは見た。

男たちの尻の後ろで、蛇のようにくねる長いそれを。

尾だ。

奴らはテールズだ。ここはテールズの巣なんだ。

そう思ったジョシュアは反射的に弓を手にしていた。矢をつがえ、弓を引く。

右にいたテールズがジョシュアを見た。

「誰だ」

そのテールズがそう言うのと、ジョシュアが矢を放つのは同時だった。矢は見事にテールズの喉を射抜いた。

悲鳴がした。悲鳴をあげたのは左のテールズ。喉を射抜かれた方ではなかった。そして同時に、何十という塔からも同じ悲鳴が聞こえてきた。それは塔の間をかけ巡り、おう、おう、おう、と大地を振るわせた。悲鳴は長く長く続き、やがてそれは歓喜の声へと変化していった。

喉に矢を突き立てたテールズが、がくりと膝を折った。

顎を突き上げ、苦悶の表情で月に吠えていたもうひとりのテールズも、それに合わせるように跪いた。

ジョシュアが弓を射たテールズが後ろにのけぞるように倒れた。それと同時にもうひとりのテールズも倒れた。

森の中に響く声は、ひときわ大きく、ああと呻いて終わった。

唐突に静寂が訪れた。騒がしく鳴きあっていた虫や獣までが口を閉ざしていた。

肩で荒く息をつきながら、残った方のテールズが言った。

「私にも弓を引いてくれ」

ざわつきが戻った。塔からテールズたちが出てきたのだ。

何十、何百といるそれらはジョシュアに近づいてきた。皆、肩で息をつき、眼を潤ませて、口々に呟いていた。

「私を射よ。私の喉を」

「私は胸だ。胸にその矢を」

「腰のナイフで私の腹をえぐってくれ」

「私は素手がいい。その手で私の首を締めてくれ」

「私を、私を先に殺してくれ。お願いだ」

「私だ。私を殺せ」

ジョシュアはへばりついたような唇をむりやり開き、乾き、固まった舌を動かして言った。

「おまえたち、喋れるのか」

「喋れる」

ジョシュアの前にいたテールズが言った。

「この村の中でなら喋れる。外に出たら喋ることはできない。そのように誓ったからだ」

「何故だ。何故そんなことを誓った」

「おまえたちに殺してもらうためだ」

「それは……」

言葉が続かなかった。

「私たちが喋れなかったからこそ、おまえたちは私たちを獣と定めた。それで何の躊躇もなく私たちを殺すことができるようになったのだ。さあ、私を殺してくれ」

「何故だ。何故おまえたちは殺されたい」

そのテールズは首を傾げた。

「理由が必要か」
ジョシュアは頷いた。
「私たちは死なない。老いることがない。肉体が古びると、分裂する。分裂して古い身体は消え、新しい身体が残る。だから私たちは死なない」
ジョシュアが理解していないのを見てとったのか、テールズは説明を重ねた。
「植物を考えてみろ。植物は枯れる。が、枯れても根は残り、新しい幹をつくる。それが種子であれ、地下茎であれ同じことだ。植物は群れとしてある。群れが滅びぬかぎり、植物は死なない。私たちもそれと同じだ。ここには危険な生き物もいなければ、病気も存在しない。私たちが死を経験することは稀だ。何かの事故で一年に一度、あるかないかだ。私たちは感覚を共有している。だから誰かが死ねば、それを私たち全員が体験することができる。死は、苦痛だ。これ以上ないほどに甘美な苦痛だ。死は、死は……、頼む、私を殺してくれ。お願いだ」
「なら、自ら命を絶てばいいじゃないか」
「私たちは私たちの手を私たちの血で汚してはならない。それは誓いだ。誓いは守らなければならない。だから、誰かに殺してもらわねばならないのだ。さあ、もういいだろう。私を殺してくれ」
「嫌だ。俺は帰る」
テールズたちは哀れむように笑った。
「何がおかしい」

「おまえにここを出ることはできない。あの司祭のように」
「司祭？」
「そうだ。ここに来る前に会っただろう」
「あの小男か」
「あの男が私たちを獣であると裁決を下した男だ。そして初めにこの場所を見つけた男でもある」
「馬鹿な。その裁判が行われたのは今から五十年も前の話だ。あの男はどう見ても三十過ぎ、四十には見えない」
「彼がそれを望んだので、彼には死なない身体が与えられた。彼はこの村の番人であることを望んだのだ。おまえはどうする。道は二つだ。番人か狩人か」
「どちらも選ばない。俺は帰る」
「おまえにこの村を出ることはできない。尻に手をあててみろ」
ジョシュアは尻のあたりに手をやった。何かが尾骨の上にあった。それはだらりと垂れ下がり、ズボンの中、ふくらはぎのあたりまであった。
「嫌だ。俺は嫌だ！」
ジョシュアは絶叫した。
「嫌がってはいない。おまえが望んだからそうなったのだ。おまえは死を恐れた。死から逃れようとした。だから時を止めようとした。おまえは知らなかったのだ。時は流れない。我々が

動き続けているのだ。おまえは立ち止まろうと試みた。その時から死は、時の果ての甘き果実はおまえの手から逃れていったのだ。さあ、どちらを選ぶ。我々に死を与えるか、我々に永遠を与えるか」

嫌だ！　オレは嫌だ！

――どうしてだ。

嫌だ。永遠に生きることなど堪えられない。誰かに殺されることだけを待ち望んで、限りなくひたすら生き続けるなんて堪えられない。

――人は己れの道を歩み続ける。だがその道はいずれ絶える。英雄の道も聖者の道も愚者の道も、すべての道はいずれ絶える。なぜなら道の始まりとは終わりを、道の終わりとは始まりを意味するからだ。終わりのない道とは始まりのない道。つまりは、ない道。ない道をさ迷えばその虚ろさに、癒されることのない痛みと果てることのない飢えが魂を押し潰す。おまえが望んだ道がそれだ。

違う。オレはそんなことを望みはしない。

――本当だろうか。本当におまえは不死を望みはしなかっただろうか。

望みはしなかった。それを望んだのは……。

――それを望んだのは？

ジョシュアだ。

――ジョシュア？　それではおまえは誰だ。

オレは……オレは……誰だ。

――おまえは無念を呑んで犬のように死んでいった男。そして死を免れようとした男。そのために時を止めようとした男。

違う、オレは……。

――今おまえは二つ目のビジョンクエストを終えた。

その声は……。

――我が名はレッドマン。おまえをビジョンクエストに導く者。

初めのビジョンクエストでおまえは無意味な死を体験した。永遠に続く退屈な日々に輝きを取り戻すはずの死は、しかし単なる死でしかなかった。死は死でしか有り得ない。死を持って生を輝かせようとしても無益。では死なねばどうなるか。それはジョシュアの望みであると同時に、閉じた日常から逃れようとするおまえの願いでもあった。が、今おまえが経験したとおり。不死は癒されることのない痛みと果てることのない飢えを与えるのみ。それはやがて魂を押し潰す。あれがそうであるように。

あれ？

――果てしなく魂を喰らい続ける力。それは死を知らぬ。それが故に魂は歪む。あれに死を唄うのだ。目覚めよ、最後の希望よ。

目覚めよ、と呼ぶ声が頭の中で何度も繰り返される。

そしてサナギはゆっくりと眼を開いた。
「オレは……蝉野賢二。サナギだ」
「何を今さら自己紹介してるの」
アジトの中だった。
並べたパイプ椅子にサナギは寝かされていた。
「ヒトミちゃん」
「ネミッサです」
ネミッサは本気で怒っているようだった。
「みんなは？」
「もう帰ったよ」
「そうか……」
サナギは天井を見上げた。
「おまえもレッドマンに会った」
「そうよ。あの馬鹿、何かあたしのこと知ってるくせに、もったいぶって何も教えないの。嫌な奴」
「オレは……」
「そのすぐ後に気絶。映画を見終わるまでには気がつくかと思ったらゼンゼン。あそこからここまであたしが連れてきたのよ。あたしが」

「映画はどんな映画だった」
「退屈なドキュメント。新大陸発見の」
「テールズは出てきたか」
「何それ」
「そうか……」
「またビジョンクエストなの」
「ああ、酷(ひど)い話だった。すごく嫌な夢を見たような……」
「じゃあ、あたし帰るから」
「もう、帰るのか」
「ヒトミちゃんが門限があるって」
サナギはつけっぱなしのモニターの端にある時計を見た。
「ああ、そうか。そうだったな。ヒトミちゃんは門限厳守だから」
「ばっかみたいでしょ」
「素直にヒトミちゃんの言うことをきくのか」
「……うん。じゃあね。鍵はいつものところに張りつけといてくれって。リーダーがすぐに戻るから。電気も全部つけっぱなしにしといていいってさ」
くるりとターンしてネミッサは帰っていった。
サナギは再び天井を見た。

死に関してこれほど考えたことはなかった。それはつまり、生きることについても考えたことがないということだった。
ただ、退屈だった。退屈な毎日に押し潰されそうだった。今は退屈ではない。しかし……。
コンピュータのファンの音だけが、誰かのハミングのように響いていた。

スプーキーズ　—死と接吻—

1

ねえ、ネミッサ、と呼びかけても、もう彼女は返事をしない。
玄関先で「じゃあ、また」と言い残して心の奥底に潜り込んでしまった。
わたしの身体の中にわたしがいる。
あたりまえのことが新鮮だ。
玄関灯を点け、廊下の明かりを点け、居間の電灯を点け、ありとあらゆる明かりを灯して回る。
すべて点けておけばいいようなものだが、それはどうしてもできない。勿体ないというより、生理的に我慢ができないのだ。
これが躾というものかもしれない。そんな形で父親がわたしの中にいる。ネミッサがわたしの身体の中にいるように。

ヒトミはリビングに行き、分厚いチーク材のテーブルに手紙の束を置く。そして椅子に腰を降ろし、それを仕分けし始めた。ほとんどが父親宛のものだ。

絵はがきがあった。

鬱蒼とした森が、世界そのもののような姿でうずくまっている。

説明を読めばアイルランドの森らしい。

絵はがきを手にしてキッチンに入る。やかんに水を入れ火にかける。

そして絵はがきを再び見た。

裏を見ると父親からのメッセージが、いつもの定規で引いたような癖のある文字で書かれてあった。

――元気でやっているか。わたしは風邪を引いた、といえば瞳は心配するかもしれないが、単なる鼻風邪だ。いやがるおまえがいないので、存分にハンカチで鼻がかめる。

調査は順調にいっている。上手くいけば今月末には日本に戻れるだろう。帰ったら天麩羅を食いに行こう。例の蒲モールにある天麩羅屋だ。天麩羅がない以外はアイルランドも良い国だ。前回買って帰ったウィレンドルフのビーナスのレプリカは不評だったから、今度こそ瞳の喜ぶようなものを買って帰ろうと土産物屋を調査中だ。気合いを入れて買って帰るので、気に入らなくてもごみ箱に捨てるのだけはやめてくれ。

ではまた会える日を楽しみにしている。

父より。

同じ文面を何度も何度もヒトミは読んだ。湯が沸いた。ヒトミは煎茶を入れ、テーブルの前に腰を降ろした。

ヒトミの父親は考古学者だ。今はアイルランドでドルイドの遺跡を調査している。年中海外を飛び回っているのだ。家にいる時の方が少ない。千の土産物より、一日でも多く家にいて欲しいとヒトミは思っている。そしてヒトミがそう思っていることを父親は知っている。

身勝手で学者馬鹿でしょうがない人間だ、とヒトミは思う。そう、しょうがない人なのだ、と。

幼い時からヒトミは父親っ子だった。母親と奪い合いになるほどに。

お茶をすすりながらヒトミは母親のことを考えた。幼い頃に亡くした母親のことを。

ごく普通の母親のように、彼女はヒトミを愛していた。そしてヒトミは母親を、勝手にライバル視していた。父親の愛情を独占したかったのだ。

日常生活というものがまったくできない夫と反抗的な娘に、母親は手を焼いていたのだろう。

その時ヒトミは母親に酷く叱られた。何で叱られたのかヒトミも覚えていない。しかしその時、生まれて初めて叩かれたことははっきりと覚えている。とはいえ尻をぽんと叩かれただけなのだが。しかしヒトミにはショックだった。思わず「お母さんなんか死んじゃえ」と口走ってしまった。その時、母親はたいそうふさぎ込んでいた。それを見てもヒトミは、わたしのことを叩くから悪いんだ、と思っていた。だから決して謝ろうとはしなかった。

叩いたことでショックを受けていたのは母親の方だっただろうし、娘に口汚く罵られたのも初めてだったに違いない。落ち込むのはあたりまえだ。と、今のヒトミは思う。そして母親が元気がなかったのはそれ以上に体調がすぐれなかったからだということも知っている。

翌日、母親は入院した。

両親は何も教えなかったが、それが深刻な出来事だということは雰囲気からヒトミにもわかった。病名は膵臓ガン。長い間誰にも言わず堪えていたのだろう。それがわかった時にはもう既に身体のあちこちに転移していた。結局入院して一カ月も経たないうちに、母親は病院で息を引き取った。ヒトミが小学校に入学して間もない時だった。

ベッドに横たわり、明らかに生者とは違う表情で横たわる母親を見ても、ヒトミは泣かなかった。誰も見ていない隙に、ヒトミは母親の二の腕を人差し指でつついてみた。冷たく、張りがなかった。ああ、もう元には戻らないのだ、と明瞭に感じた。哀しみよりも怯えがあった。取り返しのつかないことをしたのだということが恐ろしかった。

ヒトミは思っていた。母を殺したのはわたしだ、と。あの時「死んじゃえ」と言ったから母は死んだのだと。

幼い少女の思い込みだ、と言ってしまえばそれまでだ。だがその時のヒトミにとってそれは明らかな事実だった。その想いはいつまでも、そう、今でもヒトミの心の中に残っている。当然今のヒトミは、言っただけで人が死ぬわけがないことを知っている。だが、どうしてもその時の罪の意識は消えない。

何か酷く自虐的な気分になった時、ヒトミは鏡に向かってこう話しかけることがある。

罪は――償わねばならない。

ヒトミが優等生であり続けるのは父親のためだ。父親の求める「良い娘」であり続けることそれが彼女の償いのひとつだ。

あなたの妻を殺したのはわたしです。

ヒトミは何度もそれを父に向かって告白したい誘惑に駆られた。だが言ったところで父親は取り合わないだろう。もし自身が父親なら取り合わない。何を馬鹿なことを言っているのだと諭すだろう。そして、それが馬鹿なことであるのは、ヒトミ本人が一番よく知っているのだ。

だが、罪は償わねばならない。わたしはあなたの妻を殺したのだから。もう二度とあなたを悲しませてはならないのだ。たとえあなたのいない時であろうと、あなたが決めた門限は守らなければならない。あなたが喜ぶのなら、どんなことでもするつもりだ。

それが意味のない贖罪であるとわかっていても、ヒトミは父親にとっての良い娘を演じ続けなければならないのだ。

しかし、サナギにだけは思うままに振舞えることもあった。なぜなら彼は共犯だからだ。彼にだけはヒトミの秘密を告白したから。母親を殺したのだと。今、彼がそれを覚えているかどうかは知らない。おそらく覚えていないだろうとヒトミは思う。だが、そんなことは関係ない。あの日ヒトミとサナギは共犯となったのだ。

このマンションで、ひとりで過ごす時間は長い。

すると罪の意識は、持て余すほどに長いその時間の中で少しずつ膨れていく。
食器を片づけながら考える。わたしが母親を殺したのだ。部屋に入って服を着替えながら考える。わたしが母親を殺したのだ。部屋に横になってサナギから借りたCDを聴きながら考える。わたしが母親を殺したのだ。椅子に座って愛用のパソコンを使いながら考える。わたしが母親を殺したのだ。だから――。
モニターにパラダイムXのロゴが現れ、消える。
そして血のように赤い光がヒトミを包んだ。
だからわたしは、罰を受けねばならない。
そうだ、とヒトミは思い出す。
わたしだけの秘密の時間を忘れていた。
ねえ、ネミッサ。
ヒトミはもう一度呼びかけた。返事はない。いつもならヒトミの心の中の思いに、いちいち反応してくる。なのに今日は家に帰ってから一言も喋りかけてこようとはしない。本当にいなくなったのかもしれない。
わたしひとりだ。
ネミッサが来てから、初めての秘密の時間だった。
机の引き出しから、黄ばんだ封筒を取り出す。
机の上に乗せ、ガラスの文鎮を乗せる。

それから引き出しの奥を探り、飴色の太いゴムのチューブを取り出した。
それを持って浴室に行く。
服を脱ぐ。脱いだ服は一枚一枚丁寧に畳んでいく。全裸になり浴室に入る。
ゴムチューブの両端にはフックがついている。それを洗濯物を吊るす金属の棒に引っかけた。
Uの字になったそのゴムのたるみを引っ張り、そこに首を引っかける。爪先立ってようよう届く高さだ。ゴムを力一杯引っ張って一重首に巻きつけた。
片手でコックをひねり、シャワーを流す。
熱い湯が頭から首筋、肩へとかかる。
湯気が視界を閉ざした。
そしてゴムを押さえている手を離した。同時に身体を前に倒す。
ゴムのチューブがヒトミの首を締める。
首吊りは未遂することが少ないと聞いた。失禁でもして見苦しいと嫌なので、シャワーは必ず流しておく。机に置いた遺書は小学校の低学年の時、初めての秘密の時間を持った時に書いたものだ。その時はまだこんな方法を思いついていなかった。白いクレヨンを食べたら死ぬと聞いていた。だからクレヨンを食べた。ちょっとずつ分量を増やしながら。
かっと顔が熱くなる。
すぐに意識が遠のいていく。
ヒトミは数を数え始めた。（ひとつ・）

首を吊った場合、呼吸困難で死ぬことはまずない。（ふたつ。）
勢いをつけなければ首関節を脱臼して死ぬこともない。（みっつ。）
大概の場合、頸動脈と椎骨動脈が押され、脳内への血液供給が止まって死ぬ。（よっつ。）
意識を失うまで通常三分とされる。が、（いつつ。）
すぐに意識を失ってしまう場合もある。（むっつ。）
初めは三つまで数えてやめていた。次第に数は増えていった。（ななつ。）
今は三十まで数えることにしている。（やっつ。）
その間に意識を失えば、（ここのつ。）
このまま死んでしまうだろう。（とお。）
その時は罰が下ったのだ。（じゅういち。）
あの時の罰が。
ねえ。
（じゅうに）……誰？
あたし。
ネミッサ！
やめた方がいいよ。
何を。
こんなこと。

……いつから見てたの。
ずっと。
どうしてやめた方がいいの。
死は罰じゃないから。
嘘！
死は、ただの死よ。それは罰ではないの。
ふふ、まるで死んだことがあるみたいね。
……そうね。死んだことがあるのかもしれない。覚えてないけど。でも、これは確かよ。死は罰じゃない。あなたは死のことを考えすぎたのよ。死は、ただそこにあるだけ。とてもリアルなものよ。あなたの考えの中にある死とは、ずいぶん違う。
嘘。
嘘じゃない。
嘘。
そして何もかも包み込む突然の闇。

2

玄関のドアを開けると汚れた革靴があった。

ランチは舌打ちする。

乱暴にドアを閉めて、キッチンに向かった。居間にあぐらをかいて、父親が新聞を読んでいた。ちらりとそれを見てから、ランチはキッチンに入る。冷凍庫を開けて、冷凍のピラフを取り出す。

「飯、作っといたぞ」

父親が声を掛けた。ランチは再び舌打ちした。

新聞を置いて、父親はランチを見上げた。

「冷蔵庫の中に入っている。チンしたらすぐに――」

「いらねえよ、そんなもん」

「……そうか」

再び新聞に眼を戻す。三度舌打ちしてランチは言った。

「そんな顔すんなよ」

新聞を乱暴に傍に置いて、父親は立ち上がった。

「どんな顔だ」

「そんな顔だよ。息子に反抗されるかわいそうな父親って顔だ。同情引こうたって無理だよ」

母さんを殺したくせに、と喉まで出た言葉を呑み込む。

「言いたいことはわかるがなあ、潤之介」

「名前呼ぶなって言ってんだろう！」

「息子の名前を呼んで、なんで悪い」

父親は息子に近づいた。その眼を睨みつける。

「あんたのつけた名前だからだよ」

ランチもまた父親を睨んだ。

先に眼を逸らせたのは父親だった。ふうと息を吐くと、身体が半分に縮まったように見えた。

ランチは冷凍ピラフの袋を冷凍庫に叩き込み、乱暴に扉を閉める。そのまま己れの部屋に入っていった。

自分で取りつけたカードロックを開き、中に入ると再び鍵を閉めた。

部屋はまるでどこかのジャンク屋のようだった。そこかしこに電子部品が積み上げられ、今にも雪崩を起こしそうだ。

床に直接置いたモニターの前にあぐらをかく。ランチが徹底的に改造を加えたコンピュータがそれに接続されている。

キーボードに手を置いて、ランチは父親のことを考えた。

かつて、そう五年前まで、ランチは父親を敬愛していた。恥じることなく誰にでも父を尊敬

していると言えた。五年前までは。

彼の父親はコンピュータ部品の製作を行う会社で技術主任をしていた。そして五年前、工場がこの天海市に移転することになった。その時は単なる移転だと聞かされていた。が、それは移転ではなく乗っ取りだった。天海市に移った時には別の会社の看板がつけられていた。多くの技術者が職を失った。しかし彼の父親はその新しい会社、アルゴン精工に技術主任として迎えられたのである。

父親が事前に乗っ取りの事実を知り、それを黙認することで今の地位を得た。そういう噂がすぐにたった。ランチは否定されることを期待して、父親に責めよった。父親は沈黙を守った。ランチはそれを肯定ととった。かつての同僚からと思われる嫌がらせが始まっていた。昔から病弱だった母親が心労で倒れ、間もなく亡くなった。

それ以来ランチは父親を憎んでいる。

厳格な父親に、ランチは厳しく育てられた。ランチの古風な性格は父親とそっくりだった。父親はランチのあこがれでもあったのだ。だからこそ、その憎しみも深かった。

コンピュータを起動させた。パラダイムXをのぞくためだった。何故か父親はパラダイムXにランチがかかわることを嫌っているようだった。

だからこそ、ランチはサナギが手に入れたIDとパスワードで、一日一回はパラダイムXをのぞくようにしている。パラダイムXはまだプレオープンの段階だった。今の時点では、まだ

接続料は無料だった。やがては有料になるだろう。その時はIDの正式な(とは言いにくいが)持ち主であるサナギが接続料を払わなければならなくなる。そうなれば各自が自分でアクセス権を手に入れなければならないだろう。合法的にか、非合法にかは別として。

だがとにかく、今の時点ではパラダイムXへのアクセスは時間と無関係に無料だった。ファミリーレストランの端末で初めてパラダイムXを見たあの時。ランチはパラダイムXの街が現れる瞬間に、赤い光に包まれたような気がした。短い時間ではあったが、不思議な心地好さを感じた。

恋人と出会った瞬間。それも己れの人格をすべて知って認めてくれる恋人と出会ったような心地好さ。いいところも悪いところも、何もかも含めて、それは正しいのだと優しく諭してくれる誰か。己れの母親の幻影か、ともランチは思っていた。家に帰ってパラダイムXとアクセスしてもそれは感じなかった。だがもう一度、彼らのアジトで、誰もいない時にパラダイムXとアクセスした時、また赤い光に包まれた。

ああ、許されているのだ、何もかも、という気分とともに、声が聞こえてきた。

何故この世の不正を暴こうとするんだい？　正義？　違うよねえ。父親への反感？　反発？ああ、ちょっと近いかもしんない。でも違うよね。知ってるくせに。自分で言ってみなよ。君が何を願っているのか。

父親が君を作った。——何嫌な顔してるの。事実は事実で認めなくちゃ。君の中の正義感は

君のお父さんの正義感。君の価値観はお父さんの価値観。ね、そうでしょ。嫌でも嫌でも離れたくても、それは認めなくちゃ。君の中の世界はお父さんの世界。そんな世界、壊したいよね。なにもかも微塵にまで砕いて捨てたいよね。ほらほら、やっぱり君もわかってるんだ。

君の願っているのは破壊だよ。この世をすべて砕いて燃やして灰に変えること。ね、そうでしょ。——ほら、頷いた。ほんとはわかってたんだよね。君は知っていた。でも君は賢いものね。だから際限のない破壊の衝動をコントロールするために社会正義という言い訳を用意した。

でもね、よく考えてみて。この世を破壊するのって、そんなに悪いことなの。壊されて悪いような何かが、この世界にあるわけ。この世界を動かしてる奴らってさ、結局は君のお父さんと変わらない。そんな奴らの造ってる世界、壊しても構わないと思わない？　もういいと思うよ、言い訳しなくても。願いをそのまま叶えようよ。もう君の思うがままに振舞おうよ。だって君にはその力があるんだもん。

さあ、破壊しようよ。なにもかも微塵に砕いちゃおうよ。なにもかも燃やしてしまおうよ。みんな、みんな、なにもかも、なにもかも……。

目覚めたらリーダーが側にいた。

パラダイムXの画面をじっと見ながらぼんやりしていたらしい。サナギみたいに気を失ったりはしなかったが、あのままリーダーに起こされていなかったら、どうなっていたかわからな

い。

時間にして一、二分の間のことだった。

あの声は、リーダーに起こされた時もまだランチの耳の中に残っていた。抗いがたい誘惑だった。

破壊しろ、破壊しろ、破壊しろ。

そうすればどんなに気持ちいいだろう。

そう思っている自分に、ランチは鳥肌立った。

だが、その日以来、赤い光を見ていない。外でアクセスしていないからではないか。ランチはそう推測していた。初めに赤い光を見たのは、市が配給した端末を使っている時だった。アジトで経験した時も、あのコンピュータはいくつかあるコンピュータの中でも配給された端末をもとに少しだけ改造を加えたものだ。家にあるコンピュータは原型がわからないほどにランチが手を加えている。市が配給した端末に何かあるのでは。ランチはそう考えていた。

既にパラダイムXにアクセスしていた。

ここから謎を探れないものか。

ランチはそう思った。

スプーキーズの中でランチはハード担当だ。ハードの改造ならランチに優るものはいなかった。が、ハッキングに関してはリーダーやユーイチの方が技術がある。いつもなら、まず最初にリーダーに相談していただろう。そうでないにしろサナギかヒトミか、もっとハッキングに

詳しい人間に話をしていただろう。
でも、これは俺の仕事だ。
そう固執することがおかしいとは思っていなかった。まして再びあの声を聞きたくてアクセスしているのだとは、欠片も思っていなかった。
キーボードを操作する。耳鳴りのようにその耳元で囁き続ける声がある。
破壊しろ！
破壊しろ！
破壊しろ！

3

乱雑な部屋だ。床にはガラクタが散らばって、敷かれた絨毯がほとんど見えない。
シックスは壁に立て掛けた姿見に見入っている。手に持った拳銃はコルト・ガバメント四五口径。もちろんモデル・ガンだ。構え、狙い、引き金を引く。
「なんで奴がリーダーなんだ」
鏡の中の己れを見ながら呟く。
シックスは煙草を吸わない。煙草を吸う奴は意思の弱い人間だと思っている。だからリーダーが、やめたはずの煙草をいつも咥えているのは意思の弱い証拠だと思っている。

なんで奴がリーダーなんだ。
そのハッキングの能力は認めていても、この疑問が何かと頭をかすめる。
再び構え、狙い、引き金をひく。
なあんで、俺がリーダーじゃないわけ。
ユーイチはただのガキだし、サナギだってそうだよな。ヒトミなんかどうして俺たちと一緒にいるのかわからないもんな。ランチなんて、まるっきり小言オヤジだよ。あんな奴らにまかせといたら、駄目ンなるよ、スプーキーズは。
シックスは大きく息をつき、拳銃を投げ捨てた。鈍く大きな音がした。ちらりと扉を見る。鍵は掛かっていた。この時間なら両親が来ることはまずない。
あっ、そうだ、とシックスは不意に思いつく。
パラダイムXをのぞいてみよう。
起動！
何がIDだ。何がパスワードだ。小煩い管理体制に天誅！　よしよしいい子だ。よう、案内のお姉ちゃん。いつもありがとう、感謝してるよ。わあああ！　なんだこの……この光……血だよ。まるで血だ。だから俺の魂に、どうして俺の……。
びっくりした、何だったんだろう。何かが俺に話しかけてきたような気が……。
まあいいか。
これがパラダイムX。ほんとにリアルなパラダイムX。それにしてもどうしてあいつら俺の

ことわかんないんだろうな。俺と楽しんだらいいのに。どうして俺のことわかろうとしないんだろう。無条件で俺のこと認めてくれてもいいじゃない。
　そりゃあ無理だな。
何だよ、おまえ。
友達だよ、友達。
馴れ馴れしい奴だな。
友達だからね。
それで何が無理なんだよ。
無条件におまえのことを認めるってこと。
何で無理なんだよ。
だって、おまえは……。
何だよ。
だっておまえはヒトゴロシだもん。
何言ってるの？
おまえがヒトゴロシだって言ってるの。
……嘘だ。
ヒトゴロシ。
おまえなんか友達じゃないよ。

かもしれないね。ヒトゴロシの友達はシカバネしかいないから。
シカバネ？
死んだ方が人って素直になるから。あの人だってきっとおまえのこと愛してるって素直に言ってくれるよ。
あの人って。
あそこの子。
あの子？　赤いワンピース来たあの女の子？　小学生？
小学五年生。
俺、ロリじゃないよ。
恋人とかの話してるんじゃないだろ。おまえのこと理解して愛してくれる人の話だろう。
あっ、呼んでる。こっち向いて、手振ってる。
行ってこいよ。
……うん。

4

湯気を立てるココアを一口。
さっき母親が差し入れに持ってきたものだ。

「佑一さん、あんまり根を詰めちゃ駄目よ。ほら、お母さんの特製ココア。何してるの。わあ、お母さんにはちっともわからないわ。難しいことしてるのね」

ユーイチが相手をしなくても、勝手に二十分は話していく。疎ましく思わないこともない。しかし抗議をするほどでもない。早い話、関心がないのだ。だからこそ二十分喋り続ける母親を横に、いないと同然の態度をとれるのだ。

両親ともにユーイチを溺愛していた。父親は官庁に勤めているエリートだ。滅多にユーイチと顔を合わすことはなかったが、ユーイチは父親の笑顔以外の顔を見たことがない。

幼い頃から欲しいものは何でも手に入った。そうなるとだんだん欲しいものがわからなくなってくる。手に入るものは手に入るが故に興味がなくなる。そして手に入らないものが何もないなら、何もいらないということになる。

オレにはなんでもある。

ユーイチは小さく呟いた。誰にも聞こえない小さな声で。

オレには何もない。

再び呟く。溜め息のようだった。

広い部屋だ。招待された知人はみんな驚く。さすがにテニスの試合はできないが、リングを張ってのレスリングの試合なら可能だ。その広い部屋は、ほとんどがらんどうに近い。部屋の中央にコンピュータが置かれている。その他にはほとんど何もない。ユーイチはものに執着がない。飽きたら誰かにあげるか捨ててしまうのだ。

ココアをまた一口。

暖かく、甘い。ミルクと砂糖がいっぱい入った幼い頃からのユーイチの好物だ。

最近、手に入れたいものはこれじゃないかな、と思うものを発見した。発見したような気がする。

スプーキーズだ。

ユーイチはスプーキーズを見つけた。インターネットを使ってリーダーがスプーキーズのメンバーを探していた。募集していたわけではない。いろいろなところから情報を集めて、これはという人材を見つけては連絡していたのだ。ユーイチはそれをハッキングした。リーダーのことだから、いくつものトラップを仕掛け、そう簡単にはハッキングできないようにしていた。それをくぐって連絡してきたユーイチの才能をリーダーは認めた。そしてスプーキーズの仲間に加わることになったのだが……。

ユーイチはスプーキーズのメンバーが好きだった。その時まで大抵の人物には無関心だったユーイチだが、彼らには関心があった。何を喜ぶのか、何を嫌がるのか、何を愛しているのか、何を憎んでいるのか、何を考えているのか。何でもいいから知りたかった。特にシックスが好きだった。一所懸命にクールにしようとしているのに、どこかずれているところがかわいかった。だから相手をして欲しくて何かちょっかいを出す。蹴られると嬉しかった。時々親切にしてもらうともっと嬉しかった。一番嫌なのが相手にされないことだった。

なのに、誰も自分のことに関心がないような気がした。嫌がられているのかもしれない、と

も思った。どうしてかはわからない。
　どうして、みんなオレのことをわかってくれないのだろう、とユーイチは思う。どうしてみんな理解してくれないのか、と。こんなに努力してみんなにわかってもらおうとしているのに。今までそんなことしたことなかったのに。なのに、どうしてみんなオレのことをわかってくれないんだろう。オレのことを好きになってくれないんだろう。
　最近はいつもこんなことを考えている。結論は出ない。疑問だけが頭の中でふわふわと浮かんでいる。
　ココアを飲み干し、コンピュータの電源を入れた。起動と同時にパラダイムXにアクセスするように設定してある。メンバーの誰かが遊びに来ているかもしれないからだが、一日中アクセスしていても、まだ一度も会ったことがない。
　パラダイムXのロゴが消えた。
入れ換わりに真紅の光がユーイチを包んだ。
あ、まただ。
これもパラダイムXのイベントのひとつなんだろうか。
ちょっと気持ちいいんだよね、これ。
それにしても……今日は何だか長いな。いつもならすぐに。
ちょっと君と話したかったんだ。
えっ、声が聞こえた？

あたりまえだよ。オレが喋ってるんだから。
誰なの？
どうしてみんなが君のことを理解してくれないと思う？
えっ……。
いつも考えてるでしょ、このこと。
何で知ってるの。
その前に答えて。どうしてみんなが君のことを理解してくれないと思う？
わかんない。
教えてあげようか。
うん、教えて。
それはここが君の世界じゃないからさ。
それって、どういうこと？
君をのぞいたすべてからこの世界が作られているってこと。
それって、それって……。君、酷いこと言ってない？
でも真実だよ。
もし、もし仮にそうだとして、オレはどうしたらいいのさ。
君は賢いからわかってるだろう。
こういうこと？　ここがオレをのぞいたすべてで成り立ってるのなら、ここをオレの世界に、

　オレだけの世界に変えればいい。
　さすがだね。そのとおりさ。今ある世界はもう必要ない。だから今ある世界は捨てちゃおう。
そしてここを君の世界に変えなくちゃ。すべてを君の世界に変えなくちゃ。
　世界を変えるんだね。
　そうだよ。世界を変えるんだ。君に変わる必要なんてない。だって君は正しいんだから。そして間違っているのは世界なんだから。
　やっぱりね。何だかそんな気がしてたんだ。
　でしょ、でしょ。
　そうか。そうだったのか。おかしいなって思ってたんだ。
　これさえわかれば、後は実行するだけだね。
　そうだね、実行するだけだね。
　それじゃあまず手始めに……。
　何？　何？　何をしたらいいの？
　こっちにおいでよ。教えてあげる。

5

　シャッターを閉ざした倉庫が、行儀のいい犬のように並んでいる。天海ベイの倉庫街は閑散(かんさん)としていた。五年前まで、このあたりは小さな漁村だった。それが今はハイウェイが走り、海上には天海フロートと呼ばれる資材置き場ができた。少し遠くを見れば、完成間近の天海空港がある。海岸は埋め立てられ、海岸線は幾何学的な直線で構成されていた。
　真夜中だ。
　ぽつり、ぽつりとある街灯が、その周辺だけをぼんやり照らし出していた。
　その下で、リーダーは咥えた煙草のフィルターを噛(か)んでいた。火は点いていない。長いまま捨てられた煙草が数本。足元に転がっていた。
　潮風が冷たい。
　リーダーはコートの衿(えり)を立て、両手を擦(こす)り合わせた。
　遠くに明かりが見えた。二つ並んだそれは悪鬼の瞳のようだ。見る間にリーダーの方へと近づいてくる。
　イタリア製のスポーツカーだった。
　それはリーダーのすぐそばまで来て、停まった。
　ドアが開いた。
「遅い」
　リーダーが言った。
「まったくおまえは趣味が悪いよ。古臭いヤクザ映画じゃないんだ。こんなところで待ち合わせなくてもいいだろう」

男だ。イタリア製のスーツを着こなした長髪の男。
「それで、嫌がらせに遅れて来たのか」
男は街灯の明かりの下に来た。
「そんなつまらないことを考える暇はない。仕事を済ませてここまで直行してきたのさ」
真夜中にサングラスを離さない男。
アルゴンソフト社の社長、門倉だった。
「どうしてネットか電話を使わない。ハッキングの名人なら、傍受されない方法をいくらでも考えつくだろう」
「ハッカーをやっていたら、ネットや電話を使って内緒話なんかできなくなる」
「何もかも筒抜けか」
「特にネットで秘密の通信をしようなんて考えるのは無謀だ」
そう言うとリーダーは門倉を睨んだ。黒いサングラスに隠れて、その表情がわからない。
「何が言いたい」
「ファントムソサエティを知っているか」
門倉を見つめる。が、彼の表情は変わらない。
「さあな。新しいネットの名前か」
「噂を聞いた」
「何の」

「病気だ。突然魂が抜けたようになって、廃人同然になる。発病は、どういうわけかコンピュータを扱っている時に起こる」
「聞いたことはないな、そんな噂。電磁波の障害か何かか」
「そんな噂もある。しかし別の噂もある。パラダイムXにアクセスしているものがこの病気にかかる。パラダイムXは呪われていると」
「そんな話を信じているのか」
門倉は鼻先で笑った。
「パラダイムXにアクセスすると、つながると同時にモニターが赤い光を発する。いや、それは物理的な光ではない。もっと別種の何かだ」
「で、それが病気の原因だと言いたいのか。なあ、桜井」
門倉はリーダーの本名を呼んだ。
「俺がおまえを高い金で雇っているのは何のためだ。俺はそんな下らない噂話を集めて欲しいと言ったか?」
「赤い光はぼくも見た。視界がすべて血のような赤い光で閉ざされる」
「ほう……」
「光に包まれた時、声を聞いた」
「声……」
「正直になれ。声はそう言った」

「えらく教条的な声だな。おまえの親父の霊か」
門倉は薄く笑った。
「能力のあるものがそうでないものを支配するのは当然のことだ。他人は道具に過ぎない。声はそう続けた」
門倉が拍手した。
「そのとおりだ。おまえの親父の霊とは友達になれそうだな」
リーダーは門倉を無視して話を続けた。
「優秀なものがそうでないものを支配するのはあたりまえだと、そうおまえは思っているだろう。声はそう言った。しつこくぼくに問いただした。そう思っているだろう、と」
「思うわけがない」
吐き捨てるようにリーダーは言った。
「……なるほど。正直になれ、か。正直になれよ、桜井。スプーキーズは俺の出資でおまえが作った。そのことをメンバーに告げているか」
リーダーは首を横に振った。
「言わないのは何故だ。言っても理解できないと思っているからだろう。よけいなことを考えずに、俺の指示どおりに動けと思っているからだろう」
「違う！」

「正義のためにやっているから仕方ない、か。同じだよ。おまえは俺と同じだ。己れの目的のために他人を利用する。目的が正しければ、それが許されると思っているのか。そうなら、何が正しいかを判断しているおまえという人間は傲慢(ごうまん)な男だ。俺と同様な。おまえは俺を羨(うらや)んでいるんだ。思うがままに行動できる俺をな。劣った人間は、より優れた人間のために動くべきなんだ。それを認めろ」
「……認められんな」
「そうか。まあいい。それはおまえ自身の問題だ。俺には関係ない。しかし金を払っているぶんだけは働いてくれ。これは契約だ。仕事なんだ」
「わかっているさ」
「俺はおまえが優秀なコンピュータ技師であることを認めている。天才的な才能の持ち主だとな。そしておまえが企業内で働けるタイプの人間でないことも知っている。だからこうやって、契約社員として働いてもらっている。だから桜井、俺の頼んだことだけをしろ。俺はネットの整備のためにおまえを雇っているんだ。それ以外によけいなことをするな」
「脅しか」
「おまえを脅しても何の得にもならんよ。上司として命令しているんだ。何かあったら連絡をくれ。ただし、こんなところに呼び出すのはやめて欲しいな」
それだけ言うと、門倉は踵(きびす)を返して車に戻っていった。
「おまえはこの街で何をしようとしている」

リーダーは門倉の背中に向かって問い掛けた。
門倉はそれを無視して車に乗った。
「おまえはこの街をどうしようと思っているんだ！」
リーダーの叫びはアイドリング音に掻き消された。タイヤを鳴らしてUターンすると、車はぐっと加速した。
走り去る車に、リーダーはもう一度叫んだ。
「おまえの思い通りにはさせんぞ！」
車は既に、闇の中へと消えていた。
リーダーはポケットを探り、ライターを取り出した。それを眼の前に持ってきて、初めてそれに気づいたようにじっと見つめる。
大きく深呼吸をした。
くそ！
リーダーはライターを地面に叩きつけた。透明な安物のライターはからからと情けない音をたててアスファルトの上を滑っていった。

6

天海市あかね台は取り澄ました住宅街だ。
高級住宅街と呼んでくれ。
街全体がそう主張している。
あかね台には闇がないように見える。どこもかしこも清潔な蛍光灯の明かりに照らし出され、影は身を細め今にも消え入りそうだ。
その男が際だって見えるのは、彼が闇に等しい存在だからだろうか。それとも単に彼が外国人だからか。
午前六時。天気は快晴。
分譲マンションが建ち並ぶこのあたりを歩いているのは、犬を散歩させる中年の女性。早朝の散策を楽しむ老夫婦。ジョギングをする青年。その誰もが男を見ると避けて通る。
一筋の乱れもなく後ろに撫でつけた黒髪ときれいに整えた顎髭。黒いサングラスに背広姿の男は、映画の中にしか存在しない殺し屋のようだ。
それぞれに意匠を凝らしながら、それでも共通する何かが同じように見せているマンション群。
男はその中の一棟に入っていく。オートロックの玄関で、そこの住人のように慣れた手つきで暗証番号を押した。小さな機械音とともにガラスの扉が開いた。ロビーを抜け、エレベーターに。すれ違った若いOLが怯えたように身を竦めた。
男はそんなことを気にもとめず、エレベーターに乗り込んだ。希望の階に到着し、扉はしゅうと音をたてて開いた。

廊下に出た男は迷うことなくひとつの部屋を目指す。扉の前で立ち止まり、扉の隅にあるスリットに白いカードを差し込んで、抜く。次にポケットから取り出した細い金属の棒を二本、鍵穴に差し込んだ。それが本当の鍵であったかのようにあっさりと鍵は開いた。
男は扉を少しだけ開く。
内側にチェーンは掛けられていなかった。住人はこのマンションの警備システムを信頼しきっているのだろう。
扉を開き中に入る。後ろ手にそっと扉を閉め鍵をかける。
廊下を進みながら扉を開いていく。
ベッドルームだった。
頭が二つ、並んでいる。男と女だ。
音もなく男は部屋に入った。
手品のように葉巻を一本取り出し、火を点けた。
それから袖をめくって、リストバンドタイプのコンピュータを操作した。
一瞬の閃光とともに、鎧を着た巨人が現れた。血塗れの両手に剣と楯を持っている。
「フィネガン様、お呼びで」
巨人は言った。
その低く響き渡る声に、ようやくベッドの男女が目を覚ました。
女が慌てて毛布を胸にかき寄せた。

「誰だ」
腫れぼったい眼で、男は言った。何も理解できていない顔だった。
「アルゴンNSビルで拾った物について聞きたい」
葉巻の煙が口の端からゆらゆらと立ち昇った。
「えっ、何が。何、それ何だよ。そのでかい男はなんだよ」
早口で男は言った。
「よけいなことを言うな。質問にだけ答えろ」
「何偉そうなこと言ってんのよ。ヒロ、早くこいつら追い出してよ」
ようやく目覚めてきたのか、女が苛立った声をあげた。
「ラームジェルグ」
フィネガンが独り言のように呟いた。
巨人が動いた。その長剣がまっすぐ女に向かって振り降ろされた。
羽毛が舞う。
舞った羽毛がたちまち赤く染まっていく。
がくん、とベッドが傾いだ。
その時男はまだ、ベッドごと女が縦にまっぷたつにされたことを知らなかった。ベッドの縁に手をかけ、滑らないようにするのが精一杯だった。
「乱暴はやめろよ」

場違いな科白を、愛想笑いさえ浮かべて男は言った。それから飛び散った血に気がつき、次に断ち斬られた女の断面を見た。

「騒ぐなよ」

すかさずフィネガンが言うと、男は慌てて掌を口に押し当てた。喘ぐような悲鳴が、行き場を失ってひいと指の間から漏れた。

蒲団がずり落ち、男の貧弱な全裸が現れた。

「アルゴンビルであれを拾った時、おまえは何か見たのか」

フィネガンに問われ、男はその言葉を神の聖句であるかのように何度も口の中で呟いた。そして――。

「何も。何も見ていないよ。俺が歩いてたら上から落ちてきたんだ。上を見上げたけど何も見えなかった。本当だよ。本当に何も見なかった。第一夜だったし、暗かったし、あのビルはスゲエ高いビルだろ？　なっ、そうだろ？　あっ、そうだ。あんたと同じことを聞きに来た男がいる。冴えないオヤジだよ。ださいコート着て、眠そうな顔した。確か電話番号を置いてった。何かを思い出したことがあったら連絡くれって言って――」

喋り続けている限り大丈夫だ、と男は思っているようだった。それは事実だった。喋り終わると同時に男の胴は巨人の剣で二つに断ち斬られた。

7

天体博物館から戻った翌朝、サナギは新聞にじっくりと眼を通した。出社前の父親が、トーストを齧りながら「心を入れ換えたのか」とからかうほど熱心に読んだ。それからテレビのニュース番組を一日中見ていた。

翌日も、翌々日も、サナギは天体博物館での事件がどこかに報道されていないかと探した。そんなものはどこにもなかった。ファントムソサエティが事件を隠蔽したとしか考えられなかった。

人ひとりが死んだのだ。なのに何の報道もされない。

ファントムソサエティはそれだけの力を持っているのか。そんな組織と戦おうとしているのか。

が、サナギに恐れはなかった。彼が感じているのは驚きだった。

マスコミをも操作する強大な、そして謎の敵。そんなものが現実に存在するとは思えなかった。ある意味では悪魔の存在よりも奇妙だった。

悪魔との戦いはそれからも続いた。それはまるでハリウッド製のアクション映画のようだった。

彼らは悪魔を叩き、蹴り、ねじり、潰していった。流れる体液、命乞い、怯える顔。相手が

悪魔であるが故に許される徹底した暴力。罪悪感のない殺戮。それは一種性的なにおいのする快楽だった。もしここにヒトミがいたら、多少は彼らの中で膨れ上がる何かへの枷となったかもしれない。だが戦いの場にヒトミはおらず、好戦的なネミッサがいるだけだった。彼らの暴走に歯止めはなかったのだ。

だが、サナギは己れの中に分裂したもうひとつのサナギを感じていた。それは暴力に陶酔することなく、すべてを冷静に見ていた。それはいつも『あの日人を殺してしまったこと』を考えていた。それはいつも死とは何かを考えていた。あっさりと死んでいく悪魔たちにとっての生を考えていた。そして悪魔に死を与え続ける己れにもやがて訪れる死を。

サナギは変わってしまっていた。あの日人を殺してしまったことを契機に、いや、それ以前にレッドマンと出会い、ビジョンクエストを経験したことで。

変わったのはサナギだけではなかった。

シックスは時々、遠くをぼんやり眺めていることがある。それも悪魔と戦いながらだ。それに独り言を言うようになった。すぐそばに誰かがいるかのように、シックスは話をしている。そしていつの間にかどこかへ行ってしまう。

ユーイチはメンバーにあまり興味がなくなったようだ。シックスにちょっかいを出すこともなくなった。何かと会話に頭を突っ込んでくることもなくなった。

ランチは苛々しているようだった。しきりに壁や電柱や車を蹴りつけるようになった。慎重だった彼が、悪魔と戦う時は狂ったように暴れる。動かなくなった悪魔を執拗に攻撃するのが

ランチだった。

もの静かだったはずのリーダーが、何かとメンバーを怒鳴りつけるようになった。その後で自己嫌悪に襲われるのか、しきりに謝る。が、そのあとすぐに何かで怒りが爆発する。その繰り返しに、彼自身疲れているようだった。

ネミッサはみんなと逆だった。

戦っている時のネミッサは、無慈悲な死の女王だ。それが不意に、哀れむような眼で悪魔たちを見るようになった。戦いに手加減はない。が、死んでいくものたちへの想いが、ネミッサを憂鬱にしているようだった。

変わったのはスプーキーズのメンバーだけではない。天海市そのものが大きく変化しつつあった。表向きは何も変わってはいなかった。だがそれでも街に何かが起こりつつあることに誰もが気づいていた。それは増殖することしか考えない腫瘍のように、少しずつ街を蝕んでいった。

例えば奇病。

それまで健康だった人間が、ある日突然廃人と化してしまう。器質的には何の障害も見つからないが、指一本動かさず、周りに対して何の反応もなくなる。

最近ようやくそのことが報道されるようになってきた。もし今まで何らかの圧力でマスコミが取り上げていなかったとするなら、患者数が無視できぬほどに増加したのだろう。

奇病に関して報道を押さえきれなかったファントムソサエティも、悪魔に関する報道は完全

に隠蔽していた。サナギたちがあれだけ頻繁に戦っているにもかかわらず、である。
公表されることがなくても、いや、公表されないからこそ、それは噂として人々の耳へと入っていった。
一番大きな噂は奇病の原因だった。公害、新種のウイルス、テクノストレス、電磁波、そして呪い。天海市の地下には巨大な遺跡があったという。それは太古の邪神を封じ込めるためにつくられたものだった。それを開発のために破壊してしまった。そのため邪神の呪いが復活したのだ。この最も荒唐無稽と思える説が、しかし最も信じられていた。それはこの街で起こる様々な噂の原因ともされていた。
マンションの一室から忽然と消えてしまった人間の話。どこそこの誰が首を吊っていたとか、ガソリンをかぶって焼死したとか、急増している（らしい）自殺者の話。そして街を徘徊する怪物たちの噂。血塗れの巨人や餓鬼、幽霊に歩く死者。以前であれば子供たちの間でのみ流れたであろうそんな噂を、サラリーマンが飲み屋で、主婦たちが公園で、さも恐ろしそうに声を潜めて噂しているのだった。
何か良からぬことが起こっている。街を支える柱がぐずぐずと腐っていく。いつかこの街は底知れぬ奈落に堕ちていく。それを街の誰もが確信していた。その不吉な終末の気配が街を覆っていた。ちくちくと肌を刺す大気。粘りつく風。苛立ち、不安に駆られる感触が街を支配している。
人々は以前と変わらず仕事をし、買い物に出かけ、繁華街で遊んでいた。だがそのどこにいても、落ち着かぬ気分が抜けなかった。街は少しずつ荒廃しつつあった。人々の心の中から。

8

平日とはいえ夕食時だ。ファミリーレストランは家族連れで混雑していた。その中で円卓を囲んだ五人は異質だった。そこに腰を降ろしているのは、サナギ、ヒトミ、ランチ、シックス、ユーイチ。リーダーをのぞいたスプーキーズのメンバー全員がここにいた。
リーダーから呼び出しがあってトレーラーの前で集合した。するとドアには鍵が掛かっており、リーダーは留守だった。仕方なくみんなは時間をつぶしにファミリーレストランにやってきた。
久し振りのことだった。
最近メンバーが全員顔を合わせるといえば、悪魔退治に出かける時だけだった。そのためにトレーラーに集まることすらない。現地に直接集合、そして終わればその場で解散だ。その間に話し合うこともほとんどなかった。
「何考えてんだ、リーダーは」
シックスはテーブルの脚を蹴った。ガシャンと音をたてて皿が揺れた。トウモロコシのスープがテーブルクロスにこぼれる。しかし誰もそれを気にしていないようだった。
「呼び出しといて留守はないだろうが」

シックスがぼやく。が、誰もそれに答えない。それぞれがそれぞれにそれぞれのことだけを考えている。

ユーイチはカニの爪の衣を、箸で丁寧にとっていた。そして中身だけ齧ると、再び次の衣の解体に取りかかる。

腕を組み、貧乏揺すりをしながらそれを見ていたランチが、苛立ちをそのままに言った。

「汚い食い方するなよ」

カニを咥えたまま、ユーイチは上目使いで正面に座ったランチを見た。

「ランチはオレのお父さんなの？　あんたに食べ方まで指導される謂れはないよ」

「何を！」

ランチが立ち上がった。テーブルを越えて、ユーイチに掴みかかりかねない勢いだ。

「やめてよ」

隣のヒトミがランチを無理やり座らせた。

「二人ともおかしいわよ。いつもそんなことで喧嘩なんかしないじゃない」

「ドラマみたいな科白。安物の青春ドラマ」

ユーイチが言った。今までと違って、その言葉には悪意があった。

シックスがレストランのレジカウンターあたりを凝視している。何を見ているのかとサナギは眼で視線の先を追ったが、そこには端末があるだけだった。

シックスが立ち上がった。

「どこ行くんだ」

サナギの声など聞こえないようだった。ひとりさっさとレジへと向かっていく。

「ほっとけよ」

ランチが言った。

「最近いつもああじゃないか。何言ったって無駄だよ」

シックスはガラスの扉を開いて出ていった。

「ユーイチ、おまえシックスの分払っといてやれよ」

ランチが言うと、ユーイチは素直に頷いた。

「いいよ。その代わり人の食い方指図しないでよね」

ランチはむっとしたが、もう立ち上がりはしなかった。袖をめくって時計を見る。

「そろそろ俺たちも行くか」

言うと同時に立ち上がった。レジで金を支払い、四人は駐車場に向かった。

トレーラーの扉は開いていた。

中に入るとリーダーはいつものようにモニターの前に立っていた。パイプ椅子がその前に並べられている。

「シックスはどうした」

入ってきたメンバーを見渡してリーダーが言うと、ランチが肩をすくめてみせた。

「つたく」

リーダーは舌打ちした。
「今日は何の集まりなの。悪魔退治はしないの」
言ったユーイチを、リーダーは睨んだ。視線に険がある。
「重要な話だ。悪魔退治よりもな」
文句があるのか、という眼でリーダーはサナギたちを見回した。
「奇病の話から始めたい。天海市市立病院のデータバンクにハッキングして探ってみた。今奇病の患者は市の人口の十パーセントを上回っている。これだけでも充分異常な事態だ。そして病気がこれだけ蔓延しているというのに、市は何の対策もとっていない。無策、弱腰などというより、わざと放置してあるようにも見える。しかも報道によれば、この奇病は天海市の中でしか発生していない。保健所のデータを検索すると、面白いデータがあった。発病時の状況を集計したものだ。ほぼ八十五パーセントがコンピュータを操作している時に発病している。それで、みんなに聞きたいんだが、パラダイムXにアクセスする時、赤い光を見たものはいないか」
「見た」
サナギは答えた。
「最初にレッドマンに会った時。夕焼けみたいな真っ赤な光を見た」
ランチもヒトミも、光を見たと答えた。最後にユーイチが「オレも」と興味なさそうにぼそりと言った。

「やはり……。ぼくも見たんだ。あの光は危険だ。あれは、何か洗脳というか、催眠術みたいなもんで、こちらの心の中をいじくってるような気がする」
「俺もそう思うよ」
そう言ったのはランチだった。
「多分、市で配布した端末に仕掛けがあると思う。ちょっとここの機械いじくってもいいかな」
もちろん、とリーダーは場所を空けた。
ランチはポケットからドライバーを取り出し、配布された端末に近づいた。多少の改造は加えているが、ほぼ原型のままのものだ。
ドライバーを使い、蓋を開ける。器用に部品を取り去り、それから慎重に一枚のチップを取り出してきた。金属とプラスチックからなる正方形の薄い部品だ。
「それはCPUだな」
リーダーが言った。CPU――中央処理装置。コンピュータの中核部分で、これの性能がコンピュータの性能を決めると言ってもいい。
「ク・リ・プ・ト」
リーダーがそのCPUに刻印されたロゴを読んだ。
「そう、クリプトチップ。こいつ以外の部品はどこでも、芝浜のジャンク屋でも手に入るものだ。でもこれは違う。アルゴン社製のこれは、どこにも売っていない。俺は配布された端末では赤い光を感じるが、それ以外の機械を使っても光が現れないことに気がついた。それで、ち

よっと街頭の端末をいじくって調べてみたんだ」
コースターほどのチップをさらに解体しながら、ランチは話し続けた。
「奇病はこの街にしか発生しない。このチップは街の中の端末にしか使用されていない。奇病はいつもコンピュータを使用している時に起こる」
ランチがリーダーを見ると、彼は小さく頷いた。
「そしてあの赤い光が奇病の原因だとすると、このチップが奇病の原因と考えてもおかしくない。奇病の発生が事故か故意かはまだわからないが、天海市を情報環境都市に変えた西次官か、直接パラダイムXとネットの作成にかかわっているアルゴンソフト社のどちらか、あるいはどちらもが奇病と関わりを持っているのは間違いないだろう」
「いずれにしろ憶測にしか過ぎないが」
とリーダーはことわりを入れてから話し始めた。
「これにはきっとあの『ファントムソサエティ』も関わってきているはずだ。ファントムソサエティの計画と、情報環境都市計画はおそらくコインの裏表。両方は同時に進行していたに違いない。ただ、悪魔と呼んでいるあれと、奇病がどう関わってきているかはわからないが――」
話し続けるリーダーを無視してユーイチが言った。
「つまんない」
みんなが一斉にユーイチを見た。
「みんなつまらない話ばかりしてるんだね。こんなことのためにオレを呼んだの？　みんなほ

んとにつまんない人間だね」
それだけ言うとユーイチは立ち上がった。みんなに背を向け出て行こうとする。
「何を！」
止める間もなかった。怒鳴りながらランチはユーイチに飛びかかっていった。
肩を掴んで振り返らせると、拳骨で頬を殴る。容赦はなかった。
ユーイチはその場に倒れた。
頭を振って身体を起こす。唇を切っていた。だらだらと流れる血が顎を伝ってシャツにシミをつくっている。
「す、すまん」
そこまでする気はなかったのだろう。ランチは手を伸ばした。ユーイチは笑いさえ浮かべ、その手を持って立ち上がった。
「いいんだ、そんなこと。どうでも」
そのままユーイチは出て行った。今度は誰も止めようとはしなかった。
「なんだよ、あいつ」
ランチは殴った拳を見つめながら言った。
「オレたちはおかしくなってるよ」
サナギが独り言のように言った。
「オレもだけど。でもオレはレッドマンと出会って、ビジョンクエストとか見せられて、みん

なと違う経験をしてるから、嫌でも『死』とか『魂』だとかについて考えさせられてるから。だから少々変わったとしても当然だと思ってた。でも、でもな、最近みんなおかしいぜ」

「赤い光が原因だ、と思う」

クリプトチップをリーダーは見つめた。

「赤い光を見た時、ぼくは声を聞いた。その声はぼくをそそのかしたんだ。おまえは優秀なのだから、みんなを、このスプーキーズを支配すればいいんだってな。ぼくは否定した。それを拒んだ。でもな……苛つくんだ。おまえたちがぼくの思いどおりに動かないとな。今までそんなことは一度もなかった。みんながやりたいようにやる。ぼくはその進行係程度に考えていたつもりだった。それが……。あの赤い光を見てからなんだ。すべて、あの赤い光を……」

「俺もだ」

ランチがクリプトチップを解体する手をとめた。

「あの赤い光を見てから、何もかもぶっつぶしたくなるんだ。そこら中のものをメチャクチャにしたくてしょうがないんだ。それを悪魔相手に解消していたわけなんだけど。でもな、時々押さえきれないほど思いが膨らんでくる。何もかも吹き飛ばしたら気持ちいいだろうなあって。……怖いんだ。恐ろしいんだよ。俺はどうなっちまうんだろうって、な」

「わたしは赤い光を見た時」

ヒトミは少し逡巡してから、話を続けた。

「……その時……死にたくなっちゃった。ああ、大丈夫。今はそんなことないから。でもね、

わたし昔から自殺願望があったの」

「小学校の時から、だろう」

サナギがヒトミを見つめた。

「どうしてわかるの」

ヒトミが見つめ返す。

「おまえ、言ってたもん。殺しちゃったって。どういうことかわからなかったけど、何だかおまえって、酷い罪悪感を持ってないか。その、お母さんを亡くしたことに対して」

ヒトミは嬉しそうに微笑んだ。

「そう、覚えていてくれたの。良かった。そうよ。そのとおり。わたしはあの時からずっと死にたかった。黙ってたけど自殺したこともあるの。もちろん未遂に終わったんだけどね。運が良かったのよ、わたし。今は大丈夫。ネミッサといろいろ話したの。彼女、死の専門家みたいなの。それで、なんだか……、まだよくはわからないけど、罪に対する罰として自殺を考えるのは良くないって思うようになった。…………ここで話して良かったと思う。何だかすっきりしたわ」

ヒトミは再び微笑んだ。

「とにかくだ、すべての原因はこいつってわけだ」

ランチはクリプトチップの中央にあるプラスチックのカバーを開いた。

「あっ」サナギが言った。

「えっ？」ヒトミが言った。
サナギは見た。
虫だ。
薄桃色に光り輝く大きな虫が飛ぶのを。
半透明のそれは、しなやかな四枚の羽根を優雅にはためかせ、窓へと向かった。
「どうした、サナギ、ヒトミちゃん」
リーダーの声もサナギには聞こえなかった。
それはしばらく中空で羽ばたくと、窓をすり抜けて外へと出ていった。
「何を……見てる」
リーダーも窓を見ていた。が、それはサナギの視線を追ってそこを見ていただけだった。
「えっ、今のを見ただろ」
「だから何を」
ランチがもどかしげに言った。
「あの、わたしも何も見えなかったんだけど、ネミッサが虫を見たって」
「虫を」
リーダーとランチが声を揃えた。
「こんくらいの」サナギは子猫ほどの大きさを示した。「虫が飛んでったんだ」
「閉め切った窓の外へか」

リーダーは疑わしそうな顔で言った。
「こいつはなんだろうな」
ランチがドライバーの先でクリプトチップの中心部をつついていた。そこにはゼラチン状の塊があった。
「そこから飛び出したんだ」
「そんなでかい虫がか」
リーダーは信じられないという顔でサナギを見た。
金属が擦れる、嫌な音がした。
みんなが一斉にドアの方をむいた。
ドアから長剣がはえていた。それは何の抵抗もなく、すっと下に降りた。
大きな音とともに、きれいな断面を見せてドアが道路へ倒れた。
「なんだあ！」
最もドアの近くにいたサナギが、慌てて立ち上がった。
開いたドアの向こうに男が立っていた。
黒い手袋をした手に葉巻を挟み、男は言った。
「桜井雅宏はいるか」
「誰だ！」
怒鳴ったのはランチだ。手に持ったドライバーに力がこもっている。

「おまえか」
男はランチを見た。
「ぼくだ」
リーダーが一歩前に出る。
「『秘密の花園』でガンタイプPCを買ったな」
「高かったんだ。いや、ガンタイプPCの話じゃなくて、このトレーラー」
男はニヤリと笑った。
「返してもらおうか、ガンタイプPC」
「ふざけるな！」再びランチが怒鳴った。「人の車を壊しといて、何が返してもらおうかだ」
前に出ようとするランチを、サナギが引き止めた。
「やめろ。こいつはデビルサマナーだ」
その手にガンタイプPCが握られている。既にトリガーは引かれ、モニターとコントロールパネルが翼のように左右に広がっていた。
「おまえ、それが使えるのか」
「ああ、使えるとも、フィネガン」
男が顔をしかめた。
「何故それを」
フィネガンの疑問には答えず、サナギはキーを押した。造魔召喚の文字がモニターに浮かぶ。

大気が揺らいだ。陽炎(かげろう)のようにぼんやりと人の姿が浮かび上がってくる。
「行け、ニュクス」
青銅色の少女が、首の鎖をじゃらりと鳴らしてドアから飛び出した。
フィネガンは一挙動で大きく一歩退いた。その前に巨人が立った。血塗れの腕が長剣を振りかざす。
「リーダー！　トレーラーを出すんだ」
きょとんとサナギを見ているリーダーに、彼はもう一度怒鳴った。
「車を出すんだ！」
夢で何度も見たその姿をサナギは忘れていない。
フィネガン。組織のデビルサマナー。その前に立つ巨人も知っている。あの悪魔はウラペを一瞬にしてミンチに変えた。
リーダーは席に座り、キーを回した。
一発でエンジンがかかった。
「行け！　逃げるんだ」
ゴムの焦げる臭いとともに、トレーラーは加速した。
サナギは裂けたドアの縁に手を掛け、外をのぞいていた。
フィネガンが言った。
「ラームジェルグ」

巨人が去り行くトレーラーの方を見た。そして吠えた。

同時にニュクスは巨人の前に立ちはだかっていた。身長は巨人の半分ほどしかない。が、臆することもなくその両手で複雑な印を結んだ。

薄紫の光がニュクスの前に壁を作った。

その壁に、巨人の放った衝撃が激突した。

轟音とともに閃光が走った。

ニュクスの身体が、両手を前に出した姿勢のまま後ろに撥ね飛ばされる。

光の壁に阻まれた衝撃波が周囲に散った。

左右三台の車が玩具のように壁まで吹き飛ばされた。

ぼっ、とエンジン部から炎が吹き出す。

衝撃波を支えきれず、後ろへ二転三転したニュクスが素早く起き上がった。

再び両腕を前に突き出す。

紫の障壁ができるのと巨人が衝撃波を放つのは同時だった。

ニュクスの力が弱まっていたのか、巨人がさらに強い衝撃波を放ったのか、光の壁は一瞬にして消え去り、衝撃波はまともにニュクスを襲った。

「戻れ、ニュクス！」

走り去るトレーラーからサナギは叫んだ。

ニュクスの身体は瞬く間に銀に輝く粒子となって四散した。それを呑み、衝撃波は床のコンクリートを粉砕しながらトレーラへと近づいていた。太いコンクリートの柱が砂の城のように粉塵となって吹き飛ぶ。もうもうと舞い上がる塵埃が波となってトレーラーを追った。

「早く！」

窓から顔を出し後ろを見ながらランチが叫んだ。

「わかってる！」

答えるリーダーも叫んでいる。

出口までほぼ直線。

汗のじっとり滲んだ手がハンドルの上を滑る。

吹き飛ばされた車が轟音とともに炎を吹き上げた。砂塵に黒煙が混ざる。

数台が横転しながらトレーラーを追った。

引き千切れた電線が火花を散らした。

粉砕された天井から電柱ほどもある配管が落ちてくる。

それらをみな呑み込み、灰色の砂塵は津波のようにトレーラーに迫った。

トレーラーがようやく地上へと抜ける坂道に差しかかっていた時だった。

すべてを呑み込む砂の壁は真後ろにあった。

リーダーは懸命にアクセルを踏みつけた。

が、トレーラーの能力の限界だった。

砂塵はトレーラーを捕らえた。

慌ててランチが窓を閉める。が、裂かれたドアから容赦なく粉塵が吹き込んだ。
ヒトミが悲鳴を上げた。
中も外も視界は0だ。
リーダーはぼんやりと見える出口の明かりめがけて走り続けた。
天井が裂け、砕け、ダブルベッドほどもあるコンクリート片が落ちてきた。
トレーラーの目前だった。
リーダーが叫んだ。叫びながらハンドルを切る。
ドアの側にいたサナギは外へと振り落とされそうになった。
それでもなんとか駐車場の出口にはたどり着けそうだった。
生き物のように膨張する砂塵とともに、車は駐車場を出た。
車が行き過ぎるのを確認している暇はない。
角材を積んだトラックが、駐車場の前を横切ろうとしていた。絶叫のようなブレーキ音が聞こえた。
トレーラーはトラックの鼻先をかすめ、直角に曲がろうとする。
リーダーは必死になってハンドルを切っていた。タイヤが悲鳴を上げる。
片輪が浮いた。床が斜めになる。
スチールの棚にボルトでつけられた様々な機器がぎしぎしと不気味な音をたてた。
トレーラーのテールランプに触れるか触れないかというところで、トラックは停止した。

それをまともに衝撃波が襲った。角材がばらばらに砕け、ドアが飛び、トラックは分解しながら横転した。
背後に爆発音を聞きながら、リーダーは血走った眼で前を見つめていた。
冷や汗がこめかみから顎に垂れる。
「もう、大丈夫みたいだな」
サナギが開きっぱなしのドアから後ろを見て言った。
「奇跡だぜ。リーダーのドライブテクニックで逃げきれるなんて」
ランチの皮肉も、リーダーには聞こえていないようだった。
額の汗を、これまた冷や汗でべたつく手で拭う。
そして呟いた。
「また、引っ越しだ」

9

街はアルコールと小便と吐瀉物と焦げるしょうゆのにおいで溢れていた。
若い男が大声で怒鳴っていた。ばか笑いと嬌声、幾重にも重なって聞こえるポップスと演歌。
芝浜の繁華街は人で賑わっていた。その賑わいには追い詰められたような懸命さがあった。

街のそこかしこで喧嘩がある。囃したてる者こそあれ、とめる者は誰もいない。警察を呼ぶものもいない。路地裏には大抵誰かが倒れている。男、女、年寄り、子供。それにも声を掛ける者はいない。
　以前、といっても数カ月前まで、芝浜の繁華街はこれほどまでに荒れてはいなかった。夜遅くなっても家族連れで遊びにこられる雰囲気があった。今は、深夜となれば男でも訪れるのを躊躇するだろう。
　今はまだ午後十時。
　ヒステリックにも思える喧噪はまだまだ収まりそうにもない。
　少年は酔漢の間を縫って先を急いでいた。
　美しい顔立ちだ。
　虚ろな眼が少年を人形のように見せていた。
　シックスだった。
　シックスは少女を追っている。ファミリーレストランで見つけた赤い服の少女だった。
　少女は追うと逃げ、諦めると誘いに来る。
　パラダイムXで初めて出会ってから、シックスはずっと少女と追い駆けっこを続けていた。
　レストランばかりの入った雑居ビルのある角を曲がり、できたばかりのクラブの前にたむろする若い男女の間を抜けて、少女はどんどん歩いていく。
　そう急いでいるようにも見えないのだが、シックスは彼女に追いつくことができない。

　いつの間にか人込みの中に紛れて見えなくなってしまった。
　ビルとビルの隙間から、そこを横切る赤い影が見えた。
　シックスは慌ててその隙間に入り込む。
　両方のビルが窓から捨てた様々なゴミが厚く積もっていた。ぬるりと脚が滑った。腐臭放つ青黒い泥に踝まで埋もれる。
　粘液を滴らせべたつく壁に腹と背中と尻と肘をこすりながら、シックスはようやく隙間を抜けた。そこは狭い通路で、しかも行き止まりだった。いくつかある裏口のどこかへ逃れたのだろうか。
　行き止まりの壁に向かって立ち小便している男がいた。グレーの背広を着た、どこにでもいるサラリーマンだった。
　男はチャックを上げて、身体を揺すりながら後ろを向いた。男とシックスの眼が合った。
　男はシックスを見て驚いているようだった。シックスは無視して、どこかの裏口を開けようと男に背を向けた。
「逃げる気かよ」
　後ろから声がした。
　立ち小便をしていた男だった。
「逃げる気かって言ってんだろうが、糞餓鬼が」
　いつの間にか男はシックスの真後ろにいた。酒臭い息がシックスの顔にへばり付いた。

「なんだよ、オヤジ」
「オヤジぃ？」
男の唇が醜く歪んだ。
ぐいとシックスの衿を摑み、後ろを振り向かせた。
「やめろよ、急いでるんだ」
振り払おうとしたが、男の手は衿から離れなかった。
「俺も急いでるんだよ」
言いながら衿を持って引きずる。
すぐそばの裏口を開いた。厨房越しに客席が見える。
「おおい、ちょっとこっち来てくれ」
すぐにわらわらと背広姿の男たちが現れてきた。みなそうとうに酔っているようだった。顔が煉瓦(れんが)のような色になっている。充血した眼が座っていた。
「こいつだよ、こいつ」
男はシックスの衿を持ったまま言った。彼は間抜けな猫のように爪先立ちになっていた。
男はシックスを突き放した。
思わず後ろに尻餅をついた。
「今話しただろ。俺の家族を脅しやがったガキだよ」
シックスには何を言っているのかさっぱりわからなかった。その気配を感じたのか、男は言

った。
「おまえ、俺のこと覚えてないのか。あんなことをしといて覚えてないのか。呆れた糞野郎だな」
男たちはシックスを取り囲んでいた。
「おまえたちみたいな害虫は一掃しちゃわなきゃな。それでなきゃ社会はカワンねえだろう。社会におまえみたいな糞餓鬼はいらねえんだよ」
革命だよ、革命。
誰かが言った。すると周囲からどっと笑い声が起こった。
「わかってんのかよ」
後ろから小突かれた。
「やめろよ」
シックスが言うと、誰かがそれを真似て「やめろよ」と言った。
「なんだよ、その顔は。何の役にも立たねえくせに、偉そうな面しやがって」
「制裁！」
笑いを含んだ声で言った誰かが、斜め上からシックスのこめかみを殴った。
頭の中でキーンと音がした。
「あっ、俺も」
カラテのデモンストレーションのように、男は腰を降ろし、顔めがけて正拳で突いてきた。

それを見上げていたシックスの顔面に、拳はまともにあたった。
男たちの笑い声が聞こえた。
顔をまさぐると、鼻が異様な方向に曲がっていた。骨が折れているのだ。面白いほどの血が鼻孔から流れ出してきた。
男たちは血で汚れるのを嫌ったのか、それからは蹴ってきた。
男たちは罵り（ののし）ながら競いあうようにシックスを蹴り上げた。
黒い革靴の先がシックスの腹に、胸に、背中に、尻に、腿に突き立つ。
シックスは胎児のように身体を丸め、頭を抱えてうずくまっていた。
蹴り方に容赦はなく、しかも執拗（しつよう）だった。シックスは殺意を感じた。単なる街の喧嘩ではなかった。
唐突にシックスは最初に言いがかりをつけてきた男のことを思い出した。
ファミリーレストランで端末を使っていた男だ。ランチが子供を叱った。それだけだ。それだけのことを今まで恨みに思っていたのだ。
腹に深く靴がのめり込んだ。
シックスは激しく嘔吐（おうと）した。
このままここで死ぬのかよ。
そう思うと笑いたいような気分になってきた。
ふと思い出し、シックスはボールのように蹴られながらポケットに手をやった。

あった!
シックスはそれを摑んだ。
顔を少し上げる。
男たちの足先が見えた。
シックスはチャンスを待った。
すぐにその機会が来た。
眼の前に脚がある。シックスはネズミを捕らえる猫のように素早く腕を伸ばし、その足首を摑んだ。ポケットから出したのはスタンガンだ。最近ではいつもポケットに入れていた。
摑んだ脚、薄い木綿の靴下が剝き出しになったその足首にスタンガンを当てた。
八万ボルトの電流が男に流れた。
ぎゃん、と犬のような悲鳴を上げて男が脚を抱えた。
その隙にシックスは立ち上がった。立ち上がると同時に駆けた。
「待て!」
怒声が背後から聞こえた。もちろんシックスに待つ気はない。ビルとビルの間に滑り込んだ。
泥濘（でいねい）を蹴り上げ、そこをくぐり抜ける。そしてひたすら走り続けた。
大通りに抜けた。
人混みをかき分け、シックスは必死になって走った。何人もの人にぶつかり、突き飛ばし、その悪態を背に走り続ける。シックスは痛みを感じていなかった。走って、走

って、走り続け、シックスはＪＲの駅に駆け込んだ。駅の切符売り場に向かおうかどうしようか瞬時迷い、結局駅のトイレに入り込んだ。個室に入り、鍵を掛ける。壁に背をもたれ、そのままずるずる床に腰を降ろした。

これ以上汚しようがないようなトイレだった。床はこびりついた糞便でタイル地が見えないほどだった。壁にも茶色のシミがあちこちにへばりついていた。しかも落書きでいっぱいだ。

つい数カ月前まで、こんな汚い公衆トイレはどこにもなかった。どこも掃除が行き届き、ぴかぴかに磨きあげられていた。いや、トイレだけではない。最近では駅も、芝浜の街も、天海市そのものが、薄汚く汚れている。長い間留守にした家にうっすらと埃が積もっていくように。

天海市はいろいろな意味で美しい街だった。それはどこか二十四時間営業のコンビニに似ていた。いつも不自然なほど明るく、清潔で、きちんと整理されている。

それがここ数カ月でずいぶんと印象が変わってきた。

痛みが突然シックスに襲いかかってきた。

思わず悲鳴をあげた。頭から足の先まで、痛まぬ箇所はないことを知った。苦痛を詰めた袋になったような気がした。

折れるほど歯を噛みしめる。その隙間から呻きが漏れる。

苦痛に自然と身をくねらせた。握り締めた両手の指の関節が白い。

シックスはじっと痛みを堪えた。

うっすらと涙の滲む眼で、無意味に壁の落書きを見ていた。

稚拙で猥褻な絵の数々。

汚らしい文章に添えた電話番号。

身体の中にため込んだ薄汚い何かが、排泄物と一緒に吹き出したような落書きばかりだった。

シックスはそのひとつに眼を留めた。

——全部教えてあげるから電話ちょうだい。

その後には電話番号が書き添えてあった。

何故そんな気になったのか、シックスにもわからなかった。

ポケットから携帯電話を取り出した。

そこに書かれた番号を押していく。

すぐに相手は出た。

何を言えばいいのかわからず、シックスは電話を耳に当てたまま黙っていた。

相手の声が聞こえた。

ようやく連絡くれたのね、真悟。少し舌足らずの少女の声だった。

誰？

わたし。

わからないよ。

わたしだってば。

後ろから肩を叩かれた。

振り返ればそこに少女が立っていた。
あの赤いワンピースの少女だ。
わたしのことを忘れてたのね。あんなに忘れないでねって言ったのに。真悟も忘れないって誓ったじゃないの。
少女は唇を尖らせた。
異臭がした。
濃厚な血の臭い。
シックスはそれを己れの血の臭いだと思った。
それよりも不思議なのは、シックスはトイレの壁に背をもたれていたはずなのだ。
ところが振り向けばそこは広い芝生が広がっていた。しかも太陽が照りつけている。
青臭い夏のにおいがした。
ねえ、本当に忘れちゃったの？
何だか……。
シックスは言った。
何だか覚えているような気がする。
あの日のことを思い出してよ。
あの日？
そうよ。わたしが階段から落ちたあの日のこと。

ああ、とシックスの口から切ない声が漏れた。
そうだ。
あの日のことを。
まだ天海市に引っ越すずいぶん前、シックスが迫(さこ)真悟という名前だけで生きていた頃の話だ。
幼い頃、シックスはよく姉と遊んでいた。忙しい母親に代わって、姉はシックスのめんどうをよくみていたし、シックスはそんな姉になついていた。時には疎ましく思われ、邪険にされることもあったが、そんな時でさえシックスは姉の後ろをついてまわっていた。そう、シックスに対するユーイチがそうであったように。
その日もシックスは姉と遊んでいた。夏休みだった。姉は大きなガラスの花瓶を持っていた。二階へ持って上がれと母親に言われていたのだ。シックスも初めは手伝っていたが、すぐに飽き、止める姉の手を逃れてひとりで階段を駆け昇った。
踊り場でシックスは待っていた。
すぐに姉は追いついてきた。
ちょっとした冗談のつもりだった。
シックスは踊り場に立った姉の胸をトンと突いた。
ほんの軽く突いたつもりだった。
が、姉は踊り場に片足を着いたところで、不安定な姿勢だった。両手には重いガラスの花瓶を持っている。

ふわりと姉の身体が浮いたのを、シックスは見た。
トン、と一度階段に足が着いた。そして頭と足が入れ替わった。
頭から姉は階段を落ちていった。花瓶から手が離れた。人形のように四肢をでたらめに振り回し、姉は階段を転げ落ちていく。
シックスは何もできなかった。ただじっと落ちていく姉を見ていた。
砕けた花瓶が水飛沫（しぶき）のように四散した。壊れた人形のように一階で倒れている姉にそれは降りそそいだ。姉の脚が関節のないところから曲がっているのが見えた。首が不自然なほど後ろを向いているのを見た。
夏だった。
姉は白いレースのワンピースを着ていた。
笑うように開いた姉の口から、鼻から、それからどこか知らぬ身体の一部から、だらだらと流れた血が床に広がっていった。
シックスは階段を降りた。姉の横に立つ。が、抱き上げることも、誰かを呼ぶことも思いつかなかった。何も考えることができなかった。血を吸い、赤くまだらに染まるワンピースをただじっと眺めていた。
二人を発見したのは、仕事を終えて帰ってきた彼らの母親だった。
シックスは姉を見下ろし立ち竦（すく）んだままだった。
ああ、そうだ。そうだったんだ。

シックスは改めて眼の前の少女を見た。
その赤いワンピースが血で染まった白いワンピースであることに気がついた。血臭は彼女から臭っていたのだ。
シックスは泣いていた。
子供のように大声あげて泣いていた。
ごめんよう、ごめんよう。でもわざとじゃあないんだ。ちょっとふざけただけなんだよ。許して、許して。
いいのよ、真悟。姉さんもうちっとも怒っていないから。
……そうか、シカバネはなんでも許してくれるって言ってたなあ、とても素直だって。誰に聞いたんだっけ。そんなことどうでもいいや。
本当に許してくれるの、お姉ちゃん。
本当にもういいのよ、真悟。許す許す、何もかも許す。だから一緒に遊ぼう。
うん、遊ぼう。
シックスは幼いままの姉の手を握った。それは柔らかく、そして冷たかった。
その手に引かれるままに、真悟は芝生の中に飛び出していった。眩しい陽射しに、真悟は目を細めた。自分が駅の公衆便所にいたことなど、すっかり忘れていた。
お願い、今度はわたしのことを忘れないでね。
忘れるもんか。

シックスは自信を持ってそう答えた。身体の痛みはいつの間にか失せていた。
姉がシックスの腕を振り切って走り出した。
待ってよ！
今度こそ決して離れまい。
シックスはそう決心して、姉の後を追った。

マニトゥ　―死を想え―

1

小枝を打ち落とされた並木が、異世界の奇怪な生物のようだった。
衛兵のように立ち並ぶ異界の怪物は、二人を見下ろしていた。
夕暮れだった。
サナギとヒトミは黙ったままひたすら歩き続けていた。
シックスを見舞いに行った帰りだった。
最近は陽が暮れると人通りは極端に少なくなる。暴力事件が多いからだ。しかも行きずりの、いわゆる通り魔が多い。その犯人も様々だ。二十年夫と連れ添った主婦。成績優秀な中学生。停年間際のサラリーマン。海外旅行が趣味のＯＬ。ガソリンスタンドでバイトしていた少女。
彼ら彼女らは何の脈絡もなく人を襲った。何かが吹き出してきたように暴力的な発作に襲われ。

まさか、あの人が。
テレビでは連日のようにインタビューを受けた人間がそう言っていた。
だが、彼らも気がついているのだ。
襲われるにしろ、襲うにしろ、今度は俺の番かもしれない、と。
シックスも芝浜で暴漢に襲われた。
ベッドの上に寝かされたシックスは何かのオブジェのようだった。包帯とギプスと革のバンドと矯正金具で飾られたシックス。その身体からはチューブとコードが伸び、計器やボンベやビニールの袋につながっていた。
全身に二十三カ所の骨折があり、脾臓が破裂していたが、頭部にはなんら損傷はなかった。にもかかわらず、シックスは何も聞こうとせず何も見ようとせず何も話そうとはしない。
目覚めているはずの眼は、ありもしない彼方の世界を見つめていた。
奇病に罹っていたのだ。
二人は見舞いに行き、ただ黙ってシックスと対峙していただけだ。横に座った母親は、シックスよりも顔色が悪かった。
ほんの五分ほどで二人は病室を出た。
いたたまれなかった。
「何とかしなくちゃ」
足元を見ながらヒトミは言った。

「ああ、何とかしなくちゃ」
サナギが溜め息と一緒に吐き出した。
「あっ」
ネミッサが端末を見つけて駆け寄った。サナギがその後を追う。
「リーダーもランチも心配していたから、ちょっとメール入れとくね」
クレジットカードを差し込むとモニターが点灯した。
キーを操作すると、アルゴン・オペレーションシステムのロゴが現れる。
そして……そのロゴを押しのけるようにコヨーテの姿が浮き上がってきた。
ヒトミの後ろからモニターを覗き込む姿勢のまま、サナギは動けなくなった。
レッドマン。
頭の中でその名を呼んだ。
——時は残されていない。
レッドマンが口を開いた。
——この街から幾千もの魂が奴のもとへ運ばれていった。もう一刻の猶予もならんのだ、蝉野。もはやそれをとめられるのは、おまえたちしかいない。どうか力を貸して欲しい。
——オレはいったい何を……。
——すべてはおまえ自身が魂と語らう中で明かされるだろう。蝉野よ、心して行くがよい。これが最後のビジョンクエストとなる。

凄まじい刺激臭がして、サナギは咳き込んだ。

あたりが霧に覆われた。

いや、とサナギは思う。これは霧ではない。工場の煤煙だ。

一陣の風が煙を吹き飛ばした。

コンクリートの森のように、いくつもの工場が立ち並んでいるのが見えた。

神に挑んで建てられた塔のような高い煙突が空を貫き、青黒い煤煙を吐き出し続けていた。

空は厚い雲で覆われている。

二十年あまり前には、このあたりが広大な森であったことをサナギは知っていた。

そう、サナギは知っていた。

この街の歴史を。

ここで何が起こったかを。

刺激臭は街に満ち、年中夕暮れのこの街を訪れる者を閉口させた。だが街の住人はその臭いにもすっかり慣れてしまっていた。何しろ工場ができたからこそ、この街は生まれたのだ。この街に住む男はすべて、女も大半がこの工場のどこかで働いていた。『工場の中の悪臭に比べれば街は天国のようなものだね』。よそ者にこの街の臭いのことを聞かれると、男たちはきまってそう答えるのだった。この臭いに慣れていることを誇りにさえ思っていた。

工場群のあるところはかつては森だった。巨大な樹木を根こそぎ切り倒し工場は造られた。森の近くにあった湖は、鳥が群れ、無数の魚たちが泳ぐ姿を見ることができる澄んだ水をたた

えていたが、工場の流す廃液で青緑色に淀んでいた。

湖のそばに粗末な小屋があった。

そうだ、オレはここで暮らしていた。

サナギは唐突にそれを思い出した。

その時のオレの名は、オレの名は……ハリスだ。怪力だけが自慢の、しかしそれも歳と共に衰えた初老の男ハリス。

若い頃ハリスは猟師をしていた。森で獣を狩り、遥か遠くの街にまで売りに行く。この街でたった一人、工場ができる前にこの土地に住んでいた人間だ。

森は工場に変わってしまい、ハリスは猟ができなくなってしまった。それからは街の他の人々と同じく工場で働いている。

ハリスはそのことを苦とは思っていなかった。すべては神の決めたことだ。いつもそうであるようにハリスはその時もそう思った。

工場ができて十年ほど経ってから、湖で人魚が繁殖し始めた。何十何百という人魚が白い肌と銀の鱗を水面に輝かせ、華やかな嬌声をあげる。ここがもとあったような森であれば、人魚のいる湖は観光名所にでもなっただろう。が、悪臭と喉に詰まる煤煙に包まれた今、それを知って人魚を見に来る物好きはいなかった。

繁殖した人魚にハリスはさして興味を持っていなかった。時々それを捕らえ食べるくらいのものだ。その白い肉は鶏に似て淡泊な味がした。

岸辺で倒れている人魚を見つけたのは、工場からの帰りだった。すでにとっぷりと陽が暮れていた。人魚は脇腹に怪我をしていた。皮膚が裂け内臓が顔を出していた。

何故その時、その人魚を救ってやる気になったのかハリス自身にも判らなかった。とにかくハリスは人魚を連れて帰り、身体の泥を拭って、腹の傷を木綿糸で縫ってやった。

ハリスは人魚の顔についた泥を拭ってやった時、初めて人魚が美しい生き物であることを知った。

杏形の大きな眼。黒く愛らしい瞳。鼻はいくらか高慢そうに高く、厚い唇は血のように赤かった。

ハリスは人魚と交わった。そしてことが終わってから、人魚を湖に放った。

ところが翌晩、ハリスが家に帰ると人魚が待っていた。間違いなく昨日の人魚だった。脇腹に大きな傷痕があった。ハリスは再び人魚と交わった。毎晩、毎晩、人魚はハリスの家を訪れて、ことが終わると這って湖に帰っていった。十二日間それが続いた。そして十三日目に人魚はばったりと来なくなった。

何日かは仕事の帰りに、湖に沿って続く道を歩きながらあの人魚の姿を捜したりもしたが、すぐにそれもしなくなった。

ハリスは人魚のことを忘れかけていた。

一カ月が経った。ハリスが家に帰るとあの人魚が待っていた。傷はすっかり治っていたが、その腹は満月のように膨れていた。

人魚は苦し気に顔をしかめた。

ハリスは人魚が助けを求めているのが判った。だがハリスにはどうすれば良いのかが判らなかった。産婆を呼ぼうかとも思ったが、産婆が人魚の出産を手伝えるかどうかは疑問だった。

ハリスは決意し、桶に水を汲み、湯を沸かして待った。

何度目かの陣痛に人魚は苦しみ、尾鰭をばたばたさせて暴れていた。ハリスは人魚の肩を押さえた。押さえて、大丈夫だ、大丈夫だと、何度も声を掛けて励ました。やがて下腹の亀裂から肌色の玉のようなものが顔を出した。

ハリスは卵が産まれるのだと思っていた。

が、そこから出てきたものは小さな腕と脚を持っていた。

ハリスはそれを取り上げ、桶で身体を洗った。身体には毛が一本もなく、濡れてつるつるした半透明の皮膚の下で、赤黒い心臓が脈打つのが見えた。そのおたまじゃくしに似た顔の白く濁った硝子玉のような眼は視線が定まらず、常に落ち着きなく動いていた。唇も歯もない小さな口を開け、それは発情した猫のように泣き出した。

人魚は後産を済ませ、血と肉と汚物を残して湖に帰っていった。

ハリスがその異形の赤ん坊を育てようと思ったのは、赤ん坊には右耳がなく、そこには腐った茸のような小さな肉の塊があるだけだったからだ。ハリスの右耳も生まれつきそれとまったく同じ形をしていた。

男か女かの区別もつかなかったが、ハリスはそれにジェイと名付けた。

ジェイは身体が乾くと激しく泣くので、いつも濡れた布にくるんでいた。それ以外、ジェイはまったく手間のかからない子供だった。朝、働きに出る前にミルクをやり、帰ってからまたミルクをやる。ハリスがジェイにしてやれることはそれぐらいだったが、それで充分なようだった。ジェイは健康だった。一度も医者にかかることがなく、風邪さえひいたことがなかった。だがジェイは大きくならなかった。いつまで経っても成長することなく、赤ん坊の姿のままだった。

その頃バートン・セブリングは湖の人魚に眼をつけていた。あれを食用肉として売りに出せば儲かるのではないか。それがバートンの考えだった。彼はさっそく人魚を捕らえ、試食してみた。あっさりとしたその肉はあらゆる料理に応用できそうだった。これを缶詰めにして販売すれば間違いなく売れる。バートンはそう確信した。

外交的だ。陽気で人あたりがいい。それがバートンに対する周りの者の評価だった。確かに彼はそのとおりの人間だったが、それだけの人間ではなかった。バートンは野心家だった。そして、それを人に悟られるような馬鹿でもなかった。今、彼はひとつの工場を任されていたが、決してその地位に満足してはいなかった。彼はいずれはその会社の持ち主になるつもりだった。その工場だけではない。この国にある工場全部、いや、彼の頭の中には、世界をその手中に収める、という子供っぽい野望が宿っていた。

バートンは人魚の捕獲の許可を取ろうと画策した。人魚を捕獲するためには湖の所有者の許可が必要だった。湖の所有者はハリスという男だった。さっそくバートンはハリスと話をつけ

に行った。

浅黒い肌と年のわりにはよく発達した筋肉を持った白髪まじりのその男を見て、バートンはほくそ笑んだ。ハリスはどう見ても商売のシの字も知らない田舎の猟師だ。話ひとつで幾らでも有利な条件で商談をまとめられるとバートンが考えたとしても無理はない。彼は卑怯者ではないが、正直に商売を行うつもりもなかった。

返事はしばらく待ってくれ。

ハリスのその返事を聞いてもう話はまとまったと思ったバートンは、明日また来ることを約束して帰っていった。

バートンを返し、ハリスはジェイにミルクをやりながらぼんやりと考えていた。

バートンは、湖を手離すだけでハリスが一生かかっても稼ぐことのできないだけの金を手に入れられる、と言った。思ってもみなかった話だった。彼に言われるまで湖が自分の持ち物であることさえ知らなかったのだ。バートンはハリスの手に入る金額を正確に計算して見せたのだが、それはハリスにとって庭の砂の数に等しいほどの莫大なものだった。すぐに返事をしなかったのは、あまりにもそれが現実離れした話だったからだ。

「手を組むがいい」

ハリスはすぐそばで聞こえたその男の声にびくりとした。

「手を組むがいい、ハリス」

間違いなかった。喋っているのはジェイだった。歯のない口を開き、苔だらけの黒い舌を

ぺちゃぺちゃと動かしながらジェイは喋っていた。

「聞け、ハリス。ただし湖を売り払ってはならない。あの男と共同で会社を経営したいと言うのだ。判ったな、ハリス」

ジェイはそう言うとハリスの眼をじっと見つめた。聡明な光の灯る黒い宝玉のような眼だった。何かひどく恐ろしいものを見たような気がしてハリスは眼を逸らした。するとジェイは不意に激しく泣き始めた。泣くと同時に表情がぐにゃりと歪んだ。

その眼はミルクを混ぜたかのように白濁し始め、もとの落ち着きのない霧のかかったような眼に戻っていった。

ハリスは慌てて哺乳瓶をその唇に差し込んだ。

何が起こったのか理解するのに時間がかかった。理解し終えた時にはジェイの意見に従おうと決めていた。

翌日、同じ時刻にバートンはやってきた。ハリスは自分から話を切り出した。

共同経営以外の話には応じない。

バートンはハリスの話に意外な顔を隠しきれなかった。

この男、考える頭があるじゃないか。

バートンは頭の中で舌打ちした。

最初でつまずいたせいか終始ハリスのペースで話は進み、安い値で買い叩くつもりが、結局は二人の共同経営ということで商談はまとまってしまった。

湖がただで手に入ったと思えばいいのさ。

バートンはひとりそう得心し、ハリスと別れた。

前々から眼をつけていた工場を買い取り、中古の機械を手に入れ、新会社が発足したのは、それから一年後だった。

発足するにあたり、ハリスはすべての指示をジェイに仰いだ。商品名、缶詰めのラベル、容量、価格。経営に関するどんな細かなこともハリスはジェイに尋ね、そして彼はそれに的確な回答を下した。ハリスはその意見を忠実にバートンに伝え、実行させた。バートンが反対することもあったが、そんな時ハリスは、それなら湖は返してもらおう、と脅した。

ジェイの忠告のおかげで、人魚の缶詰めはこの国で爆発的に売れた。それはほんの数カ月の売り上げで工場や機械を購入する時の借りを全額支払ってしまうほどのものだった。

経営に関してまったくの素人であるハリスを適当にあしらい、単に名目上の経営者に留め、いずれは追い出してやろう。そう目論んでいたバートンは再びあてがはずれることとなった。

二人の会社は工場をひとつ、またひとつと増やしていき、新たにホテルやレストランに加工材料を輸出するようになった。

会社は瞬く間にこの国で一、二を争う巨大企業となり、バートンとハリスは世界でも通用する実業家となった。

一日に数万という人魚が捕獲されたが、あの湖から人魚がいなくなることはなかった。湖には相変わらず水面を埋めるほどの人魚が群れていた。バートンもハリスも初めは人魚が絶滅す

ることを心配していたのだが、あまりに無尽蔵に取れる人魚を見ているうちに、それが当たり前のように思えてきた。

ハリスは生まれ育った湖のそばの小屋を離れ、住宅街に大きな家を建てた。初めは新しい土地と暮らしに不安もあったが、それもすぐに慣れた。時には湖の視察にかつての街を訪れることもあったが、その時にはあの悪臭に顔をしかめるようになっていた。

次から次へと夢がかなったバートンは、初めのうちこそ有頂天になっていたのだが、それも落ち着き、上流の暮らしに慣れてくるにつれ、胸の底に重く沈む鉛のようなわだかまりができてきた。

会社は成功した。

それは彼の思惑どおりだった。しかし、その会社を実質的に動かしているのはハリスだった。バートンはほとんど何も経営に関与していなかった。幾つかの案を出し、試みてみたこともあったが、いずれも会社に多額の損害を与えるだけに終わった。そのために更に彼は経営から離れることになった。

これでハリスがバートンを追い出そうとしたり、邪魔者扱いしたなら、彼もそれなりに行動にでることもできただろう。しかしハリスはそんなことを考える人間ではなかった。そしてそれは彼が一番よく知っていた。

バートンは、やがて酒に溺れるようになった。

かつての彼なら城としか表現しようがないであろう邸宅の二階。そのバルコニーに置かれた

趣味のいい白木の椅子に腰を降ろし、ハリスは空を見上げていた。一流の仕立て屋が最高の生地を使って仕立て上げた背広がさまになっていた。右手の人差し指には神の姿をかたどった大きな金の指輪をしていた。

満月だった。

ハリスは月を見ていたのだが、いつしか蒼白い月に見られていた。

ハリスは眼を逸らせた。

テーブルの上にジェイがいた。その、のっぺりとした大きな頭がハリスの眼の前にあった。

ジェイはハリスを見上げて言った。

「判ったか」

「何がだ」

ハリスの声は震えていた。

「人魚の正体だ」

「……判らない」

「人魚は死者だ。この世に思いを残して死んだ者たちは皆人魚になる。だからあの湖の人魚は減ることはない。永遠にな。おまえもその事には気づいていたはずだ」

「判らん。俺には何も判らん」

「まあいい。今、判る」

ドアが壊れそうな勢いで開いた。

バートンが立っていた。その手には大きな牛の首でも切り落とせそうなナイフが握られていた。

「どこだ！」

バートンは叫んだ。

「また酒を飲んでいるな」

ハリスはバルコニーから声を掛けた。

何故こんなに冷静でいられるのかハリスには判らなかった。彼はテーブルの上からジェイが消えていることにも気づいていた。

「飲んで悪いか」

バルコニーまでやってきたバートンは掠れた声で言った。

「皆が俺の無能を笑う。いいか。笑うんだぞ。おまえはただのお飾りだ。パーティに出てへらへらと顧客に愛想するしかできない馬鹿者だとな」

「そんなことはない。君が外交をしてくれなければ、俺には何もできなかった」

「黙れ！　おまえはただの田舎の猟師だ。知恵もなければ知識もない。それがどうしてこんなにうまく会社を経営できるんだ。おかしいじゃないか。どこかに秘密がある。そうだろ。どこだ。おまえに知恵を授けたものはどこにある」

「そんなものはない。あったかもしれないが多分今はなくなってしまった」

「うるさい！」

バートンはナイフを振りかざし飛びかかってきた。ハリスはよけようとはしなかった。ナイフは彼の首に突き立った。バートンは彼の胸倉を掴み、その首に何度も何度もナイフを突き立てた。血はシャワーのようにとびちりあたりを濡らし、肉片が壁や床にこびりついた。

やがてハリスの首はごろりと床に転がり落ちた。

ああ、オレの首、オレの首。

サナギは転げ落ちた首を見ながら思った。

オレは死んじまった。

オレはオレはオレは……。

なのに物語はまだ続いた。

バートンはありもしないハリスの顔に向かって罵り続けた。いつまでも、いつまでも。

それは満月の夜だった。

バートンは己れの家に帰り警察を待ったが、それは彼のところにはやってこなかった。一週間後、バートンはあの惨劇の部屋を確かめたが、死体どころか一滴の血さえ残っていなかった。彼の知らぬ間にハリスは行方不明ということになっていた。

会社はバートンのものとなった。ハリスがいなくなっても、軌道に乗った会社は順調に業績を上げていった。

ある日バートンは誰にも告げずにあの湖のほとりの小屋に行った。

そこでハリスが待っている。

彼は何故かそう直感していた。
小屋はあの時のままだった。粗末な木の机の上に缶詰めがあった。彼の会社の製品だった。
バートンは木箱を置いて座った。
座るとスイス製のナイフを取り出し、缶詰めを開けた。
彼はそれを手摑みで食べ始めた。何かがかちりと歯にあたった。口の中から摘み出したそれは金の指輪だった。神の姿が刻まれてあった。バートンはそれに見覚えがあった。
彼はそれをポケットに仕舞うと小屋から出た。
ああああ、バートン。今おまえの食ったのがオレだ。オレは、オレはサナギ。そしてハリス。
そして死してなお残す思いがオレを人魚に変え、そして、今おまえの食ったのがオレだ。
魂は永久に旅を続ける。肉体は魂の残した軌跡。残した波紋はいずれ消え行く。が、魂は旅を続ける。果てしなく。
オレは……オレの魂は……。
おまえの魂は蝉野賢二の魂でありウラベの魂でありジョシュアの魂でありハリスの魂でもある。血肉は人魚となりやがて誰かに食われる肉片となり果てても、魂は失せることなく旅を続けている。
おまえは……レッドマン。
今おまえは最後のビジョンクエストを終えた。第一のビジョンクエストでおまえはウラベの魂を受け入れた。そこで経験した虚しい死は、おまえに死と生が同じものの裏表であることを

教えた。死は終わりであり始まり。生は始まりであり終わり。繰り返す生と死は等しい。そしてそれは世界とも、空とも、大地とも、風とも、草木や石ころ一つとも等しい。すべてが等しくそこにあるのだ。第二のビジョンクエストでおまえはジョシュアの魂を受け入れた。そしておまえは死なぬ生の有り様を知った。終わりなき生とはつまり時間を消して閉ざされること。癒されることのない痛みと果てることのない飢えに魂はやがて腐る。その恐ろしさ苦しさをおまえは知った。そして最後のビジョンクエスト。おまえはハリスとなり魂の有り様を知ったのだ。この世に生きるものすべてに魂は宿る。この世に生をうけていないものにも魂は宿る。森羅万象に魂は宿る。時と共に変わり行く世界は、決して変わることのない魂の影。魂の旅が残す足跡。
ああ、わかる。今のオレにはそれがよく理解できる。が、オレは……オレはどこへ行こうとしているのだ。
おまえがいずこへと向かうのか、それは私にもわからない。しかし、今おまえのすべきことはひとつ。マニトゥを正しき眠りに就かせることだ。
マニトゥ？
際限なく魂を食らう力、マニトゥ。それは死なぬ生を生きている。閉じた時間の中で腐り果てようとしている。父なる太陽の声も届かぬ、母なる大地の底に、マニトゥはいる。この地に生きる人間から、それまで生きたすべてを奪ってな。人とマニトゥ、共に棲まえばいずれかが滅ぶ。共にあってはならぬのだ。

オレは何を……。

　蝉野賢二よ。人として生まれ人として死ぬ大地の子よ。おまえは人の子として、己れが道を見定めるのだ。おまえは三つのビジョンクエストを経てすべてを知った。魂と、そして世界の有り様を。目覚めよ、蝉野よ。最後の希望よ。おまえが目覚めた時、その手の触れるもの、ことごとく力を持つだろう。最後の時は近い。行け。行ってマニトゥを長き眠りの中へかえすのだ。

　でも、オレは……。

サナギ。

あれ、遠くからオレを呼ぶ声がする。

サナギ。

誰だ。オレを呼んでいるのは誰だ。

サナギ。

おまえは……。

「サナギ、起きてよ、サナギ」

身体を揺すられ、サナギは目覚めた。

端末のモニターはとっくに灰色の単なるガラスに変わっていた。

それから眼の前の少女を見た。

その灰色の瞳と蒼ざめた唇を。

「ネミッサ……」

「聞かれる前に言っとくけど、ヒトミちゃんにはいったん帰ってもらったわよ」

「どうして」

「あれ……」

街路樹の根元にうずくまった人がいる。

鈍色（にびいろ）の外套（がいとう）を身にまとっていた。

「ちょっと、やばそうでしょ。ヒトミちゃんに任せてられないと思って。何しろまたサナギは気絶しちゃうし」

「気絶じゃない。レッドマンと会ってたんだ」

「詳しい話は」

「また後でな」

それが立ち上がった。

見上げるほどに大きい。優に二メートルは越えているだろう。

サナギはポケットの中の銃剣を確かめた。

「ようやく見つけたぞ、ネミッサ」

それは言った。ガサガサした金属が擦（こす）れるような声だった。

「誰、あたしを知ってるの？」

「ネミッサ、まさかおまえがこの地上によみがえっていようとは」

それが外套を脱ぎ捨てた。
幾本もの鉄材とバネとボルトとナットで、それの身体はできていた。バイクや作業車やその他様々な金属製品をでたらめにつなぎ合わせたような身体だった。
「我が名はムーウィス」
天体博物館でヒトミにとり憑こうとした悪魔だった。パラダイムXに消えたままになっていたが、どこかでこの新しい身体を見つけたのだろう。
「また懲りずに来たのね。あんた、ネミッサのことを知っているんだ。せっかくだから死ぬ前に教えてよ」
ネミッサは両腕を前に突き出した。
「ネミッサ、我が主の脅威。ネミッサ、我らが脅威。貴様は消えねばならない」
カシャカシャと音をたて、四方から機械の腕が飛び出した。
ネミッサはサナギに囁いた。
「ニュクスを呼ばないでね。あたし、ちょっとこいつに聞きたいことがあるの」
「御免、呼んじゃった」
サナギの前の大気がゆらめき、ニュクスの青銅色の身体が浮かび上がってきた。
ムーウィスが跳んだ。
四本の腕を振り回しながら、ネミッサの前へ。
吠えるような音をたて、ネミッサの両手から紅蓮の炎が吹き出した。

中空で炎に包まれたムーウィスは、しかしなんら損傷を受けた様子もなく火の壁を突ききってネミッサへと落下してくる。
「ニュクス！」
青銅の少女が、その身体をムーウィスに叩きつけた。
ニュクスの数倍は重いであろうムーウィスの身体が吹き飛んだ。
ぐるぐると回転し、機械の腕を蜘蛛のように地面に立ててそれは止まった。
フウウウウウウ、フウウウウウウウ。
ふいごのように息を吐きながら、ムーウィスは横へと這う。
金属製の蟹のようだった。
「やっぱ、ニュクス呼んどいて良かったんじゃないの」
「うるさい！」
ネミッサの手から火球が飛んだ。
それは地に伏せるムーウィスにぶつかると、轟音とともに炸裂した。
火花が四散し、機械の腕が一本、宙に舞う。
「ざまあ」
ネミッサは得意そうに言った。
「さあ、言うんだ。あたしの何を知ってる。主って何。あたしを知っているおまえたちは何者」
「……ネミッサ、死を唄うもの。我らがマニトゥに語られる死そのもの。我らが脅威、ネミッ

サ」
神経に障る金属的な声でムーウィスは言った。
その腕がまた一本、ネミッサへと伸びる。
ネミッサは大きく後ろに跳んだ。
間合いは充分だった。ムーウィスの腕の先から稲妻が走らなければ。
ガラスが割れたような音がした。
閃光がネミッサを包む。
その身体がキリキリ舞いながら地面に倒れた。
「ネミッサ！」
サナギが駆け寄る。同時にニュクスも走った。
昆虫の素早さでムーウィスが近づく。
ネミッサへと腕が伸びた。
見るだけで切れそうなナイフがその先端についていた。
ニュクスが腰を落とし、ナイフとネミッサの間に滑り込んだ。その身体が青白く輝いていた。
刃先はその光を刺し貫くことはできなかった。
ナイフが上へと滑る。
持ち上がった腕にサナギが飛びついた。
そのままの勢いで腕を押しやる。

バランスを崩したムーウィスは肩からニュクスに突っ込んでいった。
ニュクスとムーウィスはもつれ合いながらネミッサの身体を乗り越えて二転三転した。
「退いて、ニュクス！」
ネミッサが半身を起こして叫んだ。
ニュクスが跳び退くのと、ネミッサが火球を立て続けに放つのと同時だった。
白熱する火球は吸い込まれるようにムーウィスに叩きつけられた。
不定形の生き物のように、赤い触手を伸ばしながら炎は膨張した。
そしてムーウィスは――燃え上がる炎の中から現れた。
熱に歪み、熔け、真っ黒になった部品をだらしなくぼろぼろと落としながら、しかしそれでもそれは確実にネミッサへと脚を進めていった。
たった一本残った腕をもたげた。が、熱にねじれたそれは肩から抜け落ち、鈍い音をたてて地面に落ちた。
「ニュクス！」
サナギの声に応じて、ニュクスは動いた。動こうとした。
ムーウィスの胸が左右に開いた。中から蕾に似た棒状のものが突き出た。
先端がニュクスの方を向いた。
それだけだった。
光線も炎も何もなかった。

次の瞬間にはニュクスの身体が銀の粉となって砕け散った。
「ニュクス……」
サナギは呟き、絶句した。
強制的に悪魔をもといた異界へと送り返す力。
ムーウィスは悪魔に対して絶対的と言える力を持っていたのだ。
フゥウゥウゥ……ネミッサ……フゥウゥウゥ……マニトゥは……。
熔け塞がった口の奥から、その声は聞こえていた。
……マニトゥは死を……知らぬ。……おまえさえ……ネミッサ……。
首がネミッサに向いた。
今の炎で力を使い果たしたのか、ネミッサは半身を起こした姿勢のまま、手だけで後退りしている。
その眼に怯えがあった。
サナギは見ていた。
黒焦げになったムーウィスの顔の中、青く瞳が光るのを。それだけは生身の、生き物の眼のようだった。
鞘を払った銃剣を手に、サナギは走った。
ムーウィスは駆け寄るサナギを見ようともしなかった。ただネミッサに、一歩一歩近づいていく。

サナギは飛びかかっていった。
銃剣の切っ先をまっすぐムーウィスの眼に向ける。
ムーウィスの脇腹から、新たな腕が突き出された。それも焦げ、熔け落ちて指はない。
その腕が近づいたサナギを抱きかかえるように押さえた。
サナギに避ける気はなかった。
焼けたムーウィスの身体にサナギは押さえつけられた。
異臭をあげてジャケットが焦げる。
腹や背中に無数の針で刺されたような痛みを感じながら、サナギは銃剣の切っ先をムーウィスの眼に叩きつけた。
錆びた扉が開くような音が、ムーウィスの口から漏れた。
サナギの身体に巻きついた腕に、さらに力がこもる。
肋骨が音をたてた。
それでもサナギは、銃剣を何度も眼窩に突き立てた。
シュウシュウと音をたて、ムーウィスの身体から蒸気が吹き出た。
それまでムーウィスの身体をつなぎ止めていた何かが失せたのか、金属の部品がばらばらと崩れていく。
サナギを捕らえていた腕が、熟した果実のようにぼとりと落ちた。
サナギはその場で尻餅をついた。

その眼の前で、瞬く間にムーウィスは金属の山とへと変わっていく。
屑鉄の山の向こうにネミッサがいた。
「危なかったな」
サナギは微笑んだ。
その顎が赤く焼けただれていた。

2

「マニトゥは際限なく魂を喰らう力。父なる太陽の声も届かぬ、母なる大地の底に、マニトゥはいる……か。いつもながら君の話は頭が痛くなるような話ばかりだな」
リーダーは寝癖のついた髪をぽりぽりと掻いた。
天海市由良島。アルゴン精工を初めとしたいくつもの工場がここに集まっている。そのために資材を置くための貸し倉庫も多くあった。そのひとつに〈銀の鯨〉、スプーキーズのトレーラーは駐車されていた。
ここが彼らの引っ越し先だった。
今サナギとネミッサは昨夜の出来事をリーダーたちに伝えたところだ。
車内がいつもよりも広く感じる。
メンバーが減ってしまったからだ。

シックスは入院中だ。ユーイチはあの日から連絡が取れなくなってしまった。ネットを使っての連絡しかしたことがなかった。だから誰もユーイチの自宅を知らなかった。
残りはサナギとヒトミ、そしてランチとリーダーの計四人だ。
「俺もよくはわからんが」と前置きしてランチは話し始めた。
「あのクリプトの中心部に何があったかわからないが、あれはどう考えても、いわゆるCPUとは異なるもんだ。あれでコンピュータが動くとは思えない。魔法でも使わない限りな。ところがクリプトチップを搭載した端末はこの街のどこにでもある。それが全部稼働しているんだ。この街で行われていることを常識的に考えようとしても無駄だろうな」
「オレの体験していることを全部信じろとは言わないよ」
サナギは火傷の痛みが残る胸をさすった。
「でもな、信じる、信じないを別にして、とにかくできることから行動を起こさなきゃ始まらない。シックスを元通りにするためにもな。シックスだけじゃない。オレや、ヒトミちゃん、それにリーダーやランチ、ユーイチも、ファントムソサエティという組織がこの街で行っている計画に巻き込まれているんだ。今さら逃げようにも逃げられないんだからな」
「それにあたしの秘密を探るためにもね」
ネミッサがつけ加えた。
「クリプトを作っているのはアルゴン精工のはず。ここからすぐそばだ」
腕組みをし、リーダーはしばらく考えていた。

そして言った。
「……行ってみるか」
「そうこなくっちゃ」
ネミッサが拍手した。
倉庫を出てアルゴン精工まで。二十分ほどの道のりを四人は歩いた。
由良島は工場街だ。夜の七時を過ぎれば人通りは絶える。ただでさえ天海市ではみんなが夜の外出を控えているのだ。この世の終わりのような無人の街を歩く四人は、暗い夜道に佇む少年の姿を見て身構えた。
「やあ」
その少年は笑顔で近づいてきた。
「ユーイチ……」
リーダーが言った。
「アジトに集合っていうメッセージを見たから行ったの。行ったら出かけるところだった。それで何となく後をつけたの。途中で行き先がわかったから先回りしちゃった。びっくりした？」
ユーイチは問われてもいないことをすらすらと言った。
黙ってユーイチを見つめる四人を見回し、彼は言った。
「一緒に行ってもいいでしょ。オレもまだメンバーなんでしょ」
「勝手なことを言いやがって」

ユーイチに近づこうとするランチを、リーダーは制した。
「戻って来たんだ。いいじゃないか」
ユーイチは黙ってニコニコとリーダーの顔を見ていた。
「詳しいことは歩きながら説明する」
そう言ったリーダーにユーイチは笑いかけた。
「いいよ、別に説明なんか。悪魔退治に行くんだろう」
ユーイチは先頭を切って歩き始めた。
それからは、誰にもすれ違うことなく五人はアルゴン精工までやって来た。塀を乗り越え敷地内に入り込む。裏口のカードキーは、ランチの秘密兵器であっさりと開いた。
「簡単だな」
リーダーが言う。
「ああ、簡単過ぎる」
ランチが周囲を見回した。
「ということは当然」
サナギはガンタイプ・コンピュータのトリガーを引いた。
「ランチ、伏せて！」
ネミッサが叫ぶ。その腕がまっすぐランチの頭の方へと伸びていた。

ランチが慌てて頭を下げる。
掌から大気を焦がし火球が飛ぶ。
その先にいるのは馬のように見える。もし黒い蝙蝠のような翼を持った馬がいるのなら、だが。
天井近くの壁に貼りついていたそれが羽ばたいた。だがその時には炎がその身体を包んでいた。きいきいとネズミのような声をあげ、瞬く間にそれは蒸気となって消えた。
「あれが防犯装置というわけだな」
言ったサナギの横に、寄り添うようにニュクスが立っていた。
「さてと、これからどこへ進むかだが」
リーダーは火の点いていない煙草を咥えた。
「生産ラインを見ても我々には何もわからないだろう。問題はクリプトチップの核の部分。あの核の仕様がわかればいいんだが」
「工場内の端末に侵入すればいいんじゃないの」
ランチが警備室の扉を指差した。
「こんなところに人間の警備員を置いているはずはないから、いるとしたら組織の人間。これだけ騒いでも出てこないんだから、きっと誰もいないぞ。多分あそこを使うのは昼間だけ。夜は化け物どもに任せているんだろうさ」
話しながら扉へと進み、カードキーを開いてみんなを手招きした。

いくつものモニターとコントロールパネル。それ以外何もない殺風景な部屋だ。三つ置かれたパイプ椅子のひとつにマンガ雑誌が置いてあった。
「じゃあ、取りかかってみますか」
言いながらリーダーは椅子のひとつに腰を降ろした。袖をまくりあげ、キーを操作する。リーダーの正面にあるモニターが明るくなった。フィルターを噛みながらキーを叩き続ける。時折舌打ちし、指が止まる。それから煙草を吐き捨て、新しい煙草を咥える。
「駄目だな。どこにも仕様を収納した場所はない」
「アルゴンソフトの方にあるのかもな」
苦々しい顔でランチが言った。
「ここにあるとしたら」新たなキーを押す。すぐにビル内の平面図が現れた。「端末から独立した場所があるんだ。秘密を守るために。それはどこにも接続されていないか、あるいは特定のどこかと直通になっている。それが、このビルのどこにあるかだが」
一階、二階、三階、と次々に平面図は変わっていく。
「無駄足踏んだかもな」
ランチが諦め顔で言った。
「こんなところで何をしているんだ」
五人が一斉にドアの方を見た。
入り口にはニュクスを立たせてあった。悪魔が近づいたらすぐに攻撃をするように命じて。

「誰……親父」
ランチはサングラスを外して、侵入者を見た。初老の、疲れた顔の男。ランチの父親、北川毅生だった。
「親父こそこんな時間に……テメー、そうか……やっとわかったぜ。おまえも組織の一員だったってわけだな」
言うが早いか、ランチは父親に飛びかかろうとした。すぐにリーダーが後ろから羽交い締めにした。それでもランチは、クソ！　テメー！　と怒鳴りながら父親を蹴ろうと脚を振り上げた。
「組織？　何の話だ。おまえたちは何をしにここに来た」
「奇病の――」
そこまで答えたリーダーの脇腹に、くの字に曲げたランチの肘があたる。
うっ、と呻いてその腕をランチから離した。サナギが押さえようとしたが遅かった。
駆け寄ったランチは体重の乗った拳を父親の顎に叩きつけていた。
声も立てず、父親は倒れた。
「死ね！　卑怯者。ここで死ね！」
ようやくその身体をサナギが取り押さえた。ネミッサも腕を掴んでいる。
ユーイチは冷めた顔でこの騒動を見守っていた。
ハンカチで顔を押さえ、父親は立ち上がった。

「まさか君たちは奇病の原因を調べようとここに……」
唇を切ったのか、見る見る白いハンカチが赤く染まっていった。
「ランチのお父さんですか」
苦しそうに腹を押さえながらリーダーが言った。
「ああ、北川毅生。潤之介の父親だ」
「俺の名前を呼ぶなって言っただろうが、このタコ！」
暴れるランチに目隠しするようにリーダーはその前に出た。
「我々はランチの友人です。ここに忍び込んできたのは、今街で騒がれている奇病の原因が、ここで生産されているクリプトチップではないかと考えたからです」
「そいつに詳しいことを話すな！　そいつは敵だ！」
ランチが叫んでいた。
「それなら、わたしは敵じゃない。わたしがここに来た理由も君たちと同じだ」
嘘つき、黙れ、と叫び続けるランチを無視して、北川は話を続けた。
「わたしがそれを知ったのはつい最近のことだ。各家庭に配布されている端末には、最初から秘密が多かった。特にスポアに関しては」
「スポア？」
リーダーが尋ねた。
「クリプトチップの中心の核のことだ。工場長がそう呼んでいたのを聞いただけで、正体まで

は知らない。だがその他の仕様を見れば、それが単なるCPUでないことはすぐにわかる。この工場でも、あのパーツの仕様だけは極秘事項だった」
「確か、北川さんはアルゴン精工の技術主任ですよね」
　リーダーの問いに、北川は頷いた。
「それなら、そんなことを調べるのは簡単なことでしょう」
「だからそいつは敵の回しもんなんだ！」
　とランチが騒ぐ。
　北川は薄く笑った。
「技術主任とは名ばかりの閑職だ。すべてを管理しているのはここの工場長だ。陰気な薄気味悪い男だよ」
　ランチが笑った。
「人を裏切って手に入れたのはそんなカスみたいな職かよ！　ざまあないな」
「……それで、今日はそのスポアのデータを手に入れようと来た。すると裏口が開いていて、警備室の前に人形が立っていた。不審に思ってのぞいてみると君たちがいたんだ」
　ニュクスは命令を忠実に守り、悪魔ではない北川をそのまま通したのだろう。
「するとそのデータはここにあるわけですね」
「ある」
「嘘だ！　卑怯者の話を信用するな！」

　北川が前に出てきた。毅然としたその態度に、リーダーが思わず横に避ける。
「潤之介を離してやってくれないか」
　北川が言った。
「でも……」
　迷うサナギの力が一瞬緩んだ。ランチは腕を振り払って前に出た。北川のコートの衿を掴んでねじ上げる。怒りに唇が震えていた。
　北川はランチの眼を見つめながら言った。
「この工場がのっとられた時、確かにあの時わたしはたくさんの恩を受けた人たちを裏切った。だがそれは決して金とか地位とかに眼が眩んだわけではない」
　ランチが鼻で笑った。
「……脅されたんだ。ある日わたしはアルゴン精工からの使いだという男に連れられて、見知らぬ倉庫に連れていかれた。男は何も言わずわたしにビデオを見せた。ビデオに映っていたのは、前の工場で労働組合の書記をやっていた男とその家族だった。男は組合の中でも職派で通っていた男だ。男は後になって、先に逃げ出したと糾弾された。家族ぐるみで行方不明になっていたからな。その家族が映っていた。みんな椅子に座らされていた。一瞬だった。何かが爆発したのかもしれない。血飛沫が飛んだ。その後は……見られたもんじゃなかった。わたしはそこで吐いたよ。……そうして男は言った。家族を大事にすべきじゃないか、と。それだけでわたしは帰らされた」

「その男って、白人じゃないですか。黒いサングラスに顎髭の」
「そうだ」北川はサナギの科白に意外そうな顔をした。
「知っているのか」
「何度か……会いました」
いつの間にか、ランチは北川から手を離していた。
嘘だろ、と小さく呟く。
「それなら……それならどうしてそのことを俺に言わなかった。親父は一言も弁明しなかったじゃないか」
「仲間を裏切ったのは事実だ。理由は何であろうとな。他に方法があったかもしれない。わたしはいつもそう思っていた。母さんが死んだ時、罰を受けたんだと思った。おまえがわたしを罵った時、当然だと思った。あんなことをした人間が幸福に暮らせるわけがないと、そう思っていた」
「相談してくれたら良かったんだ、俺に」
「潤之介、おまえは中学生だったんだぞ」
「それでもだよ。それでも俺に……」
本名を呼ばれても、もうランチは言い返しはしなかった。
大きく息を吐いて、北川は言った。
「さあ、君たちはもう帰りなさい」

「帰らねえよ、親父」
「どうしてだ。今の話を聞いていなかったのか。相手は人を殺すことすら何とも思っていない連中だぞ」
「それじゃあ、何で親父はここに来たんだよ」
「奇病の原因が知りたかった。それがアルゴンソフト社の不始末であるのなら、それを公表するつもりだった。だからスポアのデータを……」
じっと北川を見つめるランチを、彼も見つめ返した。敵意以外の視線を交したのは、五年ぶりのことだった。
「わたしはもう後悔したくなかったんだ、潤之介。さあ、わかっただろう。わたしには危険を冒すだけの理由があるんだ」
「俺たちにだって理由はある。そのスポアのデータはどこで手に入るんだ。教えてくれよ、親父。もう俺たちは後戻りできねえんだよ」
「オレたちは北川さんを脅した男とも戦ってるんです」
サナギが口添えした。
「もう危険なところには脚を踏み入れているんです」
「……なら、ちょうど助けが必要だったんだ。ひとりでもできないことはないが、しかし」
「助け？」
ランチが聞いた。

「スポアのデータは三階のセンタールームにある。それを見れば」北川はモニターを指差した。「どこにあるかすぐわかる。わたしが今からそこに行く。その部屋の扉はロックされている。この警備室からそのロックは解除できる。ただし夜間は解除して一分後に自動的に閉じる設定になっている。ここからセンタールームまでどう見積もっても七、八分はかかる。だからわたしはここでタイマーの設定をしてと思っていたのだが、君たちがいるのなら簡単だ。時間を合わせてロックを解除してもらえればいい」

「ロックなんて俺の――」

「おまえのデコーダーなんぞで解除されるロックじゃない」

「知ってたのか」

「居間に置いてあったのを見た。わたしも技術屋だ。見ればわかる」

「でもね、おじさん」

ネミッサだった。

「このビルの中は危ないから、おじさんがここでロックを解除してくれた方がいいな」

「君らに何ができる。ここは年寄りに任せて――」

「こんなことができるのよ」

ネミッサが天井を指差した。

そこには換気口があった。

その闇の中で何かが動くのを、みなが見た。

ネミッサの指先から、赤い光条が伸びた。光はまっすぐ換気口に伸び、ステンレスの格子を溶かした。

悲鳴とともにそれは換気口から落ちてきた。

全身がブルーの粘液で覆われていることをのぞけば、それは猿のようだった。手足が異様に長い。指先は触手のようで、蛇のようにのたうっていた。

それは顔面を押さえ、皺に埋もれた口を開いて、荒く息を吐いた。

額に青黒く穴が穿たれていた。

唖然とする北川をしり目に、ネミッサはその悪魔のそばによると、手をかざした。爆発音とともに、その頭が吹き飛ばされた。

「あれは……」

北川は絶句した。

「こんな化け物がここにはごろごろいるの」

ネミッサはにっこりと微笑みながら言った。

「だから三階へはわたしたち専門家が行くわ。おじさんがここでロックを解除して」

「時間を合わせておこう。ほら、時計」

ランチが無理やり北川の腕を取って時計を出させた。

「三、二、一、今から二十分後、ロックを解除してくれよ。頼むぜ、親父」

北川をひとり残し、サナギたちは部屋から出ていった。

3

もし北川が三階のセンタールームに向かっていたら、おそらく一分と保たずに死んでいただろう。このビルの警備は厳重だった。今までよりも上位の悪魔がここには放たれていた。しかもその数が多い。

だがそれにしても、サナギたちの敵ではなかったのだが。

五人と造魔がセンタールームにたどり着いた時、まだ二分ほど間があった。

扉の前で全員が立ち止まった。

「あれで良かったのか」

リーダーがランチに言った。

「あれでって？」

「親父さんを家に帰した方が良かったんじゃないか。あそこも危険なことには変わりがない」

ランチは笑った。

「あの頑固者が、帰れと言って素直に帰るわけがない。それこそ殴り倒して連れて帰りでもしない限りな」

「……開いた」

サナギがノブを掴んで扉を開いた。

五人は足音を忍ばせて中に入った。

ニュクスがその後ろから滑るように部屋に入り、扉を閉めた。

*

「こんな時間に何をしているんですか」

センタールームのロックを開いた直後だった。

警備室の扉が開いて、黒いコートを羽織った男が入ってきた。

痩せた、陰気な男。この工場の工場長だった。

北川は立ち上がった。

「いや、ちょっと気になることがあったもので」

工場長は笑っていた。いかにも楽しそうに、しかし声を出さずに笑っていた。北川が初めて見る工場長の笑顔だった。

「工場長……」

「いや、失敬。あんまり嘘が下手なのでね、つい」

工場長は身体を揺すって笑い続けていた。

北川は椅子の背に掛けたコートを見た。そのポケットの中に拳銃があった。この日のために手に入れた旧ソ連製の拳銃だった。撃つつもりはなかった。が、脅しにはなるだろうと持ってきたものだ。

「北川さん。あなたがスポアのことを探っているのはわかっていたんですがね、いったいどう

するつもりかと楽しみに待っていたんですよ」
「知っていたのか」
「知らないと思っていたんですか。あなたは楽観的な人だ。そうでなければこの工場に忍び込もうなんて考えないでしょうが」
「黙って帰すつもりはないんだろうな」
北川の問いに、工場長は黙って頷いた。
「どうしても帰ると言ったら」
北川は自然に見えるようにコートを手にした。そのままそれを羽織った。ポケットに手を入れ、その冷たい感触を確認する。
「あなたは本当に困った人だ」
工場長は楽しそうに言った。
「おかげでわたしもこうして時には楽しむことができるんですが。退屈していたんですよ。こんなところでじっとしているのにね」
北川は銃を取り出した。
銃口を工場長へと向ける。
「そこを退いてもらおうか」
工場長は顔色ひとつ変えなかった。
「人間というものはどうしてこんなにも愚かなんでしょうか。まあ、あなたに聞いても仕方のないことですが」
話しながら工場長は北川へと近づいた。
「動くな」
言われるままに、工場長はその場で立ち止まる。
考え込むように顔の下半分を手で押さえた。指が顔面に食い込んだ。そのまま手を下にさげる。
ずるり、と顔の皮が剝けた。
「おまえ……」
下から現れたのは、紫の甲羅だった。鋲のようにいくつもの刺がそれを覆っている。
「わたしはシェムハザ。悪魔だったんですよ、実はね」
目の粗いやすりのような唇を開いて、工場長だった男は笑った。まるでそれがとんでもなく面白い冗談であるかのように。
笑いながら腕を前に出す。やはり甲羅で覆われたその手の指には、長く白い、牙のような爪がついていた。
シェムハザは北川の拳銃を握った。握手でも求めるような自然な動きだった。
「さあ、始めましょうか」
銃は紙で作った玩具のように、シェムハザの掌の中で潰れた。

*

ここもまたモニターとコントロールパネルの並ぶ部屋だった。しかしここは警備室よりはかなり広い。そしてかなり贅沢(ぜいたく)なソファやテーブルが置かれていた。サナギたちはそのソファに腰を降ろすこともなく、リーダーの目前にあるモニターを見つめていた。

ニュクスだけが立像のように部屋の隅に立っている。

リーダーはその力を遺憾(いかん)なく発揮していた。ガードは固かった。プロテクトは完璧で、パスワードは何重にも設定されていた。だがそれでも、リーダーは逡巡(しゅんじゅん)することなく画面を動かしていく。途中でパスワードの解析ソフトをインストールした。

「あたり」

リーダーが喜びを抑えて言った。

モニターに極秘の文字が点灯して消えた。

名前のつけられていないファイルが出てきた。

それを開く。

一連の文章と図形が現れた。

その文章はこのような言葉から始められていた。

――ここに述べるクリプトは、門倉氏とアルゴンソフト社の設計からなる、新たなCPUチップである。

みんなが歓声をあげた。

ただ一人、ユーイチをのぞいて。

モニターに映し出される文字をみんなが眼で追う。

――高い演算能力を持つ同チップだが、最大の特徴は『ソウル』、魂の集積能力を持つことである。クリプトの持つソウル集積能力と、それを利用した集積サイクルについて詳述すれば、以下の通りとなる。

クリプトはその内部に〈胞子(スポア)〉と呼ばれる生体素子を内包している。このスポアから、〈キャリア〉と呼ばれるソウルの捕獲能力を持つ成体が発生する。

添付された画像には、サナギの見た〈虫〉が映されていた。

――この〈キャリア〉は電磁的かつ霊的な特性を有する生命体で、ネット上を移動する能力を持つ。〈キャリア〉はソウルの捕獲を行うと、ネット回線を通じて母体へと本能的に帰還する。スポア――キャリア――ネット――母体、これがクリプトを利用したソウル集積のサイクル、いわゆるマニトゥシステムである。

このクリプトを搭載した端末は現在天海市市民の家庭の八十五パーセントに設置されている。また、各企業、店舗をはじめ、街頭にも設置され、最終的にはほぼすべての市民がこの端末に何らかの形で触れることになるであろう。

このことにより、ファントムソサエティの目的である、人のソウルの集積は、速やかに遂行できることとなる。現在モデルケースとしてこの天海市でのみこの計画は行われているが、成功が確信できれば日本のみならず世界へとマニトゥシステムは展開していくこととなるであろう。

なお〈キャリア〉は人の心の奥底に隠された欲望を引き出し、それに応じる部分からソウルを捕獲していく。通常二〜三回から多くても八回ほどの接触で、その人のソウルの捕獲は完了する。魂を完全に捕獲された人間の多くは廃人となる。が、完全にソウルを捕獲するまでの期間、その対象である人物の行動は様々だ。それが計画の施行に妨げとなる可能性も考えられる。
　また、マニトゥシステムは魂を集積するというその性格上、低級の悪魔を引き寄せることになる。その対処にも熟考が必要であろう。さらにネミッサのようにマニトゥ自身から生まれる悪魔に関しても慎重に対処すべきであろう。

「あたしが……マニトゥから生まれた」

　ネミッサは食い入るようにモニターを見つめていた。

「いったいマニトゥって何なの？」

「際限なく魂を喰らう力、だろう」

　サナギがレッドマンから聞いたままに言う。

「際限なく、魂を、喰らう力。……じゃあ、わたしも魂を吸い寄せる力を持ってるわけ？」

「違うと思う。ほら、あの悪魔ムーウィスが言っていただろう。――ネミッサは死を唄うもの。我らがマニトゥに語られる死そのもの。我らが脅威――理由はわからないけど、マニトゥとは敵対する何かだと思うよ」

「ううう」ネミッサは頭を掻き毟った。「何も思い出せないよ。よけいにわからなくなってきた。こんなこと考えるの、苦手なんだもん」

「とにかく、だ」

　データをすべてディスクに収めてから、リーダーは言った。

「ファントムソサエティの文章がここにあったことで、アルゴンソフト社と組織とのつながりは確実なものになった。それから、もう一つの黒幕の存在も」

「どういうことだ」

　ランチが言うと、リーダーはモニターを指差した。

「ほら、見てみろ。このコンピュータは思ったとおり内部からも外部からも接続されていない。ただ一カ所、ここをのぞいてはな」

　モニターに人差し指を突き立てた。そこに書かれてある名前は――。

「天海モノリス」

　ランチが言った。

「そう、天海モノリス」

　リーダーが椅子をくるりと回転させてサナギたちの方を向いた。

「開発計画の目玉のひとつ。現代建築の粋を集めた、と鳴り物入りで建設された市営の多目的ハイテクビル。ここに誰がいるか知っているか」

　サナギもランチも首を横に振った。

「西次官だ」

　そう答えたのはユーイチだった。

「そうだ、よく知っているな、ユーイチ。天海モノリスには西次官の事務所がある。天海市モデル都市化計画の最高責任者である西次官のな。この街が作られる時から、何もかもが仕組まれていたんだ」
ノックの音がした。
四人は一斉に身構えた。
扉が開いた。
「親父、どうしてここへ」
そこに立っていたのは北川だった。
その顔がぎごちなく笑った。いや、笑ったのではない。顔の皮が左右に引き攣れたのだ。顔だけではなかった。そのコートが左右に引かれ、ボタンが弾け飛んだ。下着を裂いて膨れ上がった北川の素肌が現れる。その肌がまた左右に引き攣れている。
ばりばりと音がした。
羽化する蝶のように、北川の顔から縦にまっすぐ亀裂が入ったのだ。
そして――北川は縦に裂けた。
北川だったものがずるりと床に落ちる。まるで脱ぎ捨てた下着のように。
中から現れたのは紫の甲羅に包まれた異形の悪魔、シェムハザだった。
「驚いただろう」
言うとシェムハザは腹を抱えて笑った。

「親父を……どうした」
怒りを顕にランチは怒鳴った。
「親父をどうしたと聞いているんだ！」
「さあね、わたしは人間にあまり興味がないんだ」
「貴様！」
誰にもとめることができなかった。
ランチは凄まじい勢いでシェムハザに掴みかかっていった。
シェムハザはつきまとう犬をおうように腕を振った。
刺付きの棍棒にも似たシェムハザの腕が、ランチの胸にあたる。
軽くあたっただけのように見えた。
が、ランチの服は裂け、皮膚は削られ、その血潮と共に身体が吹き飛んだ。
モニターにぶつかり、そのままずるずると床に滑り落ちる。
それから後のことは、ほぼ一瞬の間の出来事だった。
「ニュクス！」
サナギが叫ぶ。
青銅の少女が開いた両手をシェムハザへと突き出した。シェムハザがその腕を上げるのと同時だった。
青白い霧が渦巻きながらニュクスへと飛んだ。急激に室温が下がった。

ニュクスの手が閃光を発した。その指先から稲妻が走る。
それは霧を突き抜け、シェムハザの腹に炸裂した。壊れたネオンのような音をたて、電光がほとばしった。
青白い霧はその時ニュクスを包んでいた。
霧が消えた時、ニュクスの身体は白い霜に覆われていた。
凍りついたのだ。
サナギが呼びかけても、ニュクスは動かなかった。
が、シェムハザもまた動けないようだった。
青白い電光が、蛇のようにシェムハザの身体を這う。
それを見てネミッサが笑った。
その唇の端がにゅうと吊り上がる。
そしてネミッサは大きく口を開いた。
青白い唇を裂いて、炎が吹き出した。
それは尾を振り身体をくねらせながら宙を飛ぶ龍のようだった。
赤き炎の龍がシェムハザの身体に巻きついた。
轟音と共にシェムハザは炎の柱と化す。
シュウシュウと音をたて、その身体が砂糖菓子のように溶けていくまで、数秒とかからなかった。

「ムーウィスに比べたら雑魚(ざこ)同然だね」
ネミッサは不服そうにそう言った。
押し殺したような嗚咽(おえつ)が聞こえた。
ランチだった。
「…………親父は……親父の中に奴がいたのか……奴は親父を………クソっ、なんてことだ。俺は一度も謝らなかった。俺は親父に……今までのことを一度も」
「今からでも遅くはないぞ」
扉の横に立っているのは北川だった。
「親父」
「工場長に、いや、工場長だった奴に不思議な術をかけられてな。仲間がいるだろうと言われて、いないと答えたのだが、無駄だった。勝手に身体が動いて、ここまで奴を案内してきてしまった」
「クソ親父が……」
黙って北川はランチに手を貸した。
ランチは顔をしかめながらも嬉しそうだった。

4

「何故だ。何を間違った」
西次官はひとり呟いた。
紳士然としたその顔に疲労の色が濃い。
天海モノリスの最上階。ワンフロアすべてが西次官の事務所だった。
その中の西の部屋だ。
東側と南側は全面ガラスで覆われていた。
西は東側の窓の前に立ち、天海市の夜景を見下ろしていた。完成寸前の空港に灯された明かりから、天海ハイウェイが光の尾を引いている。瞬く街のイルミネーションは豪奢な宝石のようだ。それはそこで行われていることとは何の関係もなく、ひたすら美しかった。
小さな電子音が鳴っている。
その上でテニスでもできそうな大きなテーブルの上にモニターだけが備えつけられている。
そのモニターから音が聞こえる。電子メールの到着を知らせる音だ。
西はモニターを見ようともせず、ただ輝く天海市の夜景を眺めている。
見なくてもその内容はわかっていた。
すべてがファントムソサエティの幹部としての西へと届いたメールだ。

——由良島B・五地区に正体不明の悪魔が現れた。至急サマナーの応援を。
——茜モールを奇病患者が襲撃。迅速な対応を。
——芝浜コアに悪魔が集結。一般人を襲う前に何らかの対処の指示を乞う。
——アルゴンNSビル内に正体不明の悪魔出現。組織のサマナーはほぼ壊滅。新たな指示を乞う。
——組織内での罹患率が五パーセントを越えた。マニトゥシステムの抑制を希望する。
集まってきた魂を奪おうと、悪魔たちが様々な場所に出現している。その対応だけでも組織は手いっぱいだった。
それ以外に、組織がその存在を把握していない悪魔が各地に現れている。マニトゥが生み出した悪魔だと推測されていた。それは勝手に人々を襲い、組織のサマナーが何人もその犠牲となっていた。
そして天海市内で頻繁に起こっている殺人、自殺、失踪。ほんの四、五分前にも、アルゴン本社が暴徒に襲われたという報告があった。マスコミを押さえるのにも限界があった。しかも、不穏な空気を感じた住民が続々と街を出て行っている。天海市が無人の街となるまで、さして間がないだろう。
いや、そのこと自体はどうでもいい。ある程度までは予想できたことだ。そしてどうあろう

と、いずれは天海市は無人の街となる予定だった。
だがあまりにも早すぎた。組織の対応が追いつかない。
何よりも西を不安にさせていたのはマニトゥの成長ぶりだ。それは組織の思惑を遥かに越えていた。
マニトゥシステムを使い、世界中の人間の魂を彼らの主に捧げるために集めること。
それが組織の目的だった。
魂はどんどん集積され、母体であるマニトゥへと運ばれている。二上門の地下遺跡に置かれたマニトゥは巨大に成長しているという報告があった。母体から、集積された魂を取り出し、〈大いなる存在〉へと捧げる方法は聞かされていた。だがそれを発案したのは組織の人間ではない。いや、マニトゥシステムそのものが組織の人間によって考えられたものではないのだ。
成長を続けるマニトゥから魂を抽出する方法が本当に存在するのか。
西はそれを疑っていた。
組織は今回の計画から手を引くべきではないか。
そう考え始めていたのだ。
西の身体の奥底で、何かがびくりと震えた。心臓に杭でも打ち込まれたようだった。
思わず西は呻いた。
痛みにではない。その瞬間に西は知ったからだ。
「まさか……」

西は呟いた。
「シェムハザが死んだ。あのシェムハザが……。殺されたのか。まさか、そんなことが……」
インターホンから事務的な女の声が聞こえた。来客を告げる秘書の声だった。
西は動揺を押さえ、平静な声で通せと命じた。
長髪の男は、サングラスを掛けたまま入ってきた。西はその非礼を咎めることもなく言った。
「門倉、例のマニトゥシステムだが……」
テーブルを挟んで西は門倉のふてぶてしい笑みを浮かべた顔を見た。
「計画を延期しようと思う」
「どういう意味でしょうか」
どこか人を馬鹿にしたような顔で、門倉が言った。
「マニトゥシステムはすべて君の発案で行われてきた。君の指示するままにな」
「そしてマニトゥは魂を集め続けている。もうすぐこの街の人間すべての魂を集めてしまうでしょう。計画は順調に進んでいると思いますが」
「……集積した魂を抽出する方法に関して聞きたいことがある」
「確か以前に説明したはずですが」
「口答でな。だが、それが実際に可能なのかどうか実証はされていない」
「ほう、わたしのことをお疑いでしょうか」
挑むような眼で門倉は西を見た。

「うむ、信じてはいない」
　はっきりと西はそう答えた。
　が、門倉はそんなことを気にもしていないようだった。
「で、計画を延期しようと」
「中止を命じたいところだが、ソウルの集積に関して、組織はその功績を認めている。だからマニトゥのコントロールを我々が完全に把握できるまで延期ということにしたい」
「できませんな」
　信じられぬという顔で西は門倉を見た。
「今、何と言った」
「できないと言っているんですよ、西次官」
「君は……我々ファントムソサエティに逆らおうというのか」
「ええ」
　表情を変えずに門倉は頷いた。
　西の唇が怒りに震える。
「処置されたいのか」
「そのつもりはありません」
「それならどうして」
「このビルの屋上に設置したアンテナを使って、世界規模のネットワークが完成することになります。そうですね、西次官」

　西は憎々しげな顔で頷いた。
「それによってマニトゥシステムは世界へと広がります。回収できる魂の数は今までと比較にならない。今さら計画を延期する必要を感じませんが」
「だから、それを母体から抽出する方法が——」
　門倉は西に最後まで喋らせなかった。
「それに、今さらマニトゥシステムを止めることは不可能なのです」
「不可能だと」
「いったん封印を解いたマニトゥを止めるのは不可能なのです」
「貴様！　初めからそのことを知っていたんだな！」
　西次官の顔が怒りのあまり蒼ざめていった。その眼が赤く光を放っているように見える。紳士の仮面は既に消え去っていた。
　だが門倉は、それを嘲笑（ちょうしょう）を含んだ顔で眺めるだけだ。
「許さん！　まさか人間風情からこのような科白を聞かされるとは思ってもみなかった。システムを止めることが出来ないのなら、マニトゥそのものを滅ぼすまで」
「それは困りますね、西次官」
　あまり困ってもいない顔で門倉は言った。
「では、困らなくてすむようにしてやろう」

スープを汚らしくすするような音がした。

西次官の顔のあちこちに肉色の疣が生まれていく。

いや、それは疣ではない。泡だ。

西次官の顔が煮立った泥のように泡立っている。

顔から肌色の液が滴り、流れた。それは手からも、ズボンの裾からも、だらだらと流れ出し、床に薄汚い水たまりをつくる。

溶けた皮膚の下から現れたのは赤錆色の肌。その眼は白濁した死者のものだった。その額からは黒く瘤のような角が二本、突き出ていた。

門倉はその異形を眼の前にして、鼻で笑った。

「魔王アザゼル、か」

「わたしのことを知っているのか。……奇妙だ。貴様はひとりじゃない。……そうか、それで……消えろ！　マニトゥシステムと共に」

鎖骨の周辺から、肉色の筒が何本も突き出してきた。

溜め息のような発射音と共に、そこから無数の白い球体が飛び出た。

近距離で散弾を受けるのに似ていた。

乾いた音をたてて門倉の右肩が弾け飛んだ。

それは灰色の埃となって散った。

「こんなものでわたしを殺せると思ったのか」

哀れんでいるかのように、門倉は言った。

「わかったぞ。……貴様は……貴様はマニトゥの部分。マニトゥより生じる気泡。貴様は……」

「そこまでだ、西次官」

門倉が西の部屋を退出したのは午後八時半。

秘書が帰宅を告げるために部屋を訪れたのが九時。その時、部屋には誰もいなかった。ただ床に汚らしいシミが残されているだけだった。

5

天海市モデル都市化計画の最高責任者である西次官が失踪した。

が、その事件は新聞の片隅に小さく載せられただけだった。それ以上にニュースバリューのある事件が起こっていたからだ。

多発する暴動、通り魔殺人、異様な自殺。天海市の人口の三割を越えた奇病患者。天海市で起こる事件が次々とマスコミで報道されていた。ファントムソサエティがマスコミに圧力をかけるのを中止したのかもしれない。

サマナーネットは閉鎖された。

街を跋扈していたファントムソサエティの影は、今はもう何処にもない。
そして残された天海市は亡びの道へと進んでいる。
昨日、とうとう白昼、悪魔たちが街頭に姿を現した。西次官が姿を消してから一週間が経っていた。
天海モノリスの周辺だった。
報道関係者も含めて数十人の犠牲者が出た。天海市長は自衛隊の出動を要請したが、送られてきたのは警察と機動隊だった。それは犠牲者を増やしたに過ぎなかった。
そしてテレビカメラが全国へと放送している最中、天海モノリスは一夜にして琥珀色の結晶体に覆われてしまった。
サナギたちはアジトのテレビでそれを見ていた。入院中のシックスをのぞいてスプーキーズ全員がここに集まっていた。
画面に映っている結晶化した天海モノリスを見ながら、ランチは呟いた。
「いったい、どうなってんだ、この街は」
「怪獣映画みたい」
ユーイチが脚をぶらぶらさせながら楽しそうに言った。
「オレ、噂を聞いたことがあるよ。二上門の地下に邪神を封じた遺跡があったって。それの祟りじゃないのかな」
ユーイチの科白にリーダーが頷いた。

「それは噂ではないかもしれない」
みんなが不思議そうな顔でリーダーを見る。
「邪神の呪いかどうかは知らないがね。実は今日無理を言って集まってもらったのはその為だ。みんなと別れてから、アルゴン本社のメインコンピュータをハッキングしてみた。これがやたら厳重で、パスワードを解析するのに手間取って今までかかってしまった。その間にまさか街がこんなことになるなんて」
焦れた顔でランチが尋ねる。
「それで、何がわかったんだ」
「スポアさ。スポアはその噂の地下遺跡から運ばれているらしい。スポアの納品伝票や配送伝票の山の中から探し出してきたんだ。それが遺跡かどうかまではわからないが、二上門の地下に何らかの施設があり、そこからスポアが運び出されていることはまず間違いないだろう。そしてその施設への入り口は、どうやらあの天海モノリスにあるらしいんだ」
「マニトゥシステムの母体というのはもしかして」
サナギはリーダーを見つめた。
「そう、おそらくそこにある」
「しかしどうやってあそこに行く」ランチは言った。「ここに来るのさえ難しかったんだぞ」
各所で発生した暴動のいくつかはまだ沈静化していない。通り魔の恐怖は依然として残されたままだ。まともな人間ならたとえ昼間であろうと外出を控えるだろう。事実人通りは絶えて

いた。しかも、街のそこかしこに機動隊が検問所を作っていた。
今街に出ているのは機動隊と通り魔と悪魔、そしてマスコミの人間ぐらいだ。
「化け物だの暴徒だので一杯の街だ。なのに武器のひとつでも持っていたら検問に捕まって終わり。しかも、モノリスの周辺は機動隊が厳重にバリケードを築いている。どうやってその中に入る」
「ああ、確かに……。街がこんな状態では移動すら難しい。だからいいアイデアがないかと思ってみんなに集まってもらったんだが」
「あたしがどうにかできるかもしれない」
ネミッサだった。
「どうやって」
サナギが驚いてネミッサの顔を見た。
「何よ。あたしがアイデアを持ってたら不思議だとでも言うの。あたしだって考えぐらいあります」
「そんなことは言ってないだろう」
「まあまあ」リーダーが割って入った。
「それでネミッサ、どうするつもりなんだい」
「あたしはネット内を移動する能力を持っているわ。その力を使えばなんとかなるかもしれな

「せっかくの申し出だが、それはできない」
リーダーは同情するようにネミッサを見た。
「どうして？　あたしの力は見たでしょ」
勢い込んで言うネミッサに、リーダーは言った。
「アルゴン本社のハッキングをする時、天海モノリスにも侵入しようと試みた。駄目だった。プロテクトが厳重だからではない。どのネットも回線が閉ざされているんだ。モノリスを包んでいるあいつのせいか、それともああなる前にモノリス側から回線を閉じたか、それはわからないけどね」
「そうなの……」
ネミッサが溜め息をついた。
と、それにつられるようにドアが開いた。
振り返ったランチが叫ぶ。
「親父！」
ドアを開きそこに立っているのは、北川だった。
「なかなかいいところだな」
北川は照れくさそうな顔で、トレーラーの中を見回した。
「どうやってここを」
驚くランチに、北川は笑いかけた。

「潤之介、強大な敵を相手にしているには隙だらけだな。わたしがつけてきているのがわからないんだからな」
「……嫌な親父だな」
聞こえるような声でランチは独り言を言った。
「で、いったいここで何の相談だ」
「親父には関係ねえよ」
「今天海市で起こっていることにかかわりがあるのなら、わたしにも責任の一端がある。そういう話をしていたんだろう」
「ランチ、お父さんの言うことももっともだ。ぼくたちは同じ道に彷徨い込んだんだ。話だけでも聞いてもらおう」
ランチは不服そうな顔をしていたが、リーダーは簡潔に今までのことを説明した。
「その……そこのお嬢さんの〈力〉というものがよく理解できないが、とにかく、単なる移動の手段なら、方法がないこともない。街はメチャクチャだが、まだアルゴンソフト社というブランドは生きているようだ。わたしはアルゴン精工の社用車でここまで来た。途中検問で何度か止められたが、アルゴン精工のIDカードを見せたら、何を質問されるでもなく通された。そこにそのバンが停めてある。中には確か工場の制服も何着か入っていたはずだ」
「アルゴン精工の社員に化ければ、少なくとも検問は通れるというわけですか」
リーダーの科白に、北川は頷いた。

「しかし、今の天海モノリスに入ることはできないだろうな」
「アルゴン精工までなら行ける？　おじさん」
「それなら何とかなるだろうな」
「そうか、直通の回線か」
リーダーが手を打った。
「何だよ。二人で納得してないで説明してくれよ」
ランチが不服そうに言う。父親がいるせいだろうか。どこか態度が子供っぽい。
「アルゴン精工に、天海モノリスまでの直通回線があったことを覚えているだろう」
リーダーの説明にランチは頷いた。
「なるほど、あれがもし切られていなければ……」
「試してみる価値はあるね」
サナギが言うと、ネミッサはにっこりと微笑んだ。
「それじゃあ、早速行きましょうか」
倉庫のすぐそばに、アルゴン精工のロゴが入ったバンが停めてあった。
後部座席の下に工具と共に丸めてあった制服を北川が配る。
制服は三着。サイズの問題で、リーダー、ランチ、サナギの三人が着ることになった。
「くせえぞ、これ」
脇の臭いを嗅ぎながらランチは言った。

「文句を言うんじゃない。さあ、乗って」
北川がランチの尻を叩いた。
ネミッサとユーイチは後部ボックスにあるシートをかぶった。
バンがしんと静まった街へと出ていく。
白昼。白々しいほどの輝きで太陽は街を照らしていた。
誰もいない。
動くものもない。
盲人用の信号がサンプリングしたリアルなピアノの音でお馬の親子を奏でていた。
この世の終わりのような街の中をバンは進む。
律儀に赤信号で停まりながら、それでもいつもの半分ほどの時間で車はアルゴン精工に着いた。途中二度、検問にかかった。が、どちらもアルゴン精工のＩＤカードを見せれば何を調べるでもなく通過させた。
アルゴン精工はあの日、工場長を失ったあの日以来閉鎖されている。が、ここは天海モノリスのように機動隊が包囲しているわけでもなく、あの日以上に簡単に忍び込むことができた。
がらんとした工場に、生産ラインが動く音もない。悪魔たちの姿もない。
サナギは本当に世界が滅びてしまっているような錯覚に陥った。
コントロールルームのロックは外れていた。警備室にも電源が入っていなかった。場合によってはバンに積み込んだ発電機を使うことも考え、皆はコントロールルームに向かった。

部屋に入り電源を入れると、明かりが点った。少なくとも主電源が切られているわけではないようだった。
あの日と同様、リーダーがモニターに向かいキーを叩く。
「よし、天海モノリスへの直通回線は生きている」
皆の安堵の声が漏れた。
「さて、早速やってみるんだけど、あたしもこんな人数を運ぶのは初めての体験だから、できれば人数はひとりでも少ない方が」
スプーキーズのメンバーが全員北川を見た。
北川が肩を竦める。
「どうやら……わたしにできるのはここまでのようだな」
北川はランチに手を伸ばした。
ランチは照れくさそうにその手を握り、北川を見ずに言った。
「無事でな、潤之介」
「有り難う、親父」
「それじゃあ、みんな、頑張ってください」
北川が丁寧に頭を下げた。
思わずみんなもつられて頭を下げた。
「じゃあ、みんな手をつないで輪になって」

カゴメカゴメでもするかのように、サナギたちは輪を作った。
「それじゃあ、行くわよ」
ネミッサを中心に、白い光が部屋を満たした。
光の闇に包まれ、何も見えなくなる。
サナギは己れの肉体が微塵に砕かれていくのを感じていた。
ふつふつと音をたてて血肉から魂が放たれる。
速く、速く、速く、速く。
ネットの中を駆け抜ける疾走感だけがあった。

6

――手を離さないで!
ネミッサの声が聞こえた。
サナギは彼女の隣で手を握っていたはずだった。だが今は何処が手なのか、何処が脚なのか、何処が己れなのかがわからない。
ネミッサ!
サナギは呼びかけた。
――手を離さないで。お願い、手を離さないで……。

悲鳴が聞こえた。
女の、ネミッサの悲鳴だった。
ネミッサー!
サナギが叫ぶ。
ふわり、と身体が浮き上がった。
疾走感がいつの間にか消えている。
身体?
オレの身体は、オレの身体はどこだ。
ここは……あああああ、墜ちていく。
不意の落下感がサナギを襲った。
内臓が持ち上がる感触がある。
だが、いったいどこにオレの内臓は……。
霧だ。
周囲を包むのはいつの間にか濃いミルクのような霧だった。その霧の中をひたすら落下していく。
声がした。
低い男の声だ。
――ったく、ついてないぜ。

誰だ。サナギは誰何したつもりだった。だが声は出ない。

――オレは本当にツキがないぜ。おまえみたいな餓鬼が拾ったんだからな。

拾った? 何を。

霧の中にぽかりと男の姿が浮かんだ。冴えない長髪のオヤジ。サナギはその容貌に見覚えがあった。

ウラベ!

――しかし始まったものはもう止まらない。終わるまでな。俺はおまえに賭けた。頼むぞ蝉野、目覚めてくれ。

現れた時と同様、唐突にウラベの姿は霧の中に沈んだ。

次に現れたのは裸の男だった。何一つ身につけていないその男の尻から、太い尾がだらりと下がっていた。

それは哀しそうな眼をして言った。

――死をいたずらに弄んではならない。それはただあるがままにある。時を止めても、魂が歪み癒されぬ苦痛に身を責め苛まれるだけ。それを知るなら蝉野、目覚めよ。目覚めるんだ、蝉野。

ジョシュアだ。彼はジョシュアだ。

尾を持つ哀しげな男の姿が消えた。入れ換わりに現れたのは、初老の男だった。いい背広を来ているのだが、どこか田舎のおやじといった雰囲気が抜けない。なぜか男は全身がぐっしょ

りと濡れていた。

男は言う。

――死は等しくみんなに訪れる。それは次なる生への準備だ。輪廻の輪は永劫に回り続ける。魂は泡のごとき肉体をいずれは離れ、次なる旅に向かう。向かわねばならないのだ。それを止めてはならない。決して止めてはならない。蝉野よ、あれはあまりにも不自然な存在だ。目覚めよ。そしてあれもまた自然の法に基づき輪廻の輪の中に導くのだ。目覚めよ、蝉野。

死して人魚となり、さらに誰かに食われ来世へと向かった男。ハリスだった。

男の姿が消えた。

コヨーテの姿が浮かんできたように見えた。だがそれは一瞬の見間違いだった。

霧の中に佇んでいるのは、逞しい肉体を持った老人だ。骨や角、様々な羽毛で身体を飾りたてている様は、どこかの呪術師のようだ。

――この地に訪れた災いは、人が呼び寄せてしまったのだろう。

その声に聞き覚えがあった。

レッドマン。

――そう、わたしはレッドマン。大地と共に生きた民の残り火。

既に三度に渡るビジョンクエストをおまえは経験した。

今こそ目覚めるときだ。

蝉野よ、目覚めよ!

光だ。
すべてを包む純粋な光が、その掌でサナギを包み込んだ。
身体の芯の中へと、その光はゆっくりと浸透していく。
そして魂が、サナギの魂が光に満たされていく。
それは暖かく、優しかった。
ほろり、と魂にまとわりついていた黒く惨めな塊が落ちる。
ほろり、またほろり。
汚らしいそれは澱となって光の底へと沈んでいく。
そして、そしてサナギの魂はかつて人類がそうであった輝きを取り戻した。
目覚めたのだ。
サナギは知った。
すべてを。
レッドマンがマニトゥを封じた。
マニトゥは純粋な存在。死と同じく、それはあるがままにある。マニトゥに意志はなく、方向もない。ただそれはひたすら魂を喰らう力。
だが、人がマニトゥと出会えば、その魂はマニトゥの働きかける力によって歪み、その歪みが今度はマニトゥへと働きかける。その力は狂気と化し、さらに人々へと働きかけていく。
一度起こった魂の歪みは、こうして果てしなくマニトゥという存在を狂気へと追い込み、その力が今度は人を狂気へと駆り立てる。
人とマニトゥとは決して共存できない。
そのことを知ったレッドマン——遥か古の時よりソウルとなりマニトゥを見つめ続けるもの——は、マニトゥを大地に封じた。偉大なる大地にゆだねたのだ。
が、己れの欲望のためにマニトゥの封印を解いた男がいた。
門倉だ。
門倉はマニトゥを利用しようとした。が、マニトゥは誰にも利用などできるものではない。
マニトゥは暴走し始めた。そうなるとレッドマンの力も及ばない。マニトゥを止めるためには消滅させる以外ないのだ。
だがすべての生が祝福の唄と共に目覚め、すべての生が死の唄と共に終えることを知らぬマニトゥに、死という終焉は存在しない。マニトゥに死を与えるにはまず死を知らしめなければならないのだ。マニトゥに死を告げる歌を唄う者。
その者の名は——。
「ネミッサ……」
サナギは呟いた。
見回せば天海モノリスの一階ロビー。横にはネミッサがいた。サナギと同じく横たわって。
「みんな、無事だったのか」
「ああ、君とネミッサをのぞいてね。心配したぞ」

リーダーの手を借りて、サナギは立ち上がった。
ネミッサの眼が開いた。
「大丈夫か」
ランチが声を掛けた。
「あたし、レッドマンに会った」
ネミッサは哀しそうに呟いた。
「ああ、オレもだ」
「……それならあたしが誰かもわかっているのね」
ネミッサの問いかけに、サナギは頷いた。
「おまえも、思い出したんだ」
「ええ」
ネミッサは眼を伏せた。
「やっと思い出したんだ」
ユーイチは興味深げにネミッサを見ていた。
「ええ、やっとね」
ネミッサはサナギの手を借りて立ち上がった。そして、ふと首を傾げた。
「誰」
二階へと続くエスカレーターの影を、ネミッサは見つめていた。

「まさか、こんなところで会えるとはね」
影が人形（ヒトガタ）をつくったように見えた。
それは光の中に一歩進んだ。
「フィネガン！」
言いながらサナギはガンタイプPCを取り出していた。
「俺はおまえたちと戦う気はない。負けはしないが、怪我でもしたら馬鹿らしいからな」
フィネガンが内ポケットに手を入れた。
五人が一斉に身構える。
フィネガンは葉巻を一本取り出し、それに火を点けた。
「どうやら今回はおまえたちと同じ目的でここに来たようだな」
煙を龍のように吐き出した。
「どういう意味だ」
リーダーが言うと、フィネガンはゆっくりと近づいてきた。
「止まれ！」
リーダーが発射式のスタンガンを向けた。フィネガンは素直にその場で立ち止まる。
「何なら両手を上にあげておこうか」
嘲笑を浮かべてフィネガンが言う。
「殺るつもりなら、名乗りを上げる前におまえたちをミンチに変えているさ」

嘘ではないだろう。それぐらいのことは、葉巻に火を点けるよりも容易くやる男だ。

「俺はマニトゥを処理しに来た。マニトゥシステムのことは知っているか」

「魂を集積し母体に集める」

ランチの答えに、フィネガンは拍手した。

「そのとおり。そうやって集めた魂を〈大いなる存在〉に捧げるのが我々ファントムソサエティの目的だった。だが、マニトゥは暴走し始めた。門倉が裏切ったのだ」

「門倉……やはりそうだったのか」

言ったのはリーダーだった。

フィネガンは話を続けた。

「マニトゥは小さな人形のようなモノだったらしい。それがマニトゥというわけではなく、その中に封じられた力がマニトゥなんだが……。光をも捕らえるブラックホールに似て、マニトゥもただひたすら魂を捕らえ、集める力そのものだ。だがブラックホールがそれが存在する場をも歪めるように、マニトゥも場を形成し歪めていく。それが天海市を今のような状況に変えた。門倉はそれを知っていながら隠していた。今、マニトゥは暴走している。もう我々の手には負えなくなった。おそらく門倉の手にも、な。だから組織はこの計画を中止し、天海市から引き上げた。俺も本来なら引き上げて然るべきなんだが……」

フィネガンにしては珍しく、そこで少し口ごもった。

「ファントムソサエティは人の倫理観や道徳律とは別種の価値観を持っている。だから考えな

かったんだろう。……門倉への復讐というようなものを」

「復讐……。おまえは感情に振り回される者を嘲っていたんじゃないのか」

言ったサナギをフィネガンは鋭い眼で睨んだ。

「おまえ、クズノハの一族か」

「クズノハ？」

聞いたことのない名だった。

「我々と太古より敵対する一族だ。……違うのか。レイ・レイホウがこの街に探りを入れているという情報があったんだが、あれもこの街に流れた無数の噂の内のひとつか」

「何を言っているんだ」

サナギが言うと、フィネガンはかぶりを振った。

「いや、いいんだ。それよりおまえはそのガンタイプPCの中にあったネミッサ・プログラムを知っているな」

「ネミッサ・プログラム？」

リーダーが首をひねった。

ネミッサが一歩前に出る。

「わたしがネミッサよ」

「おまえが……。マニトゥが生み出した他の悪魔と同様、形を持ったのか。そうか、これでわたしたちの勝ちだ」

「わたしたち？」と尋ねたのはリーダー。「勝ち？」と聞いたのはランチだった。

「手を組もう。ネミッサ・プログラムは門倉がマニトゥから摘出した『死』そのもの。奴はこのプログラムを『死を唄うもの』と呼んでいた。細胞が予めそのDNAの中に『死』をプログラミングされているように、マニトゥもその中に『死』が組み込まれている。それがネミッサ・プログラムだ。門倉はマニトゥからそれを排除した。その存在を不死にするため。そしていざ自らの手に負えなくなった時のための保険にな。我々がガンタイプPCを探していたのは、その中のネミッサ・プログラムを手に入れるためだった。どうやらそれは、マニトゥが生んだ他の悪魔たちと同様、こうやって人格を持ったようだな。彼女がいる限り、我々の勝ちだ」

「なんでおまえと手を組まなければならないんだ。ネミッサは俺たちの仲間だ。おまえに力を貸す気はない」

ランチが言った。サナギも、リーダーもそう思っていた。

ネミッサは『俺たちの仲間だ』というランチの言葉が嬉しかった。

「マニトゥがこの地下遺跡にあることは知っているんだな」

「だからこそここに来たんだ」

リーダーは相変わらずスタンガンを手にしたままだった。ただしその腕は徐々に重さに絶えきれず、銃口は床に向きつつあったが。

「地下遺跡に行くのに、エレベーター一本で行けるとでも思ったのか」

フィネガンは笑った。

「地下遺跡への通路は当然ロックされている。キーは声紋と指紋。おまえたちのちゃちなデコーダーでは到底歯が立たない」

「ちゃちとはなんだ」

言っても仕方ないとは思いつつも、ランチは口を出した。

「俺がいなければ地下遺跡には行けない。それからここですべき仕事は二つある。どうせなら作業を分担した方がやりやすい」

「二つ……。どういうことだ」

サナギが尋ねた。

「ひとつは門倉とマニトゥシステムを処理すること。そしてもうひとつ。このビルの屋上にアンテナがある。あれは通信衛星を使って世界中にパラダイムXを送るためのアンテナだ。既に世界各国にモデル地区を設定し、いくつかの端末を設置してある。この天海市ほどの規模ではないが、北半球の都市にあまねく端末を置いた。それで充分だ。巨大になったマニトゥの力なら、端末を中心としてその力をいくらでも拡張していく。門倉がその気になれば、今からでも世界中の人間から魂を奪い取ることができる。そのアンテナを破壊することが二つ目の俺の目的だ。どうだ、俺と手を組む気になったかね」

しばらくの沈黙の後、ランチが言った。

「俺はリーダーに任せる」

「オレも」

ユーイチが言った。
「オレもいいよ。最後の決定はいつもリーダーに任せていたんだ」とサナギ。
「あたしも異議なし」
最後にネミッサがそう言って、リーダーを見た。
リーダーはポケットを探って煙草を取り出してきた。それを咥える。
「手を組もう。ただし、チームのリーダーはぼくだ。ぼくの言うとおりに動いてもらう」
「一向に構わんね」
フィネガンは葉巻の煙をこれ見よがしにリーダーに吹きかけた。

7

地上二十階までエレベーターが稼働していた。ところがそこよりも上へ向かうエレベーターはどれも動いていなかった。
屋上は地上四十階。
まだまだ先だった。
リーダーを先頭に、ランチとユーイチは階段をひたすら昇り続けていた。
この三人が屋上へ向かうのはリーダーが決めたことだった。フィネガンの話では、この天海モノリスの中に悪魔はいないという話だった。あの琥珀色の結晶が一種の結界を作っているら

しい。だから屋上へは人間だけのチームで進めると判断したのだ。
地下ではマニトゥと出会う。それに対処できるのはサナギとネミッサ。フィネガンも屋上へ、と考えはしたが、もし仮にフィネガンが何か企んでいるのなら、悪魔を召喚してことを起こすだろう。その時それを止めることができるのもサナギとネミッサ。
地下行きの人選が決まり、そして屋上行きの人選は必然的に決定した。
昇り始めて直ぐにリーダーは息切れしてきた。もともと体力がないのだ。後ろを見るとランチもユーイチも平然と昇っている。もともと運動は苦手な男だった。悪魔との戦いの場などでは、ぼくは作戦担当だから、と照れ笑いでごまかしてきた。今、ぼくは作戦担当だから、と言って途中で休憩するわけにもいかない。
ただひたすら脚を上下させる。
後十階、後八階、後五階、と頭の中でカウントしながらようやく屋上に出た時には、脚が痙攣を起こしそうになっていた。
「あれだね」
あくまでゲームか何かをするような態度でユーイチは眼の前のアンテナを指差した。
それはビルの上に建てられた鉄骨の塔だ。頂上まで十メートルあまり。世界中の人間から魂を奪い取る、といった禍禍しい雰囲気は欠片もなかった。
リーダーはコートのポケットの中の冷たい金属を指先で撫でた。
フィネガンから預かってきた時限装置付きの爆弾だ。爆破までの時間をセットし、ボタンを

押す。それだけで鉄塔を破壊できるということだった。
「誰かいるぞ」
ランチが言った。
そのアンテナの脚元に男がひとり立っていた。
その男は親しげにリーダーに近づいてきた。
「やあ、桜井。いや、ここではスプーキーだったかな」
「門倉……」
「知っているのか、リーダーを」
ランチは不審げに尋ねた。
「知っている？ 彼はわたしの部下だよ。計画の要であるネットワークをうろつくハッカーどもは我々にとっても目障りな存在だったからね。内部に潜入していろいろと情報を渡してもらった」
「何を言うんだ」
焦ってリーダーは言う。その焦りがかえって疑いを生むことに気づいていない。
「そう言えば、オレたちがこの事件に巻き込まれたのはリーダーがあのガンタイプPCを持ち込んでからだよね。最初から仕組まれてたんだ」
ユーイチは道を尋ねる小学生の、屈託のない笑みを浮かべたままだ。
「君には感謝の言葉もないよ」

門倉はリーダーに握手を求めた。
その手をリーダーがはねのける。
「嘘だ、それは嘘だ」
「嘘？ 君の口座に振り込まれる金は何処から出ていると言うんだね」
「リーダー、こいつの言っていることは本当か」
ランチはリーダーの衿を掴んでねじ上げた。
「今言ったことは……嘘じゃない。確かに、確かに奴の部下だったし、スプーキーズを結成したのも奴の要請だった。しかし」
ランチはリーダーに最後まで話させなかった。
掴んだ衿を引き上げながら、上から額をリーダーのこめかみあたりに叩きつけた。
喧嘩慣れしている者の頭突きだ。
リーダーは一瞬意識が混濁した。
その額に拳を叩きつける。ボクシングの教科書に載せたいほどの見事なアッパーだった。
真後ろに倒れたリーダーは、起き上がれそうになかった。
そこまでする気はなかった。
怒りが反射的に身体を動かしていた。
リーダーに手を伸ばしたランチの眼の前に門倉が立った。
サングラスを取る。

その眼に嘘はない。
眼球が血に塗れたように赤一色だった。
その赤い眼が輝いた。
真っ赤な光がランチを包み込む。
楽しいだろう。
門倉の声だった。
それはランチの頭の中に直接響いた。
楽しいだろう。
声はもう一度言った。
何が……だ。
リーダーを殴ってすっとしただろうと言っているんだ。
そんなことはない。
本当か。
……。
その言葉に嘘はないのか。じゃあ、何故殴った。
腹が立ったからだ。
腹が立てば殴ってもいいんだな。
そういうわけじゃない。

言えよ。楽しかったって。おまえは楽しくて仕方なかった。そう感じないようにと思っても無駄だ。俺はおまえの心を知っているんだから。そうだ。もしおまえが楽しんでなかったというのなら、もう一度やってみろよ。
嫌だ。
やってみろって。そうすればどんな気持ちかわかるだろうさ。
ランチの眼の前にリーダーがいた。
リーダーは薄く笑っていた。笑いながらランチを見ていた。
怒りは、爆発的に生じた。
気づけば拳で殴っていた。
殴っていることを知った時、ランチは己れの声を聞いた。
破壊しろ、破壊しろ、すべてを破壊しろ。
ランチは殴り続けた。楽しくて仕方なかった。もうそこにあるのは顔ではなく血みどろのボールだった。ランチは笑っていた。笑いながら殴り続けていた。
手を貸してやるよ。
何のだ。
ランチはリーダーを殴りながら聞いた。
おまえの望みを叶えるために。
俺の望み？

世間なんてこんな裏切者ばっかりだ。そんな社会をこのままにしておいていいのか。さあ、言ってみろ。正直におまえの望みを。

「……破壊だ」

ランチは門倉を見つめながら言った。

「それは破壊だ。人々を血と肉の塊に変え、街を焼き払い、すべてを、すべてを破壊する。破壊だ。破壊だ。破壊だ！　破壊だあああああ！」

ランチの胸が弾けた。

ここにサナギがいればそう見えただろう。そして胸に開いた空洞から一匹の巨大な虫が飛び出すのを。

桃色のゼリーに似た太い胴体を震わせながら、それは鉄塔へと飛んで行った。

ユーイチが笑った。心から楽しそうに。

ランチが地面に膝をついた。その眼は虚ろだった。開いた唇の端から、唾液が垂れた。

「後は任せたぞ」

門倉はサングラスを掛けた。

その足元、コンクリートに波紋が生じた。門倉の革靴がその波紋の中に沈んでいく。そして膝から腿、腰から胸と、門倉の身体はコンクリートの波紋に呑まれていく。

頭の先が消えると、波紋は収まった。

「ランチにいったい……何を」

リーダーだった。半身を起こし、惚けたままのランチを見る。

「ほんと、おまえらってクズ」

ユーイチはナイフを取り出した。

それをこともなげにリーダーの腿に突き立てた。

リーダーは絶叫した。

「何がリーダーなわけ？　おまえらみんなクズ人間だね」

ナイフを抜いた。血塗れのナイフでリーダーの喉を指す。

「死んでみたら」

ユーイチはけらけらと笑った。

「……どうしたんだ、ユーイチ」

「もう、あんたたちの世界は終わり。オレの世界になるんだ。もうすぐだよ。楽しみだね」

言いながら戯れにナイフを振った。

リーダーの肩がすっぱりと切れた。

再びの絶叫。そしてユーイチの哄笑。

血の軌跡を残しながら、リーダーは這った。痛みというものがこれほど凄まじいものだとは知らなかった。身体を動かすたびに、全身が痺れるほどの痛みを感じていた。

「逃げるの」

ユーイチは笑い続けていた。

「逃げちゃうの、リーダー」
少しずつ、少しずつ、リーダーは鉄塔へと近づいていった。
奇妙な虫でも見るような眼で、ユーイチはリーダーを見ていた。
ようやくリーダーは鉄塔の脚元まで来た。
「何してんの？」
リーダーはコートから爆薬を出した。時間をセットし、ボタンを押す。
「……今、時限装置を押した。時間はあまりない。……助かりたかったら逃げるんだね」
ユーイチはリーダーに近づこうとした。爆薬を取り上げるつもりだった。
「時間がないと言っただろう」
リーダーはその金属の小さな箱を見た。
「後五秒。どうする、今逃げないと爆発に巻き込まれるぞ、ユーイチ」
迷っていたのは一瞬だった。
ユーイチは階段に向かって走り出した。
猟犬に追われる兎の早さだった。
階下にユーイチの姿が消えるのを確認してから、リーダーは爆弾を置いた。
そして煙草を口に咥える。
後五秒というのは嘘だった。まだ少しの時間がある。立って走りさえできれば充分逃げ出せるだけの時間が。

リーダーは這った。しかも片手でランチを掴んで。
激痛に意識が薄れそうになった。
それでも腕を出し、床を掻き、前に進んだ。
煙草が吸いたい。
リーダーの、それが一番の願いだった。

8

地下遺跡には二柱の神が眠っていた。
この天海市の地霊だった。二柱の神が眠る街だから二神門。もともとはそのように表記されていたらしい。
門倉の指示でマニトゥシステムがここに設置されることになった時、組織のサマナーたちはその神を葬った。彼らの言葉で言うのなら処理したと言うべきか。その先頭に立っていたのがフィネガンだった。
「門倉の説明では、ここには霊的な力の場があるらしい。だからこそ神が宿る。力を場から得ることができるんだ」
解説しながらフィネガンは先頭を歩く。いつもより饒舌なのは、彼のような男でさえマニトゥが恐ろしいからか。

古き神を崇める人間がこれを造ったのか、あるいは神自身がこれを造ったのか、地下遺跡は石造りの迷宮だった。
　灰色の巨石に囲まれた通路を延々と進んでいると、己れがぐるぐるといつまでも同じところを歩き続けているような気になった。
　様相が変わってきたのは、地下遺跡に入ってから十分を過ぎた頃からだろうか。
　濡れた巨石の表面が、爛れたように崩れている。さらに進めば、それは到底鉱物とは呼べない何かに変化し、ひくひくと脈動していた。
　その一部は、例えば触手のように長く伸びた指に変化し、あるいは布状の皺だらけの何かだったりした。フィネガンの言うことによれば、それらはすべてマニトゥが生み出した悪魔だという。ただしどれもこれもでき損ないで、地上に出ることに失敗したものばかりなのだそうだ。
　しかしそれが何であろうと、不気味なことに変わりはない。壁に刻まれた歪んだ顔が呻き声をあげ、猿のような腕が手招きする。この奇怪なお化け屋敷の中を三人は進んでいった。
「声が聞こえる」
　ネミッサが言った。
「魂の声だわ。泣いているの。マニトゥに捕らえられ、泣いているの。マニトゥはすぐそこよ」
　胎内巡りにも似た旅が唐突に終わった。
　広い。
　地下に造られたものとは思えない規模だった。

　見渡せばどこまで広がるのかわからぬ石の壁が薄闇に消え、見上げれば果てしなく続く石柱がその先を闇の中に没している。
　中央にそれがあった。
　球場並みのライトがそれを照らし出していた。天海モノリスに匹敵するのではないかという長大な塔だった。
　周囲に鉄骨が建てられ、無数の作業台が張り巡らされている。建設中のバベルの塔を思わせた。
　雪のように降るのは、細かな白い欠片。それを吹き出しているのがその塔だ。欠片は羽毛のように舞い、静かに発光していた。
　いつの間にか深海に運ばれてきたと錯覚を起こしそうな情景だった。
「あたしはあれから生まれた。マニトゥはあたしの母体だった」
　ネミッサが唄うように口ずさんでいた。
「マニトゥは見境なく増殖し、魂を喰らう。邪魔するものに死を与えながら。それはもうマニトゥ自身にも止めることはできない。止めなくちゃ。早くマニトゥを止めなくちゃ」
「止められては困るんだ、お嬢さん」
　輝く白い欠片と共に、その男は降りて来た。
「門倉」
　フィネガンが言った。

押し殺した怒りが、その唇を裂き炎となって吹き出ているようだ。
「お久し振りですね、フィネガンさん」
フィネガンは答える代わりにリストバンドタイプのコンピュータのキーを押した。
閃光とともに巨人が現れた。
サナギはガンタイプのＰＣを取り出した。トリガーを引く。銃身が左右に開いた。
その時だった。
「待ってぇ」
声が聞こえた。
それがユーイチの声だということはわかった。どうやって案内なしでここまで来られたのか疑問には思った。が、それを問いただすには、この場はあまりにも危険だった。
「ユーイチ、離れていろ！」
サナギが門倉から目を離さずに叫んだ。
が、ユーイチはサナギの言葉を無視して、彼の横に立った。
「大変なんだよ。リーダーが」
そこまで言うと、ユーイチは「これ貸してね」とガンタイプＰＣをもぎ取った。
あまりにも意外な行動だった。
「何をするんだ、ユーイチ」
取り返そうと腕を伸ばすサナギを逃れ、ユーイチはガンタイプＰＣを投げた。

門倉へと。
「ユーイチ……」
サナギには信じられなかった。
「仲間割れか」
油断なく門倉を見ながらフィネガンが呆れたように言った。
ユーイチが門倉へと走り寄る。そして子犬のように門倉にまとわりつきながら言った。
「上手くいったね、門倉さん」
「操られているのよ、ユーイチは。門倉の、いえ、マニトゥの力に」
ネミッサは両腕をゆっくりと門倉の方へと持ち上げていた。
「おまえがネミッサだね。せっかくわたしが封じ込めておいたのに」
かつてのネミッサなら、即座に門倉を攻撃していただろう。なにしろ彼女が現れた時から憎んでいた彼女を閉じ込めた男が眼の前にいるのだから。
しかし、今ネミッサはただ哀れみの眼で門倉とユーイチを見つめるだけだ。
「ラームジェルグ」
フィネガンが呟いた。
「やめろ！　ユーイチが！」
サナギが叫んだ。
そして血塗れの巨人が叫んだ。

すべてを粉砕する衝撃波が門倉へと走った。
そしてそれは、門倉の胸の中へと消えた。
フィネガンが絶句した。
「バーカ」
ユーイチがけらけらと笑った。
「ほんっとにこいつらクズ人間だね。さあ、門倉さん。こんな奴ら無視して、早く世界を変えちゃおうよ。これでオレの世界になるんでしょ。ね、そうでしょ」
「ああ、おまえの欲望はこれですべて叶えられた。何もかも終了だ。おまえの魂は既にマニトゥのものだ」
何か聞き返そうとしたユーイチの胸が裂けた。中から現れた大きな虫は、四枚の羽根をゆらゆらと羽ばたき、マニトゥの頂きへと飛んでいった。
ユーイチは門倉の袖を摑んだまま、人形のように立ちつくしていた。その眼に、もう光はない。
「邪魔だ」
門倉は腕をひと振りした。
ユーイチは壊れた人形のように転がっていった。
「門倉はマニトゥの力で狂っている。そしてその狂気がマニトゥをさらに狂わせている」
ネミッサの声は冷静だった。

「魂が集まってくる。わたしの中に力が流れ込んでくるのだ。わたしの力は無限に拡張されていく。マニトゥは大きくなる。今よりもっと」
門倉が恍惚（こうこつ）とした顔で言った。
巨人が駆けた。血みどろの長剣を振りかざして。
が、その剣が門倉に降り降ろされる瞬間、巨人の身体は一瞬にして白銀となって砕ける。
悪魔を強制的にもといた世界へと返してしまう。ムーウィスが使ったものと同じ力を門倉は持っているのだ。
フィネガンの判断は素早かった。
いつの間にかその手に軍用のナイフが握られている。
悪魔召喚師の誇りからか、普段は滅多に使わない。だが、だからといって彼が格闘技に長けていないとは誰も思わないだろう。
ネミッサの手から三つの火球が放たれた。
ごうごうと音を立てながら、それは門倉に向かう。
が、それもまた門倉の胸へと吸収されてあっけなく消えた。
予想していたことだった。
ネミッサはただ門倉の注意を引くために火球を放ったのだった。
その時にはフィネガンが門倉の真横まで来ていた。
腕をまっすぐ伸ばせば脇腹を切り刺すことのできる距離だ。

門倉がサングラスを取った。まるで挨拶でも始めるかのような自然な動きだった。
真紅の眼球が現れた。
赤い光が周囲を包む。
それは暖かく、優しい。
今のサナギにはその正体がわかる。
その赤い光は『死』だ。死と亡びへと誘い込む一本の道だ。
しかしサナギは知っている。死は決して暖かく優しいものではない。
そして恐怖を与える恐ろしいものでもない。
だから——。
サナギはフィネガンの姿を見た。
フィネガンは立ち止まっていた。その口から声が漏れる。
ママ……御免よ……違う、そんなつもりじゃあ……。
引き寄せられるようにフィネガンは門倉へと近づいた。ナイフを持った腕は脇にだらりと垂れている。
門倉が両腕でフィネガンを抱いた。
久し振りに会った息子を抱き締めるように。
プリンか何かのようにフィネガンの胴がくびれ、千切れた。
血と臓物がばらまかれた。

上半身がどうと地面に倒れる。
門倉が腕を離した。
臓物を吹きこぼしながら、下半身が倒れる。
「もういい、やめろ」
サナギは呟いた。
そして駆けた。
手に持つは銃剣。
共に走る者の気配を感じた。
己れを信じろ。目覚めろ、蝉野。
ウラベの声だった。
赤い光はさらに輝きを増した。
声が聞こえた。
始まりもなく終わりもない毎日。閉塞感。息苦しさ。世界の破滅を必要としているのはおまえの心だ。絶対の退屈と、閉じた明日から逃れるために、この世の終わりを望んでいるのはおまえなのだ。
違う。
別の声が聞こえた。
明日は訪れる。そして明日へと旅を続けるのは魂。輝ける日々とは魂が宿り、生きていること

の一瞬。時を止めようとしても、それはただ魂を歪めるのみ。
それはジョシュアの声。
光はさらに輝きを増す。
それは赤い壁となってサナギの行く手を阻む。
声がした。
死を、破滅を前にして生は輝くのではない。死と生は等価だ。それをあるがままに受け入れること。世界がそうあるように、人もまたいまある自分を受け入れること。そうすれば自身が、そして世界が輝いて見える。死に、そして生まれ、魂の旅はそうして続いていくのだ。
これはハリスの声。
光が消えた。
眼の前に門倉がいた。
銃剣を振りかざした。
その刀身が白く輝いている。光を反射しているのではない。刀身自体が光を発しているのだ。
「消えろ！」
銃剣の刃先は門倉の額に突き立った。
そのままぐいと下に引き下ろす。
バターを切るよりも容易く、頭から胸までが一直線に裂けた。
花弁のように四方に裂けた唇から、断末魔の悲鳴が漏れた。

「離れて、サナギ！」
ネミッサは複雑な印を結びながら叫んだ。
「魔力を、結界を、すべての魔界の力を消し去る清浄なるメギドの火よ。我が身より放たれよ！」
純白の光条が門倉へと走った。
遺跡内が真昼のように明るくなった。
門倉の姿は太陽に呑まれたかのように、白い輝きに隠れてしまった。
やがて徐々に輝きは薄れていった。
門倉は踊っていた。手や脚を狂ったように震わせ、首はそれにつれて前後にがくがくと揺れていた。でたらめに動かされる操り人形のようだった。頭部から胸にかけて大きく開いた裂け目から、しゅうしゅうと蒸気が吹き出している。
それはマニトゥの力。
サナギにもネミッサにもそのことがわかっていた。
蒸気の勢いがなくなり、門倉はその場に倒れた。
「終わったのか」
「ええ、後はマニトゥを――」
伏せたままの姿勢から、門倉のからだがぴょんと跳ねた。
その手がサナギの足首を掴んでいた。

門倉が頭をもたげる。裂けた肉の内側には何もなかった。ただ薄闇の中に白い欠片が舞うだけ。

四つに分かれた唇で門倉は言った。

「……イマスグだ。今すぐ……アンテナから世界中にマニトゥの力を………それだけの魂を集めれば……俺も……俺も」

遠くで山鳴りのような音がした。微かだが地面が揺れる。

赤い門倉の眼が明滅していた。

「馬鹿な。あの小僧、最後まで仕留めなかったのか。そんな……世界とつながっている……俺は………」

眼は光を消し、漆黒の闇をのぞかせる単なる穴となった。

首がだらりと垂れる。

サナギはしゃがみこみ、門倉の指を一本ずつ離していった。それは門倉の想いのようになかなか足首から離れなかった。

「門倉の意識が消えたわ。今ならわたしの声も彼に届く。これからはあたしの仕事ね」

立ち上がり、サナギはネミッサを見た。

「お別れなのか」

その手がネミッサの肩を掴む。

「もう、会えないのか」

ネミッサはただ微笑むだけだった。

顎が誰かに持ち上げられたかのようにあがった。

瞳に色が戻る。

唇に赤みが差していく。

その眼が、サナギを見た。

「おかえり」

サナギは言った。

「ネミッサは」

ヒトミの問いに、サナギは天空を指差した。

ヒトミが上を見上げる。

雪のように舞い落ちる、輝く粒子の中、白い翼を持つ何かが上昇していく。

ゆっくりと、翼をはためかせながらそれは遥か高みへと上昇していく。

やがてそれは、マニトゥの頂上とかさなり、きらりと一際大きく輝いて消えた。

巨大な塔に、ぽつり、ぽつり、と穴が開いていく。その黒い斑点は、死病のように塔全体へと広がっていった。その穴はマニトゥに開いているのではない。マニトゥを包む空間そのものに穿たれているのだ。

暗黒が広がっていく。太陽を掻き消す黒雲のようにどんどんと。

やがてマニトゥは闇そのものと化し、不意に失せた。

ネミッサが死の唄を歌ったのだ。

マニトゥは消えた。すべてが終わった。

サナギは人形のように転がっているユーイチを抱き上げ、ヒトミと共に遺跡を出た。

地下の迷宮は、二人を迷わしはしたが、そこにかつてあったような神秘的な何かはなかった。ベニヤ板でできた遊園地の迷路と大差なかった。時間はかかるが、抜け出られないことはない。

地上へと昇るエレベーターはその扉を開いて三人を待っていた。帰りにはあの厳重なロックはされていないようだった。

金属の箱は三人を載せて静かに上昇していく。

フィネガンの手助けがなければ二度とここを出られないと思っていた。そしてサナギは、それでも構わないと思っていた。

世界を救った、などという気持ちはなかった。その代償として失ったものは大きい。ただただ哀しさだけがあった。誰もが犠牲者だった。

門倉やマニトゥでさえも。

一階のホールにたどり着いた。

すぐそこに出口が見えた。

ガラスの扉から街が見える。

相変わらずそれは世界の終わりのように静まり返っていた。

電子音が鳴った。

ヒトミの携帯電話だった。

「……はい」

『今、屋上にいる』

消え入りそうな声だったが、それがリーダーの声であることに間違いはなかった。

「リーダー！」

ヒトミの声を聞いて、サナギは電話に耳を寄せた。

『ランチも一緒だ。……ただし彼は奇病に罹(かか)っているようだ。とにかく……助けが欲しい』

「今行きます」

二人は屋上へと向かった。

その時だった。

床が赤く輝いた。

マニトゥは滅びていなかったのか。

サナギは訪れる何かに身構えた。

サナギの足元から、薄桃色の何かが飛び出した。

「あっ……」

それが始まりだった。

床全体からそれは浮かび上がってきた。

桃色の大きな虫。

何万というキャリアが羽ばたいた。
その内の一匹がすぽりとユーイチの胸におさまった。
ユーイチの眼が開いた。
「あれ、サナギ、ヒトミちゃん……。ここどこ」
ユーイチは辺りを見回し、以前のように幼い子供のように微笑んだ。
壁を抜け、ガラスを越え、天井を通り過ぎ、キャリアは街の中へと散っていった。
それぞれの持つ魂の正しい座を求め。

エピローグ

消毒薬の臭いがきつい。
母親はパイプ椅子に腰かけ、動かぬ息子を見ていた。
彼女には見えなかったが、その時窓ガラスを素通りして一匹の大きな虫が入ってきた。
虫はしばらく包帯だらけのその少年の上を旋回し、それからギプスで固定された胸の中に消えた。
少年の唇が開いた。
弱々しい声が聞こえた。
「お姉ちゃんは」
母親は立ち上がった。
信じられなかった。
奇病は不治の病だと聞かされていた。
少年の視線はしばらく周囲を彷徨い、覗き込む母親の顔を探し当てた。
「真悟……」

母親の眼から涙が流れた。
この数日でめっきり皺の増えたその眼から鼻筋を伝い、顎から雫が落ちた。
少年の顎から肩までを包む白いプラスチックの上にその雫は落ちた。
「お姉ちゃんは」
少年は同じ質問を繰り返した。
嗚咽で喉を詰まらせながら、母親は言った。
「もういないのよ。ずいぶん昔に」
「そう、そうだったんだ」
少年はそう言うと、眼を閉じた。
母親は慌てて看護婦を呼んだ。
その時少年はもう一度口を開いた。
「さよなら、お姉ちゃん」

了

ASPECT NOVELS

デビルサマナー ソウルハッカーズ 死都光臨

1998年4月11日　初版発行

著　者　牧野　修
発行人　浜村弘一
編集人　浜村弘一
発　行　株式会社アスキー
〒151-8024　東京都渋谷区代々木4-33-10
電話　03-5351-8111(代)
発　売　株式会社アスペクト
〒160-0023　東京都新宿区西新宿3-11-20
オフィススクエアBLD新宿5F
アスペクト営業部　電話　03-3299-1493
編　集　第六書籍編集部
デザイン　リックデザイン事務所
写植製版　株式会社パンアート
印　刷　図書印刷株式会社

©Osamu Makino Printed in Japan 1998
©ATLUS 1997
ISBN4-7572-0005-6

定価はカバーに表示してあります

ASPECT NOVELS

すべては麻希の口から語られる！。 もうひとつのペルソナストーリー

女神異聞録。ペルソナ ～シャドウメイズ～

著者／是方那穂子

園村麻希。彼女が己の心の闇を受け入れられなかったが為に、その闇を受け持つものとして生まれた様々な人格たち。悪しきものも、弱きものも、すべてが〃麻希〃であり、それは逃れようのない彼女自身の姿である。己のすべてを呑み込んで生きていくしかない人間の性が、様々な〃麻希〃の口から紡ぎ出される言葉により描かれていく。彼女だけではない、あなたの中にいるであろう〃あなた〃と向き合う時、本当の自分が見えてくるかもしれない……。

新書判／272P
定価 本体850円＋税
ISBN4-[illegible]